

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第17集

# 原川遺跡 I

昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第17集

# 原川遺跡

## I

昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 序

原川遺跡は静岡県掛川市の西方、国道1号線と原野谷川が交差する同心橋一帯に位置している。この地域は今も豊かな水量で流れる原野谷川を始め逆川・垂木川といった中小河川が氾濫や洪水を繰り返しながらも古代から多くの恵みを人々にもたらし、絶えず東西交通路の大動脈の中で生活文化を生み出してきた地域でもあった。付近には弥生時代から奈良・平安時代にいたる遺物を散布する地域として戦前から注目された領家遺跡があり、その西北にあたる原川地区一帯も広く遺物が散布する地域として知られていたが、その実態は不明のままであった。しかし近年袋井バイパスの着工に伴う埋蔵文化財の発掘調査が対岸の袋井市側の国本地区で行なわれ、その結果坂尻遺跡は遠江国佐益郡衙跡と推定されるに至った。掛川市側についても同心橋の掛け替え工事に伴い埋蔵文化財の事前調査として本調査が計画され、この地域に初めて本格的な発掘調査が行われることになった。

調査は5年間にわたって継続され、その結果遺跡は大きな広がりを持つと共に弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の各時代にそれぞれの特色を持った複合遺跡で在ることが明らかになり、各時代の良好な資料を得ることができた。

弥生時代では中期の初頭の丸子式の良好な遺物資料を得ると共に据立柱建物群と土器棺墓群が出士し居住域と墓域が区別された集落が判明した。また土器棺については脂肪酸分析を行いこれが幼児墓棺であることを確認した。

また今後の資料整理に待つところが大きいが古墳時代では集落と共に古墳を発掘しその周溝の中から家形埴輪が出土している。奈良・平安時代では円面鏡、墨書き土器や綠釉陶器を始めとする多量の施釉陶器が出土し、隣接する坂尻遺跡や梅橋北遺跡と類似し律令期の地方官衙の一端を明らかにすることことができた。

また中・近世では東海道に沿った庶民の生活文化の一端と原川町の形成を考古学的に明らかにすることできそうである。このように原川遺跡は各時代において注目すべき成果を持つものであり、今後の整理に大いに期待している。

調査並びに本書の作成に当たっては建設省・掛川市教育委員会・静岡県教育委員会を始めとする関係機関各位に多大な援助・協力を得ている。この場をかりて深くお礼を申し上げるしたいである。また調査を暖かく見守って頂いた地元の方々、寒暑にめげず発掘に当たった作業員の方々、地道な資料整理に当たった研究所の職員、多くの助言・指導を頂いた方々にこの場を借りて深くお礼申し上げたい。

1988年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

## 例　　言

1. 本書は静岡県掛川市領家字原川に所在する原川遺跡の調査報告書の第1分冊である。
2. 調査は昭和57年度～昭和62年度まで袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局からの委託を受け、調査指導機関 静岡県教育委員会・調査調整機関掛川市教育委員会とし、調査実施機関は57年度から財団法人駿府博物館附属静岡埋蔵文化財調査研究所、昭和59年5月1日からは財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が引き継いで実施した。
3. 現地発掘調査は昭和57年9月1日から昭和62年12月30日まで行った。整理作業は62年度から3ヶ年の計画で実施し、62年度 弥生時代、63年度 古墳時代、64年度 奈良・平安時代、中・近世を対象に報告する計画である。
4. 各年次毎の発掘調査の担当者は次の通りである。

昭和57年度	佐藤達雄・及川司
昭和58年度	佐藤達雄・羽二生保・佐藤正知
昭和59年度	梶田博之・羽二生保
昭和60年度	梶田博之・羽二生保
昭和61年度	梶田博之・鈴木基之・宮村典雄・大石泉

本書に係る資料整理は調査第二課 鈴木基之が実施した。
5. 各年次毎に調査概報を提出している（『原川遺跡概報』I～V）。各概報と本書の記述に差がある場合、本書の記述をもって報告とする。
6. 調査の経過については各年度の担当者が作成した概報の記述をできるだけ尊重しているが全体を鈴木基之が整理統一した。

原川遺跡をめぐる地形・地質・土壤学的背景を静岡大学農学部 加藤芳朗氏にまとめて頂き第7章に掲載した。土器館に含まれる脂肪酸の分析は帝広畜産大学 中野益男・幅口剛の両氏および北海道測量団工社総合科学研究所 福島道広 中野寛子 長田正宏の諸氏に委託し実施した。その報告書は報告書第8章に「原川遺跡の土器館に残存する脂肪の分析」として掲載した。また出土した弥生土器の中のモミ状の圧痕について佐藤敏也氏に分析をお願いしその報告を、第9章に掲載した。
7. 第7章～第9章以外の執筆は整理に参加した職員が分担して行った。執筆分担は以下の通りである。

第1章～第4章・第6章第1～4節、6節の一部	鈴木 基之
第5章・第6章第5節、6節の一部・7節～8節、第10章	平野 吾郎
8. 本書の遺物の撮影は池田洋仁氏に撮影を依頼した。
9. 本報告書作成にかかる資料整理・図版作成等については中川里美、望月節子を中心とした福葉多佳子、岩崎和代、今村せつ子、岩辺友子、佐々木富士子、杉山暁子、杉山節子、外岡みつ子、藤川みどり、両角治子、山本節子他の協力を得た。
10. 本書の編集は調査第二課課長平野吾郎の指導、助言のもとに整理を担当した鈴木基之が編集した。

# 目 次

## 序

## 例 言

はじめに	1
第1章 位置と歴史的環境	3
第1節 位置	3
第2節 微地形の観察	3
第3節 歴史的環境	4
第2章 調査の方法	9
第1節 第1次調査	9
第2節 第2次調査	10
第3節 整理作業	11
第3章 調査の経過	12
第4章 層位的観察（基本層序）	21
第5章 造構の概観	23
1. 弥生時代 2. 古墳時代 3. 奈良・平安時代 4. 中・近世	
第6章 弥生時代の造構と遺物	27
第1節 造構群について	27
第2節 集落の立地条件	27
第3節 掘立柱建物跡	29
東側掘立柱建物群	
S H708 S H709 S H710 S H711	
西側掘立柱建物群	
S H712 S H713 S H714 S H715	
第4節 土器棺墓群	36
S F702 S F806 S F1101 S F1102 S F1103 S F1105	
第5節 溝 S D10B16	46
第6節 その他の造構	54
第7節 その他の遺物	59
1、包含層の遺物 2、石器	
第8節 出土遺物の器種構成と編年的位置	63

<b>第7章 原川遺跡をめぐる地形・地質・土壤学的背景</b>	加藤芳朗	65
第1節 原野谷川流域の地形・地質概況		66
第2節 遺跡周辺の地形・地質		67
第3節 発掘区における地質の状況		68
第4節 遺跡環境の形成史		70
第5節 脈状砂（噴砂跡）の産出		72
第6節 近世水田の畦畔の土壤学的復元		76
<b>第8章 原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析</b>	代表 中野益男	79
第1節 土器棺試料		79
第2節 土壤試料の無機成分		80
第3節 残存脂肪の抽出		81
第4節 残存脂肪の脂肪酸組成		82
第5節 残存脂肪のステロール組成		82
第6節 脂肪酸組成からの数理解析		87
第7節 脂肪酸組成による種特異性相関		88
第8節 総括		89
<b>第9章 原川遺跡出土の圧痕</b>	佐藤敦也	91
<b>第10章 まとめ</b>		93
第1節 遺跡の立地について		93
第2節 検出された遺構		93
第3節 土器棺墓群		94
第4節 遺跡の年代		94
第5節 原川遺跡出土の土器について		94
<b>主要参考文献</b>		

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡周辺地形図 (1 : 12500)	2
第 2 図	原川遺跡の位置と周辺遺跡の分布図 (1 : 25000)	5
第 3 図	原川遺跡発掘区グリッド配置図	11
第 4 図	調査区土層模式図	22
第 5 図	弥生時代遺構全体図 (1 : 500)	25・26
第 6 図	弥生時代遺構概念図 (1 : 800)	28
第 7 図	掘立柱建物跡遺構実測図 1	30
第 8 図	掘立柱建物跡遺構実測図 2	31
第 9 図	掘立柱建物跡柱穴出土遺物拓影	32
第 10 図	掘立柱建物跡遺構実測図 3	33
第 11 図	掘立柱建物跡遺構実測図 4	34
第 12 図	土器棺墓 S F 702平面図	36
第 13 図	土器棺 S F 702出土遺物復元図	37
第 14 図	土器棺墓 S F 806平面図	38
第 15 図	土器棺 S F 806出土遺物復元図 (A)・(B)	39
第 16 図	土器棺墓 S F 1101平面図	41
第 17 図	土器棺 S F 1101出土遺物復元図	42
第 18 図	土器棺墓 S F 1102平面図	43
第 19 図	土器棺 S F 1102出土遺物復元図	43
第 20 図	土器棺墓 S F 1103平面図・出土遺物	44
第 21 図	S F 1105 平面図(上)・出土遺物(下)	45
第 22 図	S D10B 16 遺構平面図	47
第 23 図	S D10B 16 出土遺物復元図 1	48
第 24 図	S D10B 16 出土遺物復元図 2	49
第 25 図	S D10B 16 出土遺物拓影その 1	50
第 26 図	S D10B 16 出土遺物拓影その 2	51
第 27 図	S D10B 16 出土遺物拓影その 3	52
第 28 図	S D10B 16 出土遺物拓影その 4	53
第 29 図	S X703 平面図	55
第 30 図	S X703 出土遺物拓影	55
第 31 図	S X704 平面図	56
第 32 図	S X704 出土遺物拓影	56
第 33 図	S X705 平面図	57
第 34 図	S X709 平面図・出土遺物	57
第 35 図	S X802 平面図	58
第 36 図	S X705・S X709・S X802出土遺物拓影	58
第 37 図	包含層出土遺物復元図	59
第 38 図	包含層出土遺物 拓影その 1	60

第 39 図	包含層出土遺物 拓影その 2	61
第 40 図	包含層出土石器 実測図	62
第 41 図	原野谷川・太田川流域の地形・地質図	65
第 42 図	原川遺跡周辺の地形・地質図	66
第 43 図	国道 1 号線沿いの地質断面図	68
第 44 図	第 8 区 A 東北部のスケッチ	69
第 45 図	基盤砂礫層頂部の等高線と脈状砂の方向	69
第 46 図	弥生中期初頭の土器棺（イ）を切る脈状砂	72
第 47 図	第 7 区 I 21～J 21 の脈状砂の平面パターン	72
第 48 図	第 10 区 B 第 4 トレンチ西壁の脈状砂	73
第 49 図	第 16 トレンチにおける脈状砂と旧逆川河道	73
第 50 図	第 16 区 A トレンチの脈状砂	74
第 51 図	アスファルト路面上に生じた展張亀裂	74
第 52 図	脈状砂が生成する立地の模式図	75
第 53 図	第 14 区 K 30 南壁のマンガン斑のふくらみ	76
第 54 図	第 15 区 F 35 北壁スケッチ	77
第 55 図	原川遺跡土器棺内土壤採取地点	79
第 56 図	その 1 土器棺内から採取した土壤の重金属分布	80
	その 2 土器棺内から採取した土壤および対照区土壤の重金属分布	80
第 57 図	土器棺内から採取した土壤および対照区土壤の燐分布	81
第 58 図	その 1～その 2 土器棺に残存する脂肪の脂肪酸組成	83
	その 3～その 4 土器棺内土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成	83
	その 5 土器棺内土壤および対照区土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成	84
	その 6 土器棺内から出土した土器片に残存する脂肪の脂肪酸組成	84
	その 7～その 8 土器棺内から出土した遺物に残存する脂肪の脂肪酸組成	84
第 59 図	その 1 土器棺に残存する脂肪のステロール組成	85
	その 2 土器棺内土壤に残存する脂肪のステロール組成	85
	その 3 土器棺内土壤・対象区土壤および土器棺から出土した土器片に残存する脂肪のステロール組成	85
	その 4 土器棺から出土した遺物に残存する脂肪のステロール組成	85
第 60 図	土器棺土壤及び土器棺内から出土した土器片に残存する脂肪酸組成樹状構造図	87
第 61 図	土器棺・土器棺内土壤および土器棺から出土した土器片に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	88
第 62 図	土器棺内の高級脂肪酸およびコレステロールの分布状況	89
第 63 図	圧痕のある土器 その 1	91
第 64 図	圧痕のある土器 その 2	91
第 65 図	圧痕のある土器 その 3	92

## 挿表目次

第1表	遺跡地名表	6
第2表	掘立柱建物跡 柱穴一覧表	35
第3表	その1～その2	
	原川遺跡の土器および土壤の残存脂肪抽出量	81
第4表	その1	
	土器棺および土壤試料に分布するコレステロールとシスティロールの割合	86
	その2	
	土壤試料、出土土器片および遺物に分布するコレステロールと シトステロールの割合	86

## 図版目次

### 図面

図面1 周辺旧地形図(1:20000 明治23年 陸地測量部作成)

### 写真

- 図版1 遺跡遠景(航空写真 昭和51年5月22日撮影)  
図版2 遺跡遠景(アドバルーン 昭和59年撮影)南方より  
図版3 弥生面発掘区位置図(航空写真 昭和58年撮影)  
図版4 7区弥生面東部分全景  
図版5 7区弥生面 1. 西半分 2. 東半分  
図版6 7区 掘立柱建物 1. SH708 2. SH709 3. SH710  
図版7 7区 掘立柱建物 1. SH711 2. SH712 3. SH713  
図版8 7区 掘立柱建物 1. SH714 2. 土器棺墓 SF702  
図版9 土器棺墓 SF806 1. 出土状況 2. 合わせ口部分  
図版10 11区全景 1. 11区A 2. 11区B・C  
図版11 土器棺墓 SF1101 1. 検出時 2. 解体途中 3. 下側部分  
図版12 土器棺墓 1. SF1102 2. SF1103 3. SF1105  
図版13 SD10B16 検出状況 1. 第10区B付近 2. 第10区B拡大  
図版14 SD10B16 検出状況 1. 第10区A西側部分 2. 第10区A東側部分  
図版15 1. SX703 2. SX704 3. SX709  
図版16 復元遺物 1. 壺(土器棺SF702) 2. 壺(土器棺SF1101)  
図版17 復元遺物 1. 壺(土器棺SF806A) 2. 壺(土器棺SF806B)  
図版18 復元遺物 1. 壺(土器棺SF1102) 2. 大型広口壺(SD10B16)  
図版19 復元遺物 1. 小型壺(8区A包含層) 2. 小型壺(10区B包含層)  
3. 中型壺(SD10B16)  
図版20 復元遺物 1. 壺体部(包含層) 2. 壺体部(SD10B16)  
図版21 石器

# はじめに

一般国道1号（袋井バイパス）は、掛川バイパスの終点に当たる掛川市領家を起点とし、磐田市三ヶ野までの総延長9.14kmの道路である。袋井市国本までの4.0kmは現道を拡幅（6車線化）し、それより磐田バイパス起点部に接続する5.14kmは、袋井市の市街地を迂回するルートで水田地帯を走る。昭和44年の東名高速道路の開通や一般国道1号周辺を中心とした地域開発の進展に伴う交通量の急激な増加によって慢性的な渋滞は特に掛川バイパス・磐田バイパスが開通したこともあり、袋井市内に集中していた。バイパス建設の事業は、昭和39年度から調査を開始し昭和48年度にはその計画が示されている。

バイパス内  
的主要遺跡

一般国道1号袋井バイパスに伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和55年から袋井市教育委員会によって袋井地区坂尻遺跡の発掘調査が行なわれている。

坂尻遺跡からは古墳時代から奈良・平安時代さらには一部は鎌倉時代に至る集落跡が発掘され、特に奈良・平安時代には墨書き土器・綠釉陶器・灰釉陶器を多量に伴う掘立柱建物跡群・溝等が検出されており、これらの遺構群は遠江国佐野郡衙跡の一部と推定されている。また西側では土橋遺跡・玉越遺跡等の調査がすでに終了しており、土橋遺跡では主として弥生時代の集落が発見されており、玉越遺跡では鎌倉時代の豪族の居館跡と思われる土壘・溝で囲まれた掘立柱建物跡群が検出されるなど、多大の成果をあげている。

坂尻遺跡

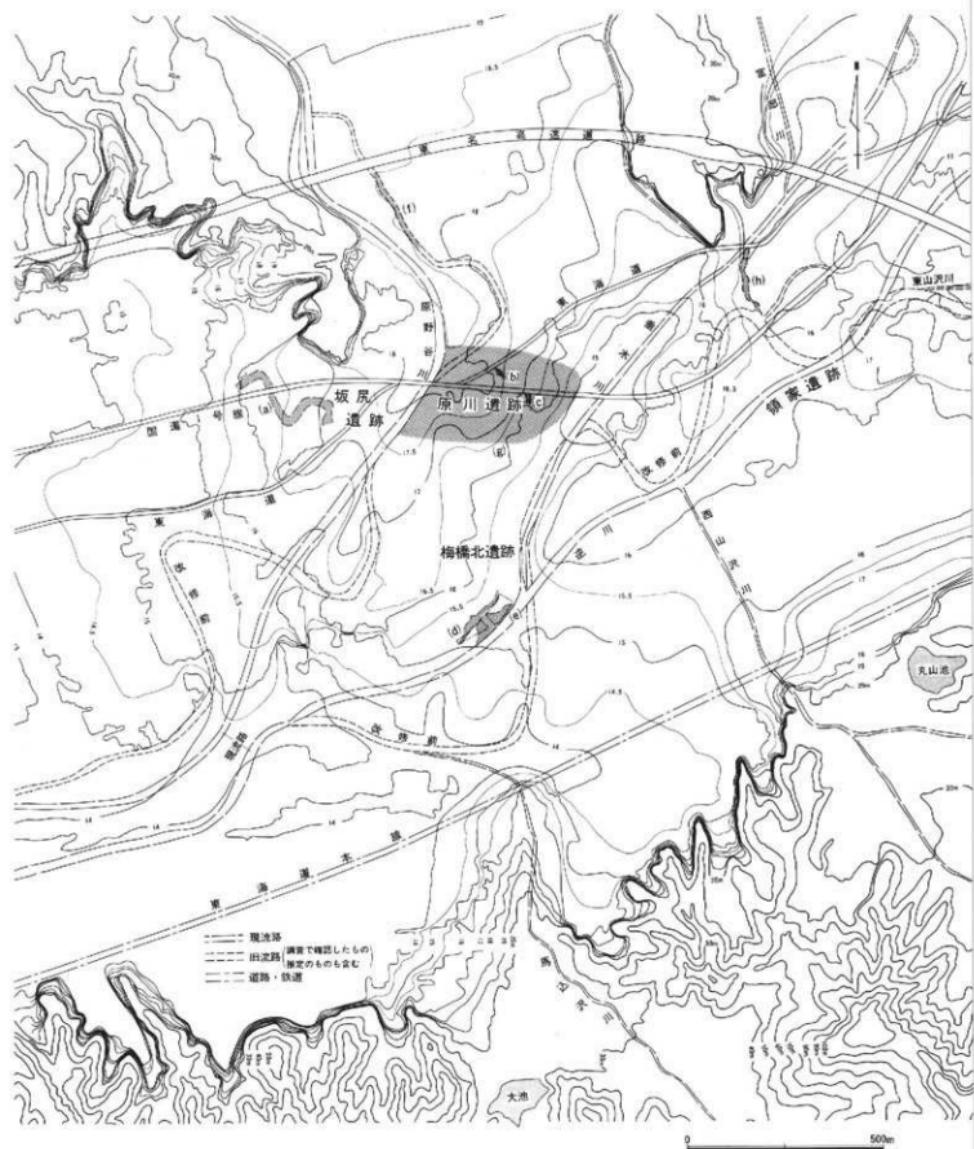
袋井バイパスの掛川地区については、原野谷川にかかる同心橋の付け替え分の工事が地震対策に伴い計画されて、早急に埋蔵文化財の調査が必要になった。昭和57年6月から建設省浜松工事事務所・県教育委員会文化課、掛川市教育委員会の三者で遺跡の存在を確認し合い、その取り扱いについて協議を重ねた。その結果まで遺跡の性格を把握するための第一次調査を実施し、その結果をみて、平面調査に移行することとした。発掘調査の主体は、掛川市教育委員会が当たることとなったが、他の発掘調査が山積みされている掛川市教育委員会では対応不可能であったため、協議の結果現地調査には昭和57年4月に新発足した（財）駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所が当る事になり、実際の調査に向けての調整・協議が行われた。昭和57年9月1日に調査委託契約が締結され、諸準備のうち9月9日より現地作業に着手した。

土橋遺跡  
玉越遺跡

調査は原野谷川沿いからバイパス起点部に向かい東進する形で進められた。原川遺跡の範囲と考えられる原野谷川と垂木川の間では第1次調査の結果、各時代の遺構と遺物が出土した。従って全区間を1区～15区までに分け第2次調査が行われた。また垂木川の東については南側に隣接する領家遺跡の延長部分が及んでいる可能性があり、第1次調査を60～62年度にかけて行った。その結果領家遺跡が連続する遺物包含層は検出されなかったが、一部で水田跡が確認されたことによって領家地区で第2次調査を実施した。

原川遺跡

このようにして開始された袋井バイパス（掛川地区）の調査は、昭和59年5月以降新たに発足した財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に引き継がれ、原川遺跡部分については昭和61年度、領家遺跡部分については昭和62年度にそれぞれ現地調査を終了し整理作業に当ることになった。



第1図 遺跡周辺地形図 (1:12500)

# 第1章 位置と歴史的環境

## 第1節 位 置

国道1号を掛川市内から西に向かい袋井市との境界である原野谷川の手前一帯に本遺跡は位置する。行政区画は静岡県掛川市領家字原川323番地他である。この地域は現在でも東名高速道路・東海道新幹線・東海道本線が指呼の間に集中する東西交通の要地であり、原野谷川がこれらの主要幹線を南北に横断しながら南流している。この川は太田川の有力な支流として掛川市の北端の八高山南西麓に源を発し、蛇行しつつ各所に川岸段丘や沖積地を形成している。本遺跡は原野谷川が形成した沖積地に位置するが、北西には現在の原野谷川の対岸にまで各和丘陵の段丘末端が続いている。古代より原野谷川とその支流は幾たびか流路を変遷させたことが、現地に残る蛇行流路の跡や発掘調査の結果から推定されており、遺跡はそれらによって形成された自然堤防の上に立地する。また南東を流れる逆川や垂木川によりつくりだされた後背湿地により原川遺跡の東限が規定される。

東西交通の  
要 地

沖 積 地

## 第2節 微地形の観察

原川遺跡は原野谷川の形成した沖積地に立地する。原川遺跡の周辺では原野谷川の西側に各和の段丘が伸び、また東側には水田地帯を隔てて岡津の段丘が伸びている。現在の原野谷川は原川遺跡の周辺で南から南西の方向に大きく流路を変更し、小笠丘陵に沿って西進する逆川と合流している。現在の原野谷川、逆川、垂木川は大正から昭和にかけての大改修でそれまでの流路を所々で変更したものであり、取り残された流路跡が地形図上でも判別できる所がある。

原 野 谷 川

遺跡周辺地形図(第1図)では改修以前の各河川の旧流路の推定に努めた。流路(a)・(b)・(c)・(d)・(e)は発掘調査で確認されたものである。流路(a)は坂尻遺跡の調査で加藤芳明氏が推定された旧原野谷川の支流の「古名栗川」で弥生時代中期にはすでに存在し古墳時代中期から後期には完全に埋没されたと考えられる<sup>(1)</sup>。流路(b)・(c)は原川遺跡の調査で昭和58~59年度に発掘された旧原野谷川の支流とみられるもので、古墳後期より古い流れと、古墳時代後期以後平安時代後期ごろまでの遺物を含んで新しい流れに分かれる。(e)・(d)は昭和62年度梅橋北遺跡で調査された旧流路である。(e)は弥生時代中期から古墳時代までの流路である。(d)は上層に平安時代、下層に古墳時代の流れを持つと考えられる。

旧 流 路 の  
推 定

流路(f)は原川の集落の北側にみえる改修前の原野谷川の蛇行の跡で、航空写真より推定した。この(f)の流れはそのまま現在の流路の方向である西に向かうが、かつては(b)の方向である南東に向かっていた可能性もある。(g)はまったくの推定であるが各和の段丘の末端部は古代においては等高線17m、流路(c)付近まで伸びておりその東端を蛇行して西南に流れる流路の存在が(b)・(c)とのつながりからも考えられる。そのさい西にそのまま向かう可能性とさらに南へ蛇行して梅橋北で調査された流路(d)の方向に向かう事も考えられる。いずれにせよ多量の灰釉陶器を含む流路(d)の上流の方向は徳泉・原川の方向に求めなければならない。また流路(h)は改修前の垂木川と逆川の合流点の可能性を推定したものである。

段 丘 の  
末 端 部

この地域の流路跡の変化については、昭和59年度の掛川市教育委員会による梅橋北遺跡の報告書の中で松本一男氏により推定がなされ、各遺跡の立地については河川が描く弧の内側、標高16~17m付近に立地する事が指摘されている。第1図をみると現在の北原川、名栗、原川、徳泉の各集落は原野谷川の形成した自然堤の海拔16m以上に、また領家、網川の集落は逆川の形成した自然堤の海拔16m以上にそれぞれ立地している事がわかる。これらの両河川の自然堤の間に挟まれた三池橋周辺は典型的な後背低地であり、一旦大雨があれば水が逆流して氾濫しなかなか引かない地域となる。近世以降の東海道はこうした三池の周辺の低地や旧逆川の蛇行を避けるようにして、岡津、原川、名栗の各集落が位置するほぼ16mから18mの海拔の最も高い部分をつなぐ様にして形成されている。また大正期の河川改修で垂木川と逆川をつなぐ掘削をした時にはこの三池周辺の低地を選んでいる。

### 第3節 歴史的環境

從来、原野谷川流域では古墳や横穴の報告は多かったが、それらの成立基盤となった弥生時代からの集落遺跡の調査例は少なかった。しかし近年掛川市教育委員会および袋井市教育委員会による発掘調査で丘陵上の集落の様子がだいに明らかになりつつあり、沖積平野の中に弥生に本遺跡が成立する環境を考える手がかりとなる。

#### 縄文晚期の遺跡立地

縄文晚期の原野谷川流域の遺跡には、上流より萩・萩ノ段・裏門・吉岡下ノ段・女高II・瀬戸山IIなどがあげられる<sup>(2)</sup>。これらは集落とされている萩野段遺跡を除けば散布地が多く、内容は不明な点が多い。遺跡はいずれも段丘上に成立しており、沖積平野の微高地に立地しているものはない。この中で吉岡原で吉岡下ノ段・女高II遺跡は縄文晚期で中断する。弥生中期から古墳後期まで継続するのは瀬戸山II遺跡とみられる。原川遺跡により近い高田原・各和原には縄文晚期の遺跡は今のところ確認されていない。

#### 弥生中期

弥生時代中期には、原川遺跡の周囲にも遺跡が増加し始める。吉岡原や高田原にこの時期の明確な遺跡が少ないのに対し、原川遺跡を見おろすように広がる各和原に山下・金鉢原遺跡、それより西側に苔ヶ谷の東山遺跡などが成立する。金鉢原遺跡は標高43~50m内外の各和原上位段丘の中に位置し、茶畑の改植に伴う発掘調査により中期前葉に属する遺物が出土しており、中期初頭の成立と考えられている<sup>(3)</sup>。隣接する東山遺跡は谷の奥まった部分の尾根上に立地し櫛田式土器や磨製石斧が採集されており中期中葉の集落の存在が推定されている<sup>(4)</sup>。また山下遺跡からは中期前葉の丸子式あるいは中葉の櫛田式土器を伴う方形周溝墓群が発掘されている<sup>(5)</sup>。これらは中遠地方に出現する最も初期の段階の方形周溝墓であるが、こうした墓域を形成する集落の解明はこれから課題である。また同じく墓域としては、南方に当たる小笠山北西山麓の丘陵上の愛野向山遺跡で弥生中期中葉の壺形土器を出土している方形周溝墓がある<sup>(6)</sup>。その他可睡・油山丘陵の西側の太田川流域になるが太田川の旧河道により形成された微高地上に立地する袋井市鶴松遺跡は弥生中期前半から古墳時代へ継続する当地域屈指の大遺跡であるが、先年実施された発掘調査により溝から出土した丸子式土器が報告されており、中期前葉に遺跡が成立していることを示している<sup>(7)</sup>。

#### 丸子式土器

古地上の遺跡

弥生後期になると集落の数は急激に増加する。段丘上の主なものでは吉岡原・瀬戸山遺跡、高田原の女高遺跡、各和原の金鉢原遺跡などがあげられる。いずれも堅穴住居跡や掘立柱建物跡を検出している。また女高遺跡の様に拠点的集落とも言える広がりを持つものもあり、古墳時代中期にまで継続するものがある。沖積平野では逆川の自然堤に中



第2図 原川遺跡の位置と周辺遺跡の分布図 (1 : 25000)

第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所 在 地	時 代	種 別	立地(地目)	遺 槽	遺 物	備 考
104	中 条 遺 跡	静岡県掛川市高田字中条	國文中期～古墳前期	墓地	台地(河岸段丘面)	豊穴式住居跡、溝状遺構、土坑、小穴、打斧、石器	報告書(昭和57年)	
105	高田上ノ段遺跡	× × 高田字大堀	弥生後期～古墳前期	集落	台地(河岸段丘面)	豊穴式住居跡、溝状遺構、土坑、小穴、	報告書(昭和61年)	
110	春 林 遺 墓	× × 吉岡字庵ノ下	古墳中期	墓地	台地(緩斜面)	軋劍、鏡、針、環形土器、彫形埴輪	静大遺跡(昭和53年)	
114	越 戸 山 口	× × 吉岡字花ヶ岳	國文中期～中・後 奈良中期～古墳前期	散布地	×(河岸段丘面)	打斧、鏡等、鐵文式土器片、弥生式土器 片、古式土器碎片	報告書(昭和61年)	
115	越 戸 山 I	× × ×	奈良中期～中・後 奈良後期～古墳前期	墓地	×( × )	豊穴式住居跡、獨立住居跡、土坑、小穴、 圓筒形土器、鐵文式土器片、石器、石斧、石刀	報告書(昭和62年)	
112	吉 国 原 遺 跡	× × 吉岡字道下	國文中期～古墳前期	集落	×(縁迹面)	打斧、鐵文式住居跡、圓筒形土器、土坑、 土器、小穴、弥生土器片	報告書(昭和62年)	
122	女 高 I 遺 跡	× × 吉岡字女高	弥生中期～古墳前期	集落、墓地	×(河岸段丘面)	豊穴式住居跡、小穴、土坑、方形周溝墓 、弥生土器片	報告書(昭和60年)	
123	行 人 墓 古 墓	× × ×	古墳	墓地	台地(河岸段丘面)	前方後円墳	報告書(昭和50年)	
124	女 高 II 遺 跡	× × ×	國文後期 弥生後期～古代	散布地	台地(河岸段丘面)	鐵文式土器片、弥生土器片、土師器片、 須惠器片	報告書(昭和48年)	
126	黒 墓 古 墓	× × ×	古墳中期	墓地	台地(河岸段丘面 盛坡面)	前方後円墳、獸形鏡、勾玉、菅玉	黒塚各遺跡報告 (昭和44年)	
134	金 箕 原 遺 跡	× × 各和字金箕原	弥生中期～古墳前期	集落	台地(平緩面)	豊穴式住居跡、打斧、弥生土器、古式土 器碎片	報告書(昭和57年)	
135	各 和 金 箕 古 墓	× × 各和字金箕	古墳中期	墓地	×(縁迹面)	前方後円墳	報告書(昭和56年)	
191	奥 ノ 草 墓 古 墓	× × 同岡字奥ノ原 御野町	古墳	墓地	×( × )	円墳、鏡		
193	西 国 津 古 墓	× × 同津字屋江	古墳	墓地	×( × )	圓錐、束角銛刀子、ガラス小玉、須惠器	東名(昭和41年)	
194	同 芬 横 穴 石 刀	× × 同津東谷田	古墳後期	墓地(横穴)	山地(斜面)	土器群、須恵器、铁刀、刀子、鏡		
197	向 山 古 墓 部	× × 同津字向山	古墳	墓地	台地(梯辺面)	円墳、鐵劍、鉄劍、鏡、合子、鐵骨器	東名(昭和41年)	
188	東 国 遺 跡	静岡県掛川市御手原字源川	弥生中期～近世	墓地	平地	獨立柱建物、土器堆集	報告書(昭和57～61年度)	
208	本 村 古 墓 部	× × 高野町字本根谷	古墳	墓地	山地(尾根)	円墳、鐵劍、軋劍、ガラス玉	報告書(昭和54年) 東名(昭和41年)	
213	東 里 ケ ベ 古 墓 部	× × 高野町字東里ヶベ	古墳中期	墓地	×( × )			
219	大 谷 代 横 六 部	× × × 大谷代	古墳後期	墓地(横穴)	×(斜面)		報告地(昭和52年)	
220	南 沢 横 穴 石 刀	× × 高野町字南澤	古墳後期～古代	墓地(横穴)	×( × )		報告地(押出横穴群)	
227	梅 樹 北 遺 跡	× × 徳良字野原	弥生中期～中世	東南	低地(高高地)	弥生土器、土器群、須惠器、山赤碗、灰 陶、綠釉陶器	報告書(昭和60年) 報告書(昭和60年)	
228	梅 樹 墓 遺 跡	× × 梅樹	弥生後期	散布地	低地	弥生土器片	報告地(昭和54年)	
230	相 家 遺 跡	× × 相家	弥生中期～近世	散在地	×	弥生土器、灰陶陶器、溝状遺構	史文部省第2号3・4号 (昭和55年) 掛川市歴史文化財(昭和58年)	
232	唐 亂 遺 跡	× × 唐乱	弥生後期、古墳	散布地	×	弥生土器、須惠器片		
236	上 山 横 穴 遺 跡	× × 高野町字中尾	古墳後期	墓地(横穴)	山地(斜面)	軋刀、須惠器、人骨		
112	国 本 II 遺 跡	袋井市広字国上賀名	古墳～近世	散布地	低地(高高地)	須惠器、土器群、中・近世陶器		
69	東 山 遺 跡	× × 久野山	弥生中期～古墳前期	集落	丘陵頂部	豊穴住居跡、溝状遺構、土坑、石斧、 弥生土器	「袋井市史」通史編 昭和65年	
95	山 下 遺 跡	× × 国本郡北瀬川	弥生～古墳	集落	丘陵頂部平坦面	方形周溝墓群	報告書(昭和59年)	
99	宇佐八幡I号墳	× × 本字岡山	古墳	墓地	丘陵頂部	前方後円墳	報告書(昭和56年)	
104	流 亂 山 古 墓	× × 国本字毛山	古墳	墓地	丘陵頂部平坦面			
110	板 尾 遺 跡	× × 国本字板尾	弥生～後世	集落(市街)	低地(高高地)	獨立柱建物、井戸、櫛、軋劍、須惠器、軋刀 木履、須惠器、土器群、陶器	概略(1～4次)等	
179	愛 寶 向 山 III 遺 跡	× × ×	國文～古墳	集落	丘陵頂部斜面	豊穴住居、方形周溝墓、小範圍、須惠器	袋井市教委報告 (昭和60～61年)	
182	愛 寶 向 山 IV 遺 跡	× × 同前	國文～後世	散布地	丘陵頂部	土坑、弥生土器、須惠器、一石五輪塔、 中・近世陶器		
187	若 作 古 墓 部	× × 村松字若作	古墳	墓地	丘陵頂部	円墳		
90	菅 ヶ 谷 横 六 部	× × 村松字菅ヶ谷	古墳後期	墓地	丘陵斜面	横穴	報告地(昭和54年)	

注 ① №欄の数字は「静岡県文化財地図・地名表II(昭和64年3月発行予定)」に準じている。

② 備考欄の略称は次の通りである。県地: 静岡県遺跡地名表、東名: 東名高速道路開係埋蔵文化財発掘調査報告書

期中葉に成立した領家遺跡があり、古墳時代後期さらには奈良～平安時代にまで継続している。また小笠丘陵上の愛野向山遺跡では弥生後期を中心として数多くの竪穴住居跡・方形周溝墓・木棺墓・土坑墓等が調査され、小銅鐸も出土している<sup>(8)</sup>。

古墳時代中期の原野谷川中流域から逆川にかけては金塚古墳（全長60m）・高田瓢塚古墳（全長63m）・吉岡大塚古墳（全長55m）などの前方後円墳や春林院古墳（径30m）等の円墳が存在することは良く知られている。各和金塚古墳・吉岡大塚古墳・高田瓢塚古墳では共に埴輪が採取されている。またこの周辺には岡津古墳に見るように5世紀と推定される小円墳が多数存在していたよう、女高遺跡あるいは原川遺跡でも既に墳丘を削平された円墳が検出されている。これら和田岡古墳群の全盛期は、ほぼ5世紀初めから6世紀前半と考えられる。また前方後円墳と推定される袋井市権現山古墳にも円筒埴輪が出土している<sup>(9)</sup>。

古墳時代におけるこの地域の最大の特色は古墳後期になると大規模な横穴群が密集する点にあり、全体的には6世紀中期から始まり7世紀前半に最盛期を迎えている<sup>(10)</sup>。岡津横穴群が原川遺跡の背後にあり、隣接区域にこの地域最大の横穴群である管ヶ谷横穴群がある。位置的にも年代的にも原川遺跡あるいは坂尻遺跡の古墳時代集落を形成した人々との関連を検討する必要がある。

奈良時代から平安時代にかけては原野谷川の西岸に佐野郡衙跡と考えられる坂尻遺跡があり、多数の掘立柱建物跡群・墨書き土器、その他和銅開珍・帶金具・銅印・分銅などを検出している<sup>(11)</sup>。南に隣接する梅橋北遺跡からも、旧河川埋没土中より多量の綠釉陶器・墨書き土器・灰釉陶器・風字刷など平安時代前期を中心とした遺物が出土しておりこれに関係する遺跡と推定されている<sup>(12)</sup>。これらの遺跡の内容と原川遺跡の奈良・平安時代の遺物には共通する点が多く、これらが相互に密接な関係があった事が知られる。

中世になると鎌倉時代には曾我に小松厨が、また室町時代には曾我庄が成立した事が知られているがその具体的な姿についてはよく解っていない。原野谷川流域の中世城郭については殿谷城跡の調査が行われ、築城年代は15世紀末と推定されている<sup>(13)</sup>。この地方での中世遺跡の発掘例が少ないだけに、天目茶碗や瀬戸・美濃系陶器は原川遺跡の出土遺物と比較できる。また文亀年間（1501-04）には北原川に原川大和守が原川城を築いており、この城は徳川氏の遠江攻略の頃まで続いたとされており、原川の町並の形成への影響も考えられる<sup>(14)</sup>。永禄11年（1568）徳川家康は、掛川城に逃れた今川氏真を攻略する附城のひとつとして各城や岡津砦を築いている。

中世末期から近世初頭にかけて原川は賑わいをみせる。慶長9年（1604）の検地帳には年貢負担者64人の宅地や田畠があり、城主よりの文書にも早くから「原川宿」と記されたと言う<sup>(15)</sup>。原川は東海道を旅する人馬が休息する「立場」のひとつであった。こうした「立場」の中には宿場のような賑わいを見せ宿を兼ねるところもあり、幕府は江戸時代中期以降本宿が賣えないように間の村での宿泊等を禁ずる事をたびたびしている。そのせいか19世紀初頭の原川は、村高25石余、戸数46、人口194人とあまり発達したようでもない<sup>(16)</sup>。絵地図等によれば、金西寺・感道寺（現存せず）・北野天神社等の寺社がある<sup>(17)</sup>。岡津善光寺と金西寺との間は大変な低地で降雨毎に東海道は浸水し渡船の必要もあった。また昨年度までに調査した9区・12区付近にあたる同心橋のたもとには「立場」としての椎木茶屋があり、その向いには高札場も置かれた。

明治元年掛川城主大田備中守は、明治天皇東幸のため、特にこの椎木茶屋のあった場所

和田岡  
古墳群

横穴群

佐野郡衙

坂尻遺跡

梅橋北遺跡

曾我庄

原川城

「原川宿」  
立場

間の村

椎木茶屋

に八戸二間ほどの小休所を設けてその用に供している<sup>(18)</sup>。原川町は明治22年(1889)に曾我村と合併、昭和29年(1954)に、曾我村は掛川市に合併された。

**水 寄** 原野谷川・逆川・垂木川が合流するこの地帯は昔より水害に悩まされ続けた。これは各河川が共に蛇行が激しい上に幅が狭いため、豪雨の時にはすぐ氾濫して田畠も一面湖水の様になり多くの人家田畠に被害を与えたためであった。特に明治43~44年の大洪水は掛川町や大池村をはじめ曾我村でも床上浸水「尺余」に達した。加えて大正3年の大洪水は多くの堤防橋梁を流出させ、これによる凶作も重なり、曾我・大池・和田丘・垂木の各村は大被害をうけた。こうした水害は重要な幹線である東海道線をはじめこの地方の交通網を破壊途絶させるものであった。こうした惨状を防止するためこの地域でも太田川と一緒に大改修工事が大正7年より開始され現在の景観を形成することになった<sup>(19)</sup>。

#### 引 用 文 献

- (1) 加藤 芳朗 「坂尻遺跡をめぐる地形・地質学的背景」『坂尻遺跡』 自然科学編 袋井市教育委員会 1985
- (2) 掛川市教育委員会 『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ・Ⅱ』 1984
- (3) 岩井 克允他 『金鏡原遺跡一発掘調査概報』 1982  
『高田金鏡原遺跡』 掛川市教育委員会 1984
- (4) 袋井市史編纂委員会 『袋井市史 通史編』 1983
- (5) 松本 一男・前田 庄一・松井 一明 『山下遺跡』 掛川市教育委員会・袋井市教育委員会 1984
- (6) 松井 一明・吉岡 伸夫 「6・愛野向山遺跡」『昭和62年度 埋蔵文化財発掘調査協会年報 報告 静岡の現像をさぐる』 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1987
- (7) 永井 博 『鶴松遺跡Ⅱ』 袋井市教育委員会 1987
- (8) (7) と同じ
- (9) (4) と同じ
- (10) 平野 吾郎 「原野谷川流域の古墳群について」 滝口宏先生古稀記念考古論集 『古代探案』 1980
- (11) (4) と同じ
- (12) 松本 一男 『梅橋北遺跡』 掛川市教育委員会 1985  
平野 吾郎・佐藤 正知他 『梅橋北遺跡』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988
- (13) 松本 一男 『殿谷城址遺跡』 発掘調査報告書 掛川市教育委員会 1985
- (14) 静岡県教育委員会 『静岡県の中世城館跡』 1981
- (15) 掛川誌 丙編 『掛川誌叢』 五巻 『東海文庫』 第8編
- (16) (15) と同じ
- (17) 金谷、日坂、掛川 『東海道分間延絵図』 第9巻 1980
- (18) 静岡県 『明治天皇聖蹟』 静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告(特編号) 第11集 1937
- (19) 鈴木 英作 小澤 金作 『原野谷川・逆川改修記念沿革誌』 1983

## 第2章 調査の方法

原川遺跡からは部分的には遺物が採集された事があるが、その年代、範囲あるいはその性格等も不明確であったこと、さらに今回の調査対象区域が道路用地内幅30~40m・総延長380mと細長いこともあり、調査は1次調査・2次調査と2回に分けて実施することにした。1次調査は、路線内における遺跡の範囲とその性格の把握を目的として行なった。2次調査はそれに基づいて必要な部分の全面的な調査を行なった。

現地調査が数年にまたがる事が予測されることから各年度毎に「調査概報」を作成すると共に、本格的な資料整理と報告書の作成は現地調査終了後に実施することにした。現地調査は昭和57年度から開始し、昭和61年度までの5年間を要して、全城16000m<sup>2</sup>余の面積を発掘した。資料整理は現地調査が終了した昭和62年度から開始し3年間で終了する予定である。また調査対象区域の東端は字領家地内であり古くから有名な領家遺跡の一部と推定された。従って昭和62年度に実施したこの地域は、原川遺跡に含めず領家遺跡として別にし、報告書も領家遺跡として独立して発行する予定である。

調査の設定

現地調査

報告書の構成

領家遺跡

### 第1節 第1次調査

第1次調査の対象区域には、路線のセンターラインを基準線として15m方眼の区画を設定した。試掘グリッドは、基本的にはその区画の東南隅に2m×2m(一部4m×4m)のものを設定した。しかしながら、調査当時まだ残っている家屋や調査のできない部分もあり、現地の状況により試掘グリッドの位置をかえた場合もあった。

グリッドは東西方向に算用数字、南北方向にアルファベットを冠し、例えばA-19という形で位置表示できるようにしたが、垂木川以東では南北方向のアルファベットをさらに北に向かってA'~H'という表示で付け加えた。

掘り下げはすべて手掘りで行い、土層の状態、包含層の有無、遺物の出土状況等を観察し、土層図・平面図の製作、写真撮影による記録を行った。基本的に遺構を確認した面で掘り下げをやめ、遺構調査は後の本調査を考慮して行わなかった。また遺構が確認されなかつた部分では、包含層の堆積状況を確認するために適時深掘りを行った。出土遺物はグリッド毎に一括して取り上げたが、明らかに遺構から出土していると判断したものは実測図をとり、レベルを測って取り上げるように努めた。

調査区の設定

発掘の方法

また、61年度調査した垂木川以東の地区では現地形や地形図などから旧河道と推定される部分では重機による掘削を行い、砂礫層の落ち込み方向、堆積状況等を確認したところもある。調査終了後は各グリッドをすべて埋め戻し、2次調査に備えた。

第1次調査の調査年度・対象区と対象面積は以下の通りである。

(年度)	(調査区)	(調査対象面積)	(試掘面積)
昭和57年度	1・2・3・4・5・6・7・8区	8,300m <sup>2</sup>	(368)
昭和60年度	14・15・C区	6,970m <sup>2</sup>	(160)
昭和61年度	16・A・B区	10,700m <sup>2</sup>	(1125)
	総計	25,970m <sup>2</sup>	(1653)

## 第2節 第2次調査

**グリッドの名稱** 2次調査(平面調査)は建設予定道路のセンターラインを基軸として南北に10m方眼を組み、発掘予定区域すべてを網羅するグリッドを設定して行った。グリッドは東西方向に算用数字、南北方向にアルファベットを冠し、例えばA-1グリッドという形で位置表示ができるようにした。この方法は調査開始初年度のそれを最後まで踏襲した。

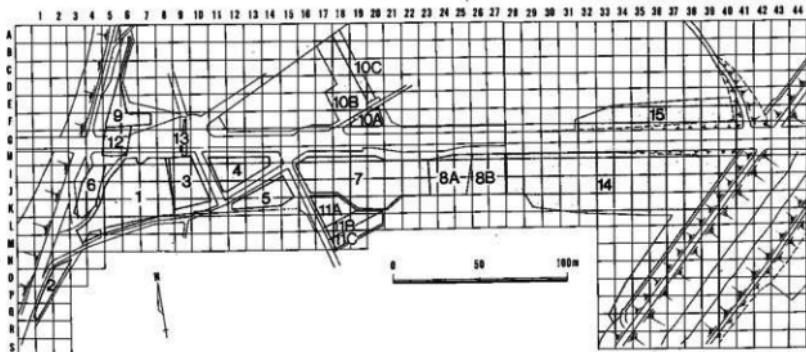
**遺構調査** 平面調査においては、遺構面までの表土層(盛土を含む)が厚いため重機で表土除去を行ったのち、人力による掘り下げ・精査を加え遺構を検出した。遺構面の数は一次調査でほぼ3面の存在が指摘されていたが、弥生時代から中・近世に及ぶ複合遺跡であるため地點によってはそれ以上におよぶこともあった。まずトレントや集水槽の壁面等で層序を把握した上で、それに準じて発掘調査を進めた。

**記録の方法** 遺構平面図は縮尺1/20を基本としてグリッド毎に割り付けた。細部の記録を必要とする遺構については、その都度尺度を変え1/10あるいは1/5の縮尺を併用した。写真撮影は6×7版の中型カメラ1台(61年度は2台)と35mm版の小型カメラ2台(61年度は4台)を常時用いた。全景等の撮影にあたっては、ローリングタワーを3段から5段に組んで垂直写真を撮るように心がける一方4×5版のビューカメラを適時使用した。また58・59年度はアドバルーンによる空中写真の撮影を行って、遺跡全体の理解を補った。なお、発掘調査と併行し現地および研究所にて水洗・注記・概報作成等の整理作業を同時に進めた。

現地調査の中で、地質調査については静岡大学農学部の加藤芳朗氏にお願いした。14区のプラント・オパール分析については宮崎大学農学部の藤原 宏氏の指導のもと古環境研究所に分析の委託を行った。

第2次調査の調査年度・対象区と対象面積は以下の通りである。

(年度)	(調査区)	(対象面積)	(年度別調査面積)
昭和57年度	1区	1,800m <sup>2</sup>	2,100m <sup>2</sup>
	2区	300m <sup>2</sup>	
昭和58年度	3区	900m <sup>2</sup>	5,000m <sup>2</sup>
	4区	800m <sup>2</sup>	
昭和59年度	5区	900m <sup>2</sup>	3,000m <sup>2</sup>
	6区	500m <sup>2</sup>	
昭和60年度	7区	1,900m <sup>2</sup> (8区の一部300m <sup>2</sup> を含む)	1,340m <sup>2</sup>
	8区 A・B	1,200m <sup>2</sup>	
昭和61年度	9区	900m <sup>2</sup>	5,070m <sup>2</sup>
	11区 A	340m <sup>2</sup>	
	11区 B	300m <sup>2</sup>	
昭和62年度	11区 C	260m <sup>2</sup>	16,510m <sup>2</sup>
	10区 A・B	1,000m <sup>2</sup>	
	12区・13区	3,000m <sup>2</sup>	
昭和63年度	10区 C	200m <sup>2</sup>	16,510m <sup>2</sup>
	14区	3,400m <sup>2</sup>	
	15区	970m <sup>2</sup>	
総計			16,510m <sup>2</sup>



第3図 原川遺跡グリッド配置図 (10m×10m)

### 第3節 整理作業

## 算理の方法

検出した遺構は当研究所の整理記号で標記した。各遺構の記号は下記の通りである。

遺構の標記  
方 法

SH 掘立柱建物跡 SB 積穴住居跡

S P 柱穴・小穴

SF 井筒 SK 眼壁

SX その他

本報告書では縦横は原則として縮尺 1 / 40

\*表示した。発

は現地調査と平行して水洗・注記作業を行ったが、本格的な整理作業は現地調査の終了後、昭和62年度より64年度の3年間の予定で実施している。

整理の方法

原川遺跡から発掘された遺物は弥生時代から奈良・平安時代、さらには中・近世におよんでいる。

## 報告書の成績

中・近世には分層する地図が多いが、平安時代以降は古くから現存するものはない。しかし、その構成は時代ごとに大きく三分割し62年度弥生時代、63年度古墳時代、64年度奈良・平安時代、中・近世と全4分冊を予定している。

調査が5年間と長期間にわたり、調査面積も全体で16,510m<sup>2</sup>におよんでおり、実測図・写真等の記録類だけでも膨大な数であった。このため最初に現地実測図面・写真・遺物等の基本的台帳の整理から始めた。遺構についてはまず遺構カードを作成し、現地調査の成果にもとづきながら個別の遺構の検討・抽出・時期決定に努め、それにもとづいて全体図の作成を行なった。また遺物については弥生時代の遺構より順に接合・復元に努め、実測図の完成したものから遺物カードを作成して整理した。遺物の種類により拓本等も使用した。遺物写真是6×7版の中型カメラを使用して撮影した。

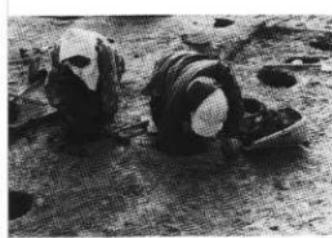
遺構カードの  
作成

木製品の保存処理は大半を元興寺文化財研究所に委託した。整理のなかで加藤芳朗氏には原川遺跡の地質的な検討をお願いし全体をまとめて頂いた。また合わせて土器棺内の脂肪酸分析を帯広畜産大学畜産環境学科の中野益男氏の指導で北海道測量図工社総合科学研究所に委託した。土器についての粗圧痕らしきものについては佐藤敏也氏に鑑定をお願いした。また錆釉陶器については山崎一雄氏に釉の分析を依頼し、灰釉陶器の胎土分析は三辻利一氏にお願いをした。

### 第3章 調査の経過



1区 荒掘り



1区 遺構検出



3区 土層検出



3区第2面 全景写真準備

原川遺跡の調査は昭和57年度から61年度までの5年間に及び、位置的には西から東へと順に調査している。しかし調査の方法で述べた様な諸々の理由から年度毎の調査区の番号は連続した調査区を意味しない。また調査面積の大小の差は大きく、同一調査区内でもさらに細分し次年度毎に分割調査する場合も出た。このため調査区の番号順に調査経過を述べる。年度毎の調査区は下記の表の様でありほぼ調査区順に一致している。

年度	57	58	59	60	61
調査区	1区	3区 4区	8区 A・B	10区 A・B	10区 C
		5区 6区	9区	12区	14区
	2区	7区	11区 A・B・C	13区	15区

#### 1. 第1区

昭和57年11月24日から、表土除去を開始した。12月1日から14日まで精査、排土置場の設営、10m方眼グリッド杭を設定した。12月15日からは西侧部分の手掘りによる掘り下げを開始した。

昭和58年1月下旬には遺構検出作業を行い、ピットを検出、この面を第1遺構面とした。遺構を掘り上げ、写真撮影、平面実測を行う。2月上旬より第2面への掘り下げを行った。

第1区 J～K-4～5グリッドに多数のピットと溝状遺構2本を検出（第2遺構面）、3月上旬まで掘り下げと精査を続け7区を中心ピット等を多数検出、その後遺構の掘り上げ、写真撮影を行った。3月中旬さらに確認のため掘り下げを開始した。J～K-6～8グリッドについて遺構平面実測、土器の出土状態の写真撮影等を行った。統いて第3遺構面の掘り下げを完了し、遺構検出の作業の後、3月18日には航空写真及び調査区全景写真を撮影、平面実測と遺構の部分写真的撮影を行い、3月28日に現地調査を終了した。

#### 2. 第2区

昭和57年12月22日より表土除去と遺構面の精査を行った。1区の作業と同時平行して掘り下げを行うが2月上旬までにこの部分での遺構は確認できなかった。2月中旬さらに掘り下げる。遺構の存在しないことを確認した後、下旬より第2区の全体平面図・土層図の作成、写真撮影を行い第2区の調査は終了した。

### 3. 第3区

昭和58年4月11日から準備作業を開始した。3区の北側に深さ1.5m程のトレンチを入れる。内耳の土鍋を出土する落ち込み(S D303)と、その下層の土器片を混入する暗灰色の粘土層から掘り込まれた溝(S D308)の存在を確認した。

4区では表土を取り除いた段階で遺構が検出されたにもかかわらず、3区では遺構が存在しないのは水田の形成によってすでに破壊されたものと判断した。そこで、第4区の遺構面を第1面とし、第3区では、土鍋を出土する遺構の存在する面を第2面として調査を進めることにし、第2面までの掘り下げを行った。5月27日から、遺構の発掘にかかる。溝状遺構・土坑・ピット等を検出し、6月3日第2面の全体写真撮影、平面実測を行う。調査区中央部にはバラス状の疊が堆積し、内部に灰釉陶器片を大量に含む部分があった。

6月中旬より第3面を掘り下げる。第3面では土坑・ピット等を検出、部分的にマンガンが沈着する箇所が見られる。古墳時代の溝(S D308)の存在を確認し発掘する。7月6日3区西側の一部を拡張して平安時代の堅穴住居跡S B301を発掘する。7月下旬には、実測図を作成し調査を終了した。

### 4. 第4区

昭和58年4月下旬、集水槽を設置した。5月17日には南側にトレンチを入れるが、全体的に攪乱が激しく詳細は把えられない。従って25日には中央部にトレンチを入れて土層を把握した。

第1面について7月1日から精査を始め、18日から遺構の調査に入った。溝状遺構・土坑・ピット等を検出し27日から平面実測及び全体写真の撮影を行う。8月3日から中央トレンチの北側にセクションベルトを残して、重機により第2面までを掘り下げ、引き続いて遺構精査を行う。精査の過程で灰釉陶器や土器が出土している。溝状遺構・土坑・掘立柱建物跡・ピット等を検出したが、第2面は奈良・平安時代から中・近世の遺構までかなりの時代差を含んでおり、個々の遺構の確認は困難である。セクションベルトを実測して取り除き、写真撮影の後平面実測を行う。8月30日から第3面までの掘り下げを行った。

9月12日から第3面の遺構調査を行い、10月6日から実測に入る。17日からは区の西側で検出された溝状遺構(S D406)の調査を行って全体写真を撮影した。

### 5. 第5区

昭和58年7月19日、集水槽を設置し、周囲に排水溝をめぐらし、調査に着手した。この区はもともと宅地としては利用されていない湿地であり、表土を取り除いた遺構面は近接する3区・4区の第3面に相当する面であった。遺物の出土はきわめて微量で、遺構も竹や葦の植物残片を



3区第3面 S D308検出



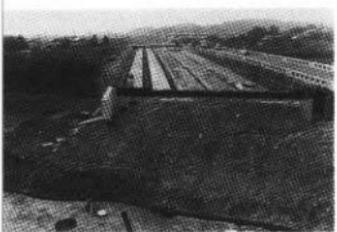
4区第1面 遠景



4区第2面 実測



5区第3面 検出



6区 西部分



6区第2面 遺構検出



7区第3面 遺構検出



7区第3面 深掘グリッド

多量に含む土坑のほか、溝（S D501）が1本検出されたのみであった。8月2日で遺構の発掘を終え、全体写真と実測を行った。さらに第3面下の遺構の有無を確認するため3ヶ所に2m×2mのグリッドを設定したが、遺物・遺構の検出をみなかったので埋め戻しを開始した。

8月31日には水路工事に伴って、3区の南側部分に拡張して調査を行った。3区で検出されたS D308が南側にさらに続いていることを確認することができた。9月10日まで写真撮影・平面図・土層図の作成を行った。

#### 6. 第6区

6区は原野谷川旧堤防に接する。仮設道路下の三角部分であり道路付け替え工事の完了をうけて表土の除去を行った。その際、発掘区西南隅に集水坑をあけ土層観察を先行させた。

昭和58年8月25日に精査を開始し、29日からは第1面の遺構調査に入った。昨年度の試掘グリッドC-1の東側は概乱されている。土坑・桶を検出し、平面実測・写真撮影を行った。

第2面までの掘り下げを南北から行った。北半と南半とでは土質に差があり、北半についてはサブレンチを入れ、かつ排水溝を深く掘り下げて遺構の存在を追究した。第2面では北からS D601・602の2本の溝状遺構が検出され、S D602と重複して井戸状の遺構（S E601）が1基検出された。溝の北側には多数のピットが存在した。9月30日遺物の取り上げを行い、全体写真の撮影を行った。

10月3日から第3面までの掘り下げを行い、7日から遺構調査に入った。ピットが多数検出されたが、そのほとんどは時期さえ確定できない。K-3に平安時代のものと思われる暗茶褐色シルト質粘土を覆土とするピットがいくつか存在したが、建物としてのまつりは検出できなかつた。J-4に掘立柱建物を構成すると考えられるピット群が検出された。平面実測・写真撮影・土層図の作成を行って10月14日調査を終了した。

#### 7. 第7区

昭和58年9月26日より重機による表土除去を行った。10月24日から人力で掘り下げ、旧水田面を露出した。水田に伴うと思われる杭列が2列検出されている。

東西、南北に設定したトレンチの土層観察の結果、旧水田面下には黄褐色粘土層を介在して遺構面が存在することが確認されたので検出を開始した。この面は層位的にみて他の地区の第3面にあたる。掘り下げが進むにつれ、掘立柱建物を構成する柱穴群が次々と現れた。

8区のうち300mだけを拡張調査することになり11月26日から重機による表土除去、12月1日から人力による掘り下げ作業を開始した。一方7区においては第3面下の遺物・遺構の存在を確認するため、発掘区西半に2m×2mの深掘り試掘グリッドを入れた。第3面から無遺物層を隔

てて50~60cmの深さのところに遺物包含層の存在をつきとめた。

昭和59年1月からは拡張部分の遺構調査とともに、弥生時代の包含層の範囲を確定するため発掘区の中央及び東側に試掘グリッドを入れた。西側で顕著だった炭化物の混入は、東半で少なくなる傾向が見られた。試掘グリッドを結んで拡張区をつくり、西からB・C・Aと名付けた。包含層を構成する土壤を同一の埋土とする柱穴状の遺構が検出された。この弥生時代の遺構面を新たに第4面とした。

昭和59年1月14日アドバルーンによる写真撮影を行う。拡張部分第3面では竪穴住居跡が一軒検出された(SB801)。また土坑のほか、溝状遺構が錯綜して検出された。この中には古墳の周溝も含まれていた。

この間、7区においてはB・C・C拡張区間をつなぎ、さらにC拡張区を東に6m拡大して第4面の露出をはかった。掘立柱建物・性格不明の土坑等が検出され、個別に写真撮影を行った。2月16日、8区拡張部分第3面の調査を終え、A拡張区まで第4面までの掘り下げを開始し、A拡張区に近接して、2つの甕の口縁を合わせた土器棺1基を検出(SF806)。2月27日から残りの部分を掘りつなぎ、第4面全体の掘立柱建物跡・土器棺・土坑等を検出した。SF806は木枠で閉み土ごと運び出した。写真撮影、実測作業を行い調査を終了した。

#### 8. 第8区A

第8区の中央部を仮設道路が縱走、これを遮断できなかつたためA・Bの2区に分割して調査を行つた。

昭和59年5月7日から重機による表土除去を始め、第1面を検出する。精査を加え、杭列を検出した。23日写真撮影を行う。

5月31日から第2面への掘り下げを開始。東半において土色の変化を認めたためトレーナーを入れた結果、旧河道(SD816)の検出を見た。西半においては、7区の関連遺構SD702・SD804・SD812(古墳周溝と判明)を検出した他、新たに竪穴住居跡(SB803)・溝状遺構等を検出した。6月15日から遺構発掘、7月4日全体写真を撮影し平面実測に移る。11日アドバルーンによる空中写真撮影を行う。

7月中旬より第3面への掘り下げ、精査を施す。弥生時代の性格不明の遺構(SX802)、土坑・ピットを検出した。またSD816もこの面で調査、8月10日遺物出土状況の写真撮影、続いて平面実測を行う。23日加藤芳朗氏にSD816の調査を依頼した結果、旧河道であることが判明した。

#### 第8区B

第8区Bの表土除去は昭和59年9月1日から着手、A区の埋め戻しと併行して仮設道路の付け替えを行つた。人力による掘り下げ、精査を経て第1面ではSD702をはじめとする溝状遺構・柱穴状ピット・土坑等を検出した。これらは北ないし東側に集中する傾向をみせた。出土遺物は年代差をもち一定しない。25日に写真撮影を行つたのち平面実測、平行



7区第4面 写真準備



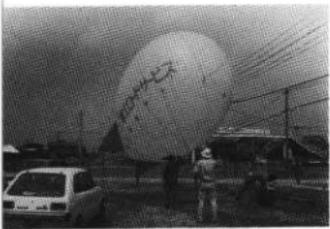
7区第4面 SF806取上げ



8区A第2面 実測風景



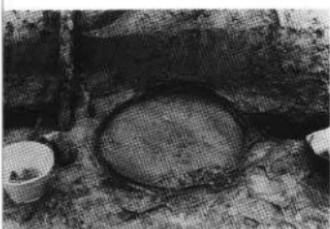
8区B 遠景



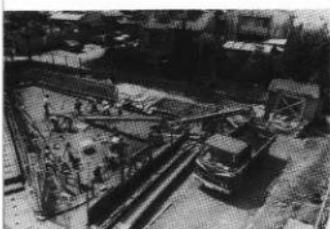
アドバルーンによる写真撮影



9区 井戸実測



9区第1面 桶底出土



10区A 掘り下げ

して西側から掘り下げを始めた。

第2面については10月2日から遺構調査および遺構の発掘を開始、古墳時代の須恵器・土師器が出土した。その状況写真を撮影したのち、第2面の平面実測、土層図の作成を行った。

第3面は旧河道(S D816)の調査に終始した。25日トレンチを設定し、翌日層序の検討を行ったうえで旧河道の発掘に取りかかった。古墳時代の土器を多量に出土し、保存状態も良好であった。11月2日に加藤芳朗氏に地質学的指導を受けた。16日までに写真撮影・平面実測を行い調査を完了した。

#### 9. 第9区

昭和59年11月12日より準備し、19日から表土除去を開始した。北に細長く延びる部分を排土置場にするためこの部分の調査をまず行い、石組みの井戸状遺構(S E901)を検出した。南側は12月4日から掘り下げを始めた。第1面において性格不明の多量の礫を検出した。流れ込みであることを確認したのち1月16日からこの礫群を撤去する。第2面については掘り下げながら精査し、遺構検出にかかる。多数の柱穴状ビット群・溝状遺構・土坑状遺構を発掘、2月4日全体写真を撮影した。平面実測は18日終了、ただちに埋め戻しを行った。

#### 10. 第10区A

昭和60年4月15日から重機による表土除去を開始した。国道に隣接した危険な区であるため、フェンスバリケード等安全対策には万全を期した。4月22日第1面の精査作業に入り、平安時代の溝状遺構(S D10A01)を検出し、実測および写真撮影作業を行う。

ただちに第2面までの掘り下げを行い、5月10日には精査に入った。第2面では北東部において古墳時代の溝状遺構(S D10A02)を検出、これは後に10区Bで検出した溝状遺構(S D10B12)に続くものであることが判明した。5月25日、第2面から第3面までの掘り下げ作業にとりかかり、6月3日には精査に入った。

第3面では区の北東部に弥生時代中期の遺物が集中的に出土する部分を確認した。後に10区Bで検出した浅い流路状の溝状遺構(S D10B16)に続くものである。また、この溝の浅いくぼみ部分からほぼ完形の壺形土器が1点出土した。実測および写真撮影の後、第3面下の砂および礫層の出現状況を確かめるためトレンチを設定して調査を行った。その結果、区の東半部において礫が浅く出現することが判明した。6月17日、区の南東部で、今まで排土用ダンプの出入り口としていた部分に拡張区を設定し調査に入る。非常に狭い調査区であったが、弥生時代に関してはかなりの遺物が出土し、上述した浅い流路状の溝状遺構の広がる状況を確認することができた。

7月6日、発掘調査をすべて終了し、ただちに埋め戻し作業に入った。

しかし、10区A北側道路部分においては当初調査は見合せたが、最終的に上述した弥生時代溝状遺構の存在が確認されたため調査を行うこととなった。その部分の調査も昭和60年3月14日をもって終了した。

#### 第10区B

昭和60年7月15日から重機による表土除去にとりかかる。現集落の中心部であるため安全対策には十分注意をした。

第1面は中近世の遺構が濃密に検出でき、北側に柱穴群、南側には土坑および溝状遺構が重複して確認できたため、特に南側は繰り返し精査作業を行った。8月1日より、北側は柱穴群の調査にとりかかり、8月12日にはほぼ掘り上がり、実測および写真撮影を行った。

9月2日、北側は第2面までの発掘に入るが南側は第1面の遺構調査を継続。S F10B03土坑内からは水滴等良好な資料を得た。9月24日、南側の遺構調査もほぼ終了し、第2面までの発掘に移るが、緊急調査(12区・13区)が入ったため一時中断することとなった。

12月1日作業再開、12月23日第2面の精査作業に入り、北側に旧河道と思われる大溝(S D10B14)、南側に古墳時代の溝状遺構3本を確認した。

2月5日、第3面までの発掘にとりかかった。第3面においては南西部において北西方面から南東方向へ伸びる、弥生時代の遺物を多量に包含した溝状遺構(S D10B16)を検出した。これは10区Aの北東部で確認した浅いくぼみに続くものである。3月14日、実測および写真撮影等すべての調査を終了し、17日から埋め戻しを行い、3月20日をもって作業を終了した。

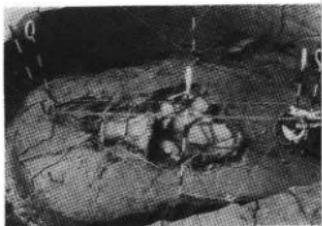
#### 第10区C

昭和60年4月中旬より重機による表土除去を開始した。第10区Cは調査区が民家と隣接するために、調査に先立て周囲に安全柵を巡らせるなどの安全対策にも十分気を配った。

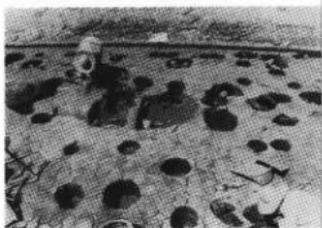
4月21日第1面の精査作業に入り調査区を南北に縦走する近世の溝状遺構(S D10C01)を検出した。5月21日、土坑中に桶を埋設したS F10C06、箕笠を2枚伴った土坑(S F10C01)を検出し、他の遺構検出作業とも併行して、実測及び写真撮影を行った。5月27日をもって第1面の遺構調査を終了、5月30日、全景及び遺物出土状況の写真撮影を行い、平面実測作業を開始した。

6月10日、第2面への発掘を開始する。昨年度の第10区B調査では古墳時代の旧河道(S D10B14)の調査が行われており、その延長部分の存在が予想されたが、6月末日に河道北端部を検出した。この部分には第10区Bと同様に土器群が出土し、精査を行う。

7月7日、南端岸部の検出作業とあわせて実測及び写真撮影を実施した。この旧河道は検出された北端岸部、南端岸部から判断すると昨年度



10区A第3面 弥生塗実測



10区B第1面 柱穴群



10区第1面 杭列



10区B第3面 S D10B16実測



11区第2面 調査



11区A第3面 S F 1102実測



11区 深掘調査



12区第2面 大溝検出

調査の状況から南へ大きく流路を変えていることが判明した。7月10日、梅雨期の降雨による東側法面の幅4mにもおよぶ崩壊を発見する。取り急ぎ、実測・遺物取り上げ等を行い、ただちに埋め戻し隣家の安全をはかった。

### 11. 第11区A

昭和59年4月中旬から準備作業を開始した。重機による表土除去の後、23日から第1面に精査を加えた。旧水田面であることから遺物の出土量は少なく土坑状の遺構と擾乱坑を検出し、27日に全体写真を撮影した。

ただちに第2面の発掘を開始した。明黄褐色粘土層まで掘り下げた時点で南西部において掘立柱建物跡、南部で疊を多量に伴った溝状遺構を検出、精査を加えたのち5月7日から遺構の発掘に取りかかった。第2面では掘立柱建物跡、溝状遺構、柱穴状ピット、土坑を検出し、土師器が出土している。9日から平面実測、写真撮影を行った。

第3面の発掘を17日から開始した。暗灰色粘土層上面から弥生土器が出土し始めたが、遺構をはっきり確認できなかった。再度掘り下げ精査を行った末、土器棺(S F 1101・S F 1102・S F 1103)、土壙、ピット等を検出した。28日から土器棺の細部の観察を重ねながら写真撮影、平面実測を行った。S F 1102は土器の保存状態が悪く、その取り上げが不可能であったため、土ごと採取した。7月8日に最後の遺物を取り上げ、土器棺の調査を終了した。

### 第11区B・C

第11区B・Cは昭和58年11月中旬より調査を始めた。第1面はA区の調査から、旧水田によって擾乱を受けていると判断し、第2面上面まで重機で表土を除去することにした。10月9日から表土除去を開始、部分的に掘り下げながら精査を行い、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝状遺構等を検出し、24日から各遺構内の発掘を行う。写真撮影と平面実測を併行させ11月12日に終了、第2面の調査を完了した。

第3面の発掘を開始した。この面では第7区・第11区Aとの関連から弥生時代の土器棺の出土が期待されたが、調査の結果S F 1105を1基検出するにとどまった。この他土坑、ピットも検出できたが、弥生土器の出土量はA区に比べ少なかった。また南東部に炭化物の広がった一画があつたため、サブトレンチを入れ遺構検出をはかった。28日全体および近接写真を撮影したのち、平面実測・土層図の作成を行ったのち調査を終了した。

## 12. 第12区

昭和60年度当初予定されていなかった道路ボックス建設に伴う緊急調査区である。10月1日、第1面の発掘に入り7日から精査を行う。昨年度調査した9区同様、第1面では中近世の遺構が濃密に検出できた。トレンチ調査の結果、区の中央部に南北方向に旧流路と思われる大溝（SD1206）があり、また南端では東西方向にやはり旧流路と思われる溝（SD1207）が確認できた。そしてこの溝が埋まつた段階で建物が建てられているため、まず柱穴や土坑の調査から入る。S F 1207井戸状土坑内からは古瀬戸瓶子等、良好な資料を得て実測及び写真撮影作業を行った。

第2面として12月2日から大溝の調査に入った。12区では古墳時代の遺構は検出されず、また下層で行った深掘り調査の結果でも弥生時代の遺物は出土しなかった。実測、写真撮影、遺物取り上げ作業を行い、12月7日すべての調査を終了した。

## 13. 第13区

12区同様当初予定されていなかった緊急調査で、水路ボックス建設に伴うものである。昭和60年10月14日第1面の調査にとりかかり、平安時代の遺構を検出するが調査区があまりに狭く、その性格等は明確にできなかつた。古墳時代の遺構としては溝状遺構SD1301をあげることができる。また弥生時代に関しては調査の結果、遺構は検出できなかつたが少量の土器が出土し、この辺りまで遺物包含層が広がっていることが判明した。実測及び写真撮影作業を行い11月18日調査を終了した。

## 14. 第14区

調査に先立つて、便宜的に調査区を2区分し、東端部で南側に細長く突き出した部分を14区Aと仮称した。昭和61年4月14日より、現地形を平板測量し、重機による表土除去を開始した。14区A南端で古墳時代と思われる溝状遺構（SD1401）を検出した。第1面の荒掘りを継続するとともに、プラント・オパールの資料採取のために5月19日、宮崎大学の藤原 宏氏の現地指導を受け、作業を実施した。

6月2日、プラント・オパールの調査結果より第1遺構面上層に水田遺構のある可能性を指摘されたため、第14区西端から開始した第1面の遺構検出作業と併行してその検出に努める。調査区東側部分より畦畔や溝を検出し順次写真撮影を行った。この期間は、梅雨期の降雨のため作業が中断し、調査区の排水と清掃作業に追われる事も度重なつた。7月18日、第1面上層の畦畔状遺構等の全景写真撮影を実施し、あわせて実測も開始した。水田遺構の検出についてはおおかたの畦畔が耕作などによって削平されたと見え、検出できた畦畔は極く部分的であった。

7月21日、西端より畦畔をはずしながら第1面の精査・遺構調査を行つた。8区で検出された平安時代の溝の延長の他、数本の溝状遺構、竪穴住居跡や土坑、ピット群等の確認を行つた。8月に入つてからも遺構面



13区第1面 遺構調査



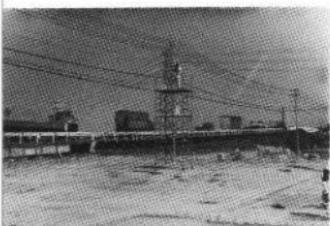
14区 プラントオパール土壤採取



14区第1面 遺構調査



14区 S F 1416検出



14区第1面 全景写真



15区第1面 SX1503実測



16区 試掘調査



地質調査（加藤芳朗氏）

の精査、遺構調査を継続した。井戸 S E1403、古墳時代の竪穴住居跡 S B1401、奈良時代の竪穴状遺構 S B1404等の遺構調査を行う。8月18日、壁面及び基底面に白灰色粘土をはり付けた土坑 S F1401、S F1402の遺構調査を開始し、写真撮影・実測・遺物取り上げを行った。9月に入り、遺構調査は一部を残してほぼ終了し、調査の終了したグリッド毎に平面実測作業及び各遺構の近接写真撮影を順次進めた。9月20日、全景写真撮影を行った。

9月27日、第2面（弥生時代）の調査を開始した。昨年度遺構検出を行った試掘グリッドを中心に重機により中間堆積層を除去し、その精査を加えたが遺物・遺構とも検出できなかった。9月30日、第2面の平面実測、写真撮影を行い、実測終了部分より順次埋め戻し作業を進めた。10月に入って、第1面で検出された多量の土師器を出土した古墳時代の土坑（S F1416）の調査に入り、平面実測及び遺物出土状況・完掘状況の写真撮影を進めた。10月11日をもって第14区の埋め戻し作業までの全ての作業を終了した。

## 15. 第15区

昭和61年10月8日から重機による表土除去を開始した。10月14日、表土除去時に確認した杭列 S X1501の検出作業を開始し、写真撮影、実測作業に移った。10月20日、第1面の上層に第14区と同様に畦畔状遺構が確認できたため、全体を検出すべく精査作業を行った。なお、29日には静岡大学の加藤芳朗氏の現地指導を受けた。11月4日、調査区のほぼ中央あたりに南北にのびる畦畔状遺構1本、同じく南から北にのびる幅の広い土層の盛り上がりを確認、検出作業を行った後、写真撮影を行った。11月22日、第1面上層における水田遺構検出の作業を終了し、実測および写真撮影を実施した。

11月下旬より掘り下げに入った。調査区西端部から開始された第1面の遺構確認作業においては、12月4日から出土遺物の中に灰釉陶器を含む須恵器等の土器片及び礫石が集中して出土し、中に三足壺の脚部も発見された S X1502・S X1503の遺構調査を開始した。1月に入り、SX1502、SX1503の下層の調査を進め、新たにビットや覆土中に炭化物を含む浅い土坑を検出した。1月12日より2間×2間の掘立柱建物跡（SH1501）、古墳時代後期の溝状遺構の調査を開始した。1月19日、多量の大粒のマンガン粒子と土師器片を含み、後背湿地に向かって落ち込む浅いくぼみ部分の調査を進めると共に、調査終了グリッド毎に平面実測作業を順次行った。

1月31日、第1面の全景写真撮影及び平面実測作業を終了し、第2面（弥生時代）の確認調査を開始するが、遺構・遺物とも確認できなかった。2月7日、確認調査部分の写真撮影、平面実測並びにトレンチの土層図作成を実施し、調査の全てを終了した。

## 第4章 層位的観察

調査区はバイパス路線内に沿って東西に380mと細長い。西側より1区～7区、9区～10区、12区までの10区画は調査前には住宅地であり、東側の8区・11区・14区・15区は水田として使用され所々に畠地もみられた。発掘調査によって弥生時代から中・近世に至る各時期の遺構が検出されているが、包含層が薄く住居の基礎や水田耕作のため削りとられており、遺構の検出面を時期別に掌握するのは困難であり、古墳時代以後の遺構は各時期とも同一の面で発掘されている部分が多い。古墳時代の遺構面は、調査区の西端から東に向かってなだらかに傾斜し、東端は旧逆川により形成された後背低地に没している。調査区が東西に長いこと、あるいは西側は原野谷川の自然堤防上に位置するのに対し、東側では垂木川の影響を受けていることなど、各区で変化が激しく全調査区を通して共通する土層を観察し得なかった。また各時期の包含層も明確に識別できない部分もあり、各区とともに検出された遺構・遺物を軸に層位関係を整理した。調査区の西端に当たる6区、中央部分の7・11区および東側の14・15区さらには旧垂木川流路部分に当たった東端の14・15区の土層柱状図を提示し各層の年代を中心に模式的に説明することにする。

調査前の様子

遺構面の重なり

層位の整理

### [基本土層]

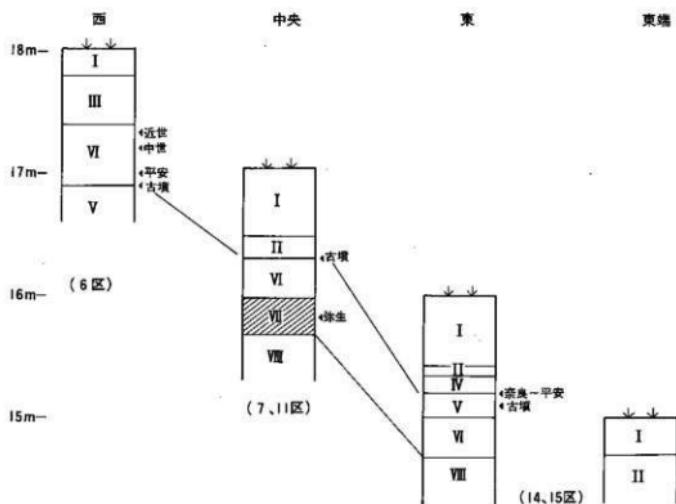
第I層 表土層で現住宅の盛り土部分や現水田耕作土である。

第II層 中・近世の水田土壤で、微高地では乾田の特徴である耕作土に当たる暗灰色粘土層とその下部に鉄分が強い黄褐色粘土層からなる田床が形成されている。その下にマンガン粒子を多く含む褐色粘土層があり、1・7・8・14区で顕著に見られる。14・15区の畦畔部分については加藤芳朗氏により検討がなされている(第7章6節)。なおこの遺跡では上層の遺物包含層までが浅いため水田床土部分が包含層に及んでいる場合もある。

14区東端は垂木川の流路に当たっている部分であるが、プラント・オパール分析の結果プラント・オパールが多量に含まれており水田耕作土と考えられる事が明らかになった。しかし地下水位が高く、土壤全体が還元されて青灰色を呈し、田床に当たる部分は明瞭に観察できない。またこの区ではII層から山茶碗が出土しており、その時期を中世以後と考えている。

第III層 中・近世の遺構が検出される西側部分の土層で暗褐色粘土層または暗灰色粘土層からなる。原野谷川の氾濫の影響を受け疊やシルトが強くなる部分がある。なお10区では明治初年にこの地域で大火があったときのものと考えられる焼土層がこの層の上に薄く堆積している。

第IV層 中世から奈良・平安時代までの遺構がこの層を削る中で検出された。西側では暗褐色粘土またはシルトで、調査区の東側では灰色粘土になる。



第4図 調査区土層模式図

- 第V層** 黄褐色粘土層で古墳時代の包含層はこの上層部分に形成されており、遺構の多くはその包含層直下で検出している。全体に西から東にかけて緩やかに傾斜している。地点によっては奈良時代の遺構も同一面で検出されている。
- 第VI層** 淡黄灰色粘土層で7・11区では古墳時代面と弥生時代面を分ける間層となる。
- 第VII層** 暗黄灰色粘土層で弥生時代の遺構を検出する。場所により炭化物を多量に含む暗灰褐色粘土層を上層にはさむ場合もある。
- 第VIII層** 青灰色粘土層で弥生時代の遺構面の下層にある。西側の3区ではこの層のすぐ上に第V層の古墳時代面があることから、第VII層の弥生時代の包含層は7区以西ではあったとしても早く削り取られていると考えられる。また8区の旧流路の方向へ向かうとシルトや疊で切られ、流路の左岸で上がった後14区の33～34グリッド付近で落ち込む。この8区左岸に第VII層は残っていない事から疊を多量に押し出す強い流れをもつ流路SD816の形成により33～34グリッドまで伸びていた弥生時代面は削られていると考えられる。

## 第5章 遺構の概観

遺構・性格  
の多様性

原川遺跡の調査は弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代さらには中世から近世に至る各時代に属する遺構が重複されて検出されている。また性格的にも弥生時代の集落と墓域、古墳時代集落、奈良・平安時代には地方官衙の一部さらに中～近世には東海道脇の集落と種々の性格のものを含んでいる。しかし第4章「層位的観察」で示したように各時代の遺構の密度あるいは残存状態には大きな差があった。特に奈良～平安時代の遺構と中世～近世の遺構は重複が激しく、中世～近世の遺構の何回かの建替えによりそれ以前の遺構が壊されている場合が多く、明らかにできなかった部分がある。なかでも旧東海道に沿っている10区では各期の遺構が入り乱れ、柱穴のみが全面に広がっている状態であった。

本遺跡の第一冊めの報告であるので各時期毎に検出し得た遺構の概要を簡単に記すことにする。

### 1. 弥生時代

弥生時代の遺構は7区・8区・10区・11区で確認している。中期前葉の集落跡の一部と考えられ、掘立柱建物跡・土器棺墓・土坑・溝および自然流路等が検出された。竪穴住居跡は検出していない。掘立柱建物跡は8棟分が発掘されている。いずれも梁間1間で桁行きは1間～3間の建物である。1間×1間・2棟 1間×2間・3棟 1間×3間・3棟であり、各柱間の間隔はかなりのばらつきがある。いずれも柱穴は径20～30cmと細く柱の掘り方は明瞭でない。

掘立柱  
建物群

土器棺墓は6基が発見されている。壺を使用した合わせ口棺と単棺、壺と甕を使用したものや壺だけのものなどその形態は多様である。土器棺墓は10区を中心に比較的まとまった位置で検出されており、墓域を形成しているものと思われる。また集落域の北側に東西方向に流れる浅い溝（S D10B16）がある。溝内から弥生中期前葉の土器が多量に出土している。他に掘立柱建物群の南側にいくつかの性格不明の土坑や落込みが検出されており、これらは北側の溝と同様に東西の浅い溝のなごりではないかと考えられる。

土器棺墓群

### 2. 古墳時代

古墳時代の遺構は調査区のほぼ全域で検出されている。一部を除いて、全体的には古墳時代の遺構と奈良・平安時代の遺構は同一面で検出されており、充分分離ができない。従って、遺構のかなりの部分は出土した遺物によって分離している。発掘された主な遺構は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝と墳丘を削平された小型の円墳の周溝および旧原野谷川の支流と考えられる流路跡等である。

集落の範囲

集落の範囲は必ずしも明確になっていないが、調査区の西端で遺構はさらに西側に続いている。隣接する坂尻遺跡の古墳時代集落と連続していることはほぼ確実である。両者は年代的にもほぼ共通しており、同一の集落の一部と考えられる。また東側は14区の東端が旧逆川によって削られており、両遺跡で確認されている境界から推定すれば集落の東西幅はほぼ750mにおよんでいることになる。また南側は隣接する市営住宅の用地内でも遺物が採集されていることから、さらに南に伸びていることは確定であり、昭和55年から実施された坂尻遺跡の調査で吉岡伸夫氏が推定しているように海拔16mの等高線で囲まれた区域を遺跡の範囲とすれば第1図で見るよう南側に大きく伸びることになる。

掘立柱建物12棟・竪穴住居跡7軒が発見されている。掘立柱建物には2間×2間の總柱

**総柱建物群** の倉庫風の建物群を含んでおり、一部に建て替えを示すものもある。三区で検出した集落内の溝からは多量の土師器・須恵器を出土しており、また14区の土坑(S F1416)にも多量の土師器・須恵器を含んでおり、この期の一括遺物として注目される。集落は6世紀から7世紀に及んでおり、この期に原野谷川の沖積地に進出した最大規模のものと考えられる。古墳は8区で発掘されている。墳丘はすでに削平されており、発掘されたのは周溝のみであるが、径約10m程の小型の円墳である。周溝の形態から「造り出し」部を持つ可能性があるが明らかでない。小型の古墳にはめずらしく周溝内から形象埴輪(人物・家)・円筒埴輪を出土している。北側に続く岡津原古墳群の一部を成すものである。またこの古墳は竪穴住居跡と重複しており、集落形成期に墳丘が削平されている可能性が高い。

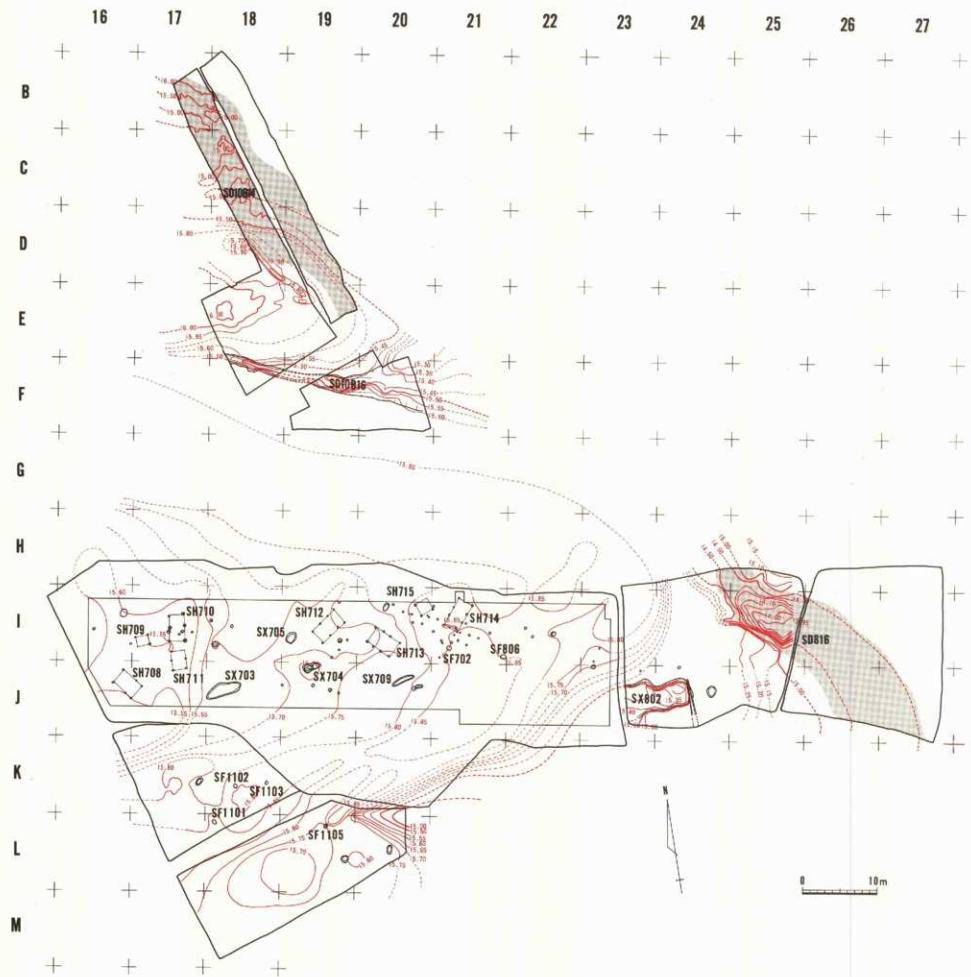
### 3. 奈良・平安時代

奈良時代面と平安時代面は分層できないが遺構・遺物とも調査区の西から東までの広い範囲に検出されている。発見された遺構は掘立柱建物跡・竪穴住居跡・井戸・溝等が主なものであるが、先に述べたように現地での遺構の分離が難しく、出土した遺物で奈良時代のものと平安時代のものとの分離に努めたが、今のところ充分できていない。柱穴のみが多く検出されており、今後の整理の進行によって掘立柱建物跡の数は増加する可能性がある。遺構の数は比較的少ないが3~4区、14~15区に2間×3間以上の掘立柱建物跡が想定できる。しかし出土している遺物は須恵器・土師器・灰釉陶器・綠釉陶器を始め陶馬・陶牛・瓦塔など多岐に及んでおり、また墨書き土器・円面鏡等を含み、官衙的色彩が強い。西側に続く坂尻遺跡と共に通する要素が強く、坂尻遺跡あるいは南側の梅橋北遺跡と共に遠江佐野郡衙の一部を構成しているものと思われる。出土遺物は坂尻遺跡に比較して平安時代のものが多く、より長期間継続した区域である事を推定できる。

### 4. 中・近世の遺構

中・近世の遺構は1区から15区で検出されている。そのうち東西方向の旧東海道に沿った1区から10区までは建物跡を中心に、それより南の14・15区では水田の畔群が検出されている。中・近世の面では多量の遺物を含む反面、攢乱や溝・柱穴・土坑が錯綜しており遺構の時代別のまとまりを困難にしている。しかし旧東海道に沿った部分には比較的しっかりした建物跡の柱穴が検出されているのに対して、それより内側には井戸や生活排水の溝が多く、またその外側に芥捨ての攢乱のような土坑が多く見られるなどそれなりに遺構のまとまりと性格を推定できる。建物の跡は2棟検出され、その他建て替えの跡と考えられるものも含めておびただしい柱穴が出土している。井戸が數多く検出されており中には石組の物もある。また桶を埋めたものがあり、桶底のみが多数出土している。遺物の分析はほとんど未着手であり、年代的な検討も今後に残されているが、漆椀やくり皿等の木製品・美濃・瀬戸等の陶器類を始め、伊万里・唐津等の磁器類等が多量に出土している。それらには大鉢・小鉢・皿・茶碗・瓶子・とっくりさらには水滴など多種多様の物が含まれており、今後の整理により、街道沿いの町屋の生活の断面を示し得るかも知れない。また西端では原野谷川に架かる橋の橋脚部分と推定される数多くの太い柱根を河原の一部分とともに検出している。

その他12区で中・近世の原野谷川の支流の流路跡が検出されているし、6区・9区・12区では原野谷川の氾濫の影響を受けたと考えられる疊を検出するなど、かなり後までの原野谷川の氾濫の跡を見ることができる。



第5図 弥生時代遺構全体図（1/500）

# 第6章 弥生時代の遺構と遺物

## 第1節 遺構群について

弥生時代の遺構は標高15.8~6mに位置し、北西方向から南東に向かって緩やかに傾斜する暗黃灰色粘土層の上面で検出された。この土層の上部に暗灰褐色粘土層が場所により約20cm程の厚さに堆積しており、古墳時代の遺構面と識別できる。第7区から第10区を中心とする弥生時代の遺構面の北側半分ほどに炭化物が濃く分布している。

検出された主要な遺構は掘立柱建物跡8棟・土器棺墓6基・溝1等であるが、その他に性格不明の土坑・溝等があり、そのうち土器を出土している土坑についてはSXの名称を付して説明している。遺構の検出状況から弥生時代集落の一部分を発掘したものと推定している。検出された遺構は決して多いものではないが、出土土器にほとんど混じりがなく弥生中期初頭のものに限られること、また土層からみても古墳時代の遺構検出面との間に間層が存在し遺構が混乱する可能性の少ないものである。このため本遺跡は他に発掘されている遺構の少ない中期初頭のきわめて限定されたものとして興味深いものであった。以下検出された遺構と出土した遺物について簡単に説明しよう。

## 第2節 集落の立地条件

弥生時代における原川遺跡の集落の立地条件を考えるために、第1章第1図では周辺の現地形について1m毎の等高線を引いて検討したが、さらに第5図では弥生時代面について0.1m間隔の等高線を引くことにより微地形の変化を検討した。前掲の弥生時代遺構面全体図(第5図)によって巨視的に見ると、西北に広がる各和段丘が東南の方向に伸びていた末端部に沿って原川遺跡の弥生集落は形成されている。そのなかで流路の変化より見ると、北側には旧原野谷川の支流SD10B14が東南の方向に流れる。この流れは8区の旧流路SD816とつながる可能性が強く、SD816は大きく蛇行して南西の方向に流れる。第1図の原川遺跡をとおる海拔16m以上の等高線からわかるように、この蛇行はかつての各和段丘の末端部に沿っている。原川遺跡の集落はこの蛇行した部分の右岸側に形成された自然堤に乗っている。

第6図は微地形の変化を検討し集落の在り方を模式化したものである。これをみると平坦に見える自然堤防上も内側をやや低くしながら南側と北側に分かれることが理解できる。

南側の自然堤の最も高い部分よりやや内側の海拔高15.80~15.85m部分に6基の土器棺墓(▲印)が分布している。この事から住居に隣接しながらも墓域が形成されていたと考えられる。

また掘立柱建物は北側の自然堤の南面のなだらかな傾斜面に立地している事もわかる。この範囲は現地調査時点での遺物包含層である暗黃灰色粘土層の上層に検出されている炭化物の分布の範囲とも一致する。検出されている同時期の8棟の建物群は北側の自然堤の南斜面に位置し、その位置から大きく西側掘立柱建物群と東側掘立柱建物群の二つに分かれ住居城を形成する。いずれの群も4棟から成り、まん中の1間四方の建物を囲むようにして他の桁行き2間以上の建物が同じ円心上に近い形で並ぶ構成をとる事から、それぞれが単位集団であると考えられる。各掘立柱建物は、1間×1間は床を張った高床式建物、1

出土層位

古墳時代の  
包含層との差

微地形  
の変化

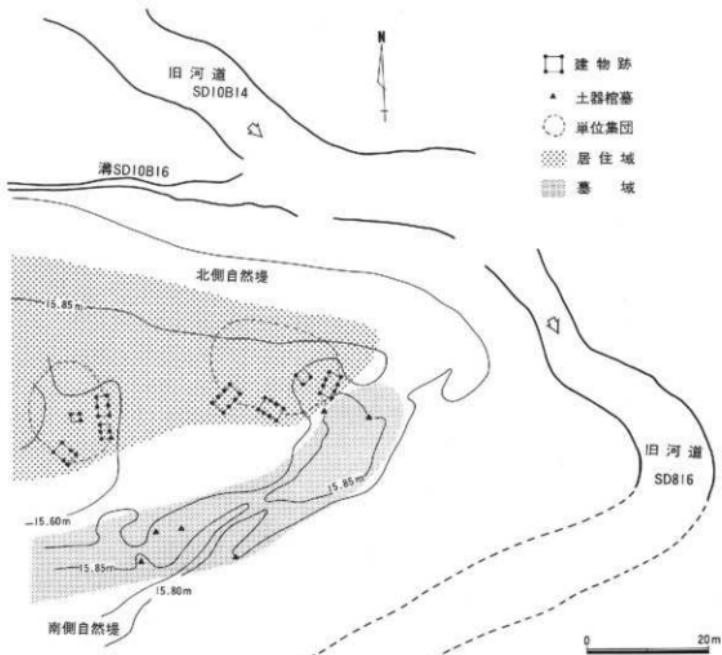
自然堤防

集落構成

墓域

居住域

東西の  
建物群



第6図 弥生時代遺構概念図（1/800）

間×2間以上は床張りのない掘立柱建物かまたは高床式建物の双方の可能性をもつ。そして東側掘立柱建物群は西側掘立柱建物群よりもやや大きな建物から構成される。また東側掘立柱建物群の中央から北側にかけては、ピットが続く事から関連する建物が存在する可能性もある。しかし北側については10区の調査でそこまで伸びるピット群は検出されていない事、また北側の自然堤の南斜面までの幅があまりない事からやはり4棟で1群を形成していると考えて良い。

溝  
SD10B16 の北面には、旧流路 SD10B14 の方向に流れると考えられる溝 SD10B16 があり、そこには多くの弥生土器の破片が見つかっている。恐らく集落内の不要物の投棄場所であったと推定できる。また南側・北側の自然堤の中間部分になる窪地部分で、S X 704 と S X 709 また S X 703 と性格の不明な土坑が続き、内部からは少量の土器片が出土している。これらは S X 802 から距離が離れているにもかかわらずそれと類似の土器片が多くまた全体に小破片で摩滅が激しいので、この付近にこれらの土坑を連続した東西方向の溝があったと推定する事もできる。

この様に原川遺跡では居住域と土器棺墓からなる墓域とが隣接しながらも明確に分離し成立しているし、居住域も4棟を単位集団とし2群またはそれ以上より形成される集落として構成されていると考えることができる。

### 第3節 堀立柱建物跡

検出された建物跡はSH708～SH711の4棟を含む広がりで西側の一群を、またSH712～SH715の4棟を含む広がりで、東側の一群を形成しているものと思われる。いずれも柱穴は20～30cmと小さく、桁行きの柱間はやや不規則である。1間×1間・2棟、1間×2間・3棟、1間×3間・3棟と梁間は全て1間である。建物の柱穴は掘り方が明瞭ではなかったが、他の遺跡で発見されている堀立柱建物の例でも見るよう、柱の掘り方が小さく、ほとんど柱とおなじ程度の太さであったためと考えられる。柱穴の覆土はいずれも炭化物を含む暗灰色ないし暗褐色粘土である。検出面での柱穴の海拔高は15.50m～15.90mの間に含まれる。

桁行・梁間

柱穴の覆土

#### 東側堀立柱建物群

##### SH708 (第7図 図版6)

J-16～17グリッドに位置する。2間×1間の南北棟建物で主軸方位はE-34°-S、桁行き3.20m 梁間2.22mである。柱穴はP1～P6の6本を数える。桁行きは2間で柱間の寸法に大きな差がある。柱穴の大きさはほぼ円形で径17～22cm、垂直に掘られており深さは検出面から10.5～25.6cmを測る。建物の平面積は7.09m<sup>2</sup>である。

規 横

柱穴内から沈線を持つ土器片(第9図 拓1)が出土しており、また炭化物の混入が顕著である。

##### SH709 (第7図 図版6)

J-16～17グリッドに位置する。1間×1間の建物で柱間の長い方を棟方向と考えると東西棟で主軸方位はE-11°30'-N、桁行き1.72m 梁間1.32mである。柱穴はP1～P4を数え P4は試掘坑の壁近くに想定される。柱穴の大きさはほぼ円形で径21～22cm、垂直に掘られており深さは16.1～23.3cmを測る。豎穴住居跡の可能性も考慮したがここでは堀立柱建物跡としておく。建物の平面積は2.27m<sup>2</sup>である。規模の上からは8棟のうち最も小さいものである。

規 横

##### SH710 (第8図 図版6)

J-17グリッドに位置する。2間×1間の南北棟建物で主軸方位はN-3°30'-W、桁行き3.42m 梁間2.06mである。柱穴はP1～P6の6本を数える。柱穴の大きさは梢円形または円形で径40～22cm、全部の柱穴が斜めに掘られている。深さは19.7～30.7cmを測るが底径は14～23cmでSH708・SH709の柱穴の底径と変わらない。建物の平面積は7.02m<sup>2</sup>である。SH711と同じ方向で隣接している。

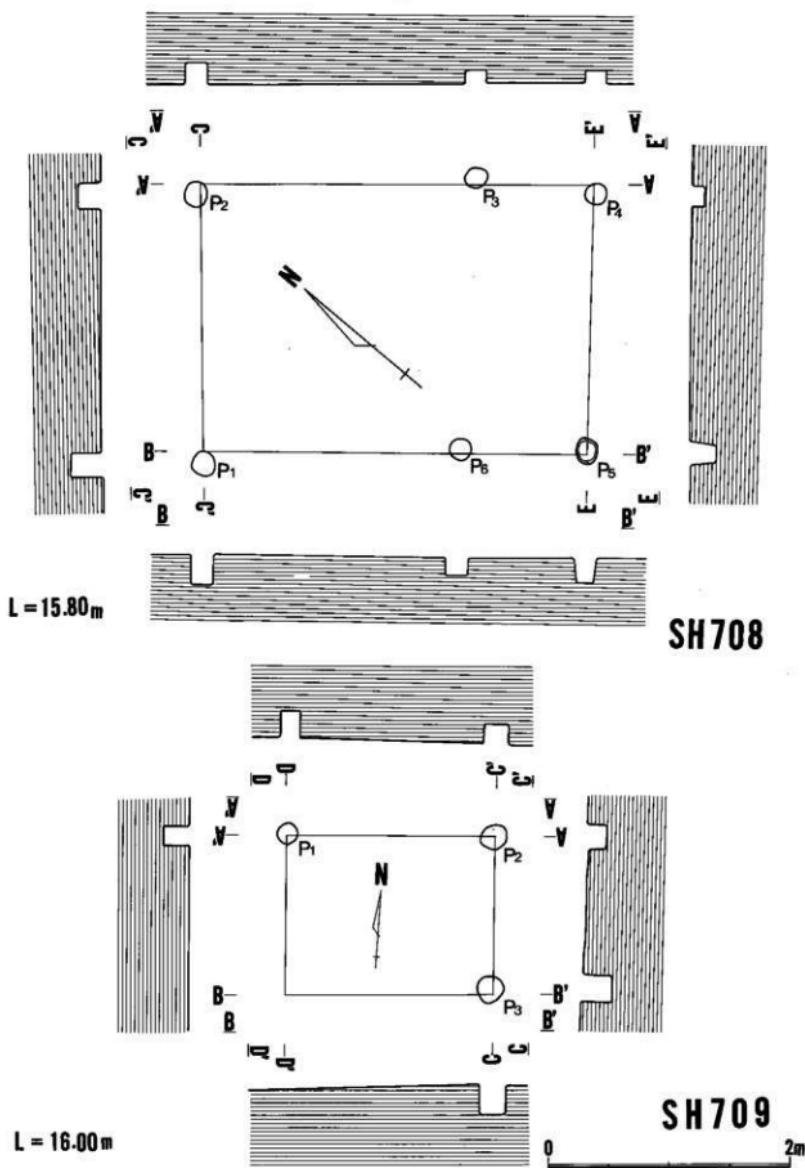
規 横

##### SH711 (第8図 図版7)

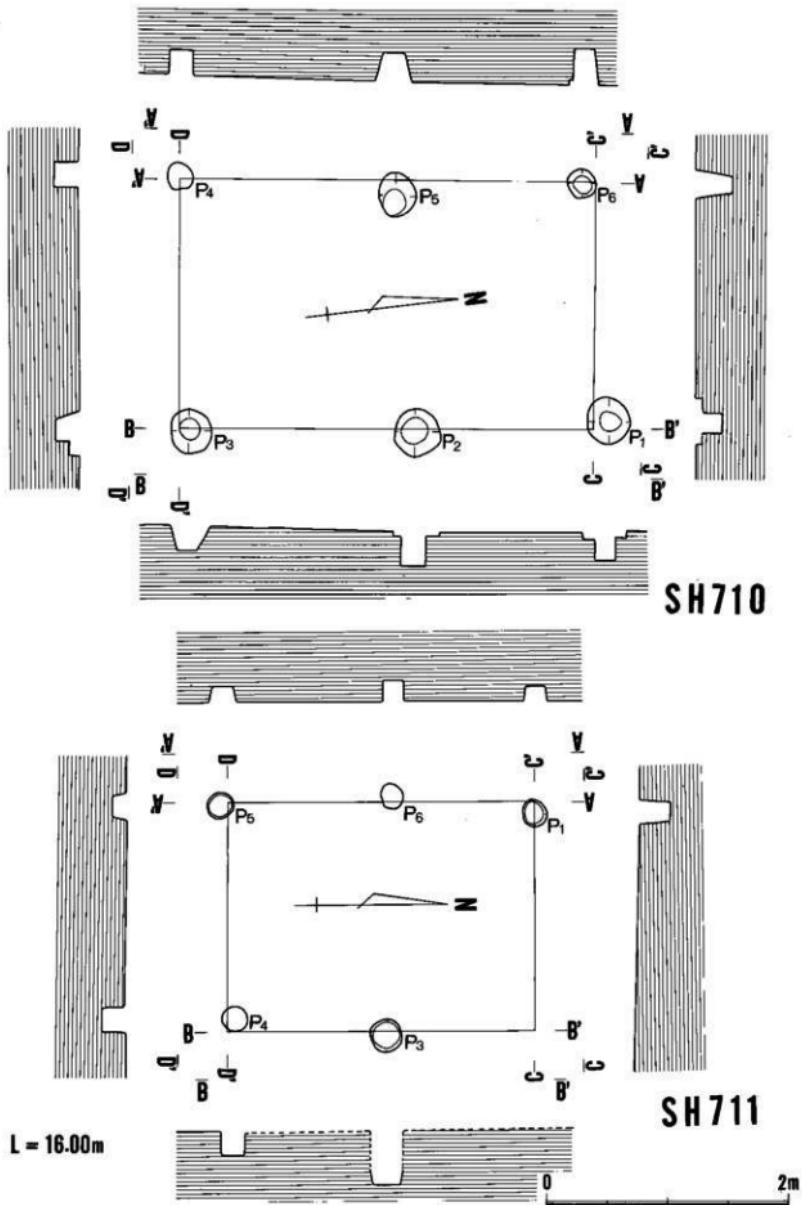
I-17～J-17グリッドに位置する。2間×1間の南北棟建物で主軸方位はN-8°20'-W、桁行き2.54m 梁間1.90mである。柱穴はP1～P6を数えるが柱穴P2は試掘坑にかかり検出できなかった。柱穴の大きさは円形で径20～28cm、ほとんど垂直に掘られており深さは13.2～25.2cmを測り柱穴によりやや差がある。建物の平面積は4.82m<sup>2</sup>である。SH710の南側に隣接している。

規 横

柱穴から、幅が狭い磨り消し縄文を持った壺の胴部破片(第9図 拓2)が出土している。



第7図 挿立柱建物跡造構実測図1 (1/40)



第8図 据立柱建物跡造構実測図2

### 西側掘立柱建物群

#### SH712 (第10図 図版7)

規 模 I-19グリッドに位置する。3間×1間の東西棟建物で主軸方位はE-44°-N、桁行き4.09m、梁間2.32mである。柱穴はP1-P8の8本を数える。柱穴の大きさは円形で径16~29cm、ほぼ垂直に掘られているが、深さは16.8~34.8cmを測り、ややばらつきがある。現地の調査日誌によれば柱穴には柱の残痕が存在したとのことである。建物の平面積は8.95m<sup>2</sup>である。

#### SH713 (第10図 図版8)

規 模 I-20グリッドに位置する。3間×1間の東西棟の建物で主軸方位はE-33°10'-N、桁行き3.59m、梁間2.27mである。柱穴はP1-P8の8本を数える。柱穴の大きさは円形で径16~29cm、ほぼ垂直に掘られているが、深さは16.8~34.8cmと先のSH712と同様その深さに多少のばらつきがある。建物の平面積は8.18m<sup>2</sup>である。

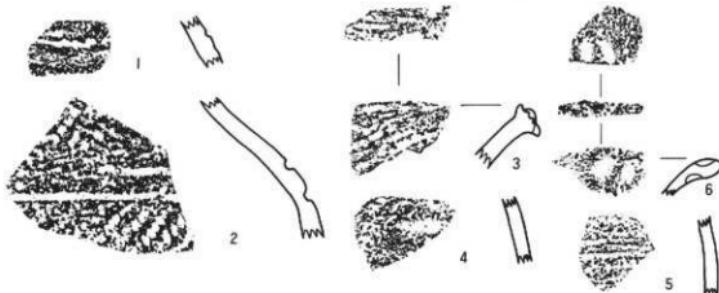
#### SH714 (第11図 図版9)

規 模 I-20~I-21グリッドに位置する。3間×1間の南北棟の建物で主軸方位はN-28°-E、桁行き4.03m、梁間2.02mである。柱穴はP1-P8の8本を数える。柱穴の大きさは円形で径16~26cm、ほぼ垂直に掘られており深さは17.0~32.7cmを測りややばらつきがある。建物の平面積は8.13m<sup>2</sup>である。

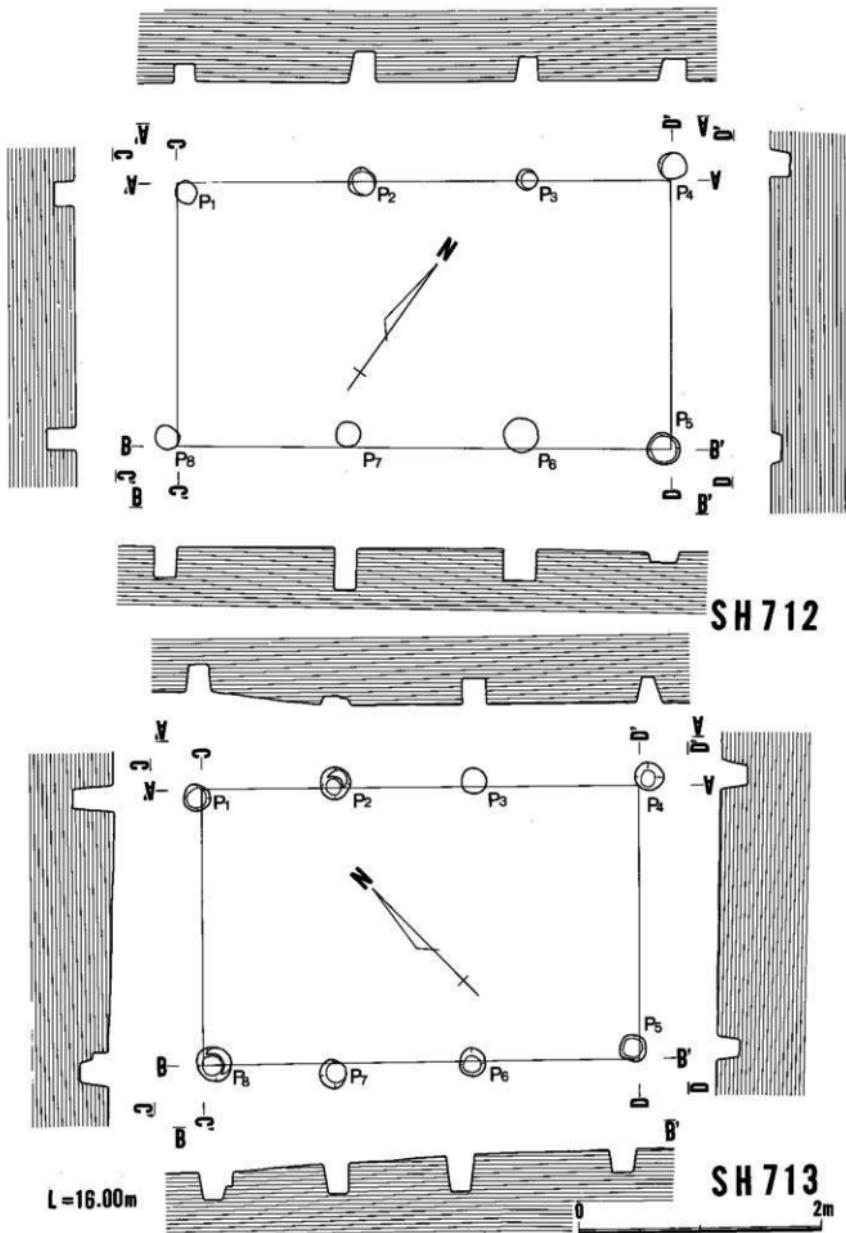
柱穴から、口唇部に条痕を持ち体部に斜条痕を施した中期初頭の甕の口縁の小破片（第9図 拓3）が出土しており、この遺構の年代を示している。拓6は小頸甕の口唇部の小破片で内側と外側に刻みを設けている。また黒耀石の石鏃の破片を2つ検出（第40図）している。

#### SH715 (第11図)

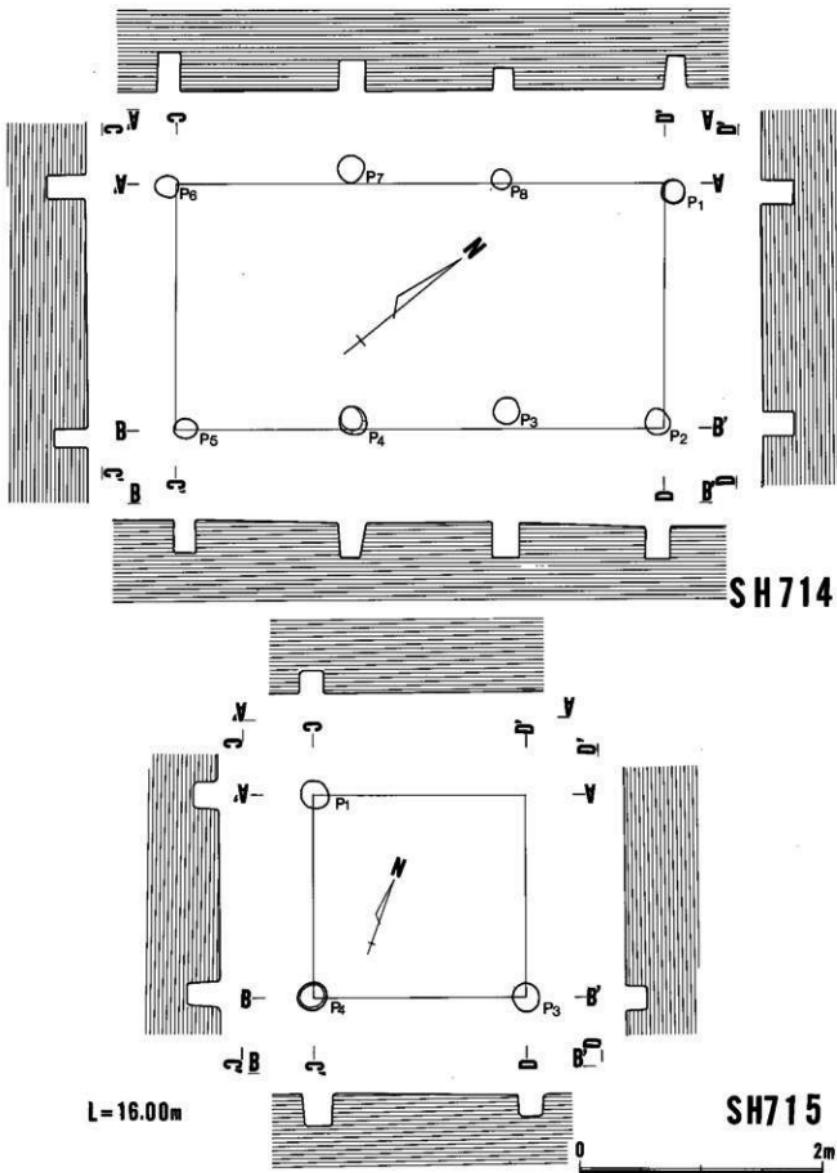
規 模 I-20~21グリッドに位置する。1間×1間の建物で柱間の長い方を棟方向と考えると東西棟で主軸方位はN-70°-E、桁行き1.75m、梁間1.67mである。柱穴はP1~P4の4本を数えるが、柱穴P2は北側の調査区外で検出できなかった。柱穴の大きさはほぼ円形で径22~24cm、ほぼ垂直に掘られており深さは17.6~26.4cmを測る。建物の平面積は2.94m<sup>2</sup>である。この辺りは柱穴が多く発掘されており他に掘立柱建物の存在が予想されたが現地調査では確認できなかった。規模の上からは8棟のうち最も小さいSH708よりもやや大きい程度であり、建物群の構成の上からも確実性が強いと考え整理の過程で建物跡と認定した。



第9図 掘立柱建物跡柱穴出土遺物拓影 (5/8)



第10図 据立柱建物跡遺構実測図 3



第11図 摺立柱建物跡遺構実測図4

第2表 据立柱建物跡 柱穴一覧表

据立柱建物跡	桁 行 柱 間(m)	桁 行(m)	棟 間(m)	面 積 (m <sup>2</sup> )	S H 据立柱建物跡	
					柱穴 プラン (長径×短径-深さ) (m)	備考 (開取、棟向、方位)
S H - 708	P2~P4 2.27	P2~P4 3.24	P2~P1 2.21	7.09	P1 (21 × 20 - 25.7) P2 (22 × 20 - 18.8) P3 (18 × 16 - 25.6) P4 (18 × 17 - 10.5)	2間×1間
	P3~P4 0.97				P5 (20 × 18 - 21.1) P6 (18 × 18 - 14.9)	南北棟
	P1~P6 2.11					E-34°-S
	P6~P5 1.06	P1~P5 3.17	P4~P5 2.22	(P3, P4, P5, P6 2.23)		
S H - 709		P1~P2 1.72	P1~P4 1.32 (?)		P1 (22 × 21 - 21.8) P2 (22 × 21 - 16.1) P3 (22 × 21 - 23.3) P4 推定	1間×1間 東西棟 E-11°30'-N
		P4~P3 1.72 (?)	P2~P3 1.32	2.27		
S H - 710	P1~P2 1.53	P1~P3 3.42	P1~P6 2.05	7.02	P1 (40 × 36 - 22.1) P2 (40 × 38 - 29.0) P3 (37 × 32 - 19.7) P4 (22 × 22 - 20.1)	2間×1間
	P2~P3 1.89				P5 (36 × 31 - 23.1) P6 (25 × 25 - 30.5)	南北棟
	P6~P5 1.53					N-3°30'-N
	P5~P4 1.89	P6~P4 3.42	P3~P4 2.06	(P2, P3, P4, P5 3.87)		
S H - 711	P2~P3 1.20	P2~P4 2.53	P2~P1 1.90	4.82	P1 (22 × 22 - 25.7) P2 推定 P3 (27 × 28 - 13.5) P4 (21 × 22 - 18.9)	2間×1間
	P3~P4 1.33				P5 (22 × 20 - 13.2) P6 (20 × 20 - 19.3)	南北棟
	P1~P6 1.18					N-8°20'-W
	P6~P5 1.36	P1~P5 2.54	P4~P5 1.90	(P3, P4, P6, P5 2.52)		
S H - 712				8.954	P1 (20 × 17 - 16.2) P2 (24 × 22 - 25.2) P3 (18 × 16 - 20 ) P4 (24 × 22 - 16.8)	3間×1間
	P1~P2 1.46	P1~P4 4.09	P1~P8 2.20	(P1, P2, P7, P8 3.12)	P5 (28 × 24 - 8.3) P6 (29 × 20 - 25.8) P7 (20 × 19 - 34.8) P8 (20 × 18 - 25.2)	東西棟
	P2~P3 1.41					E-44°-N
	P3~P4 1.22					
	P8~P7 1.38					
	P7~P6 1.44					
	P6~P5 1.23	P8~P5 4.05	P5~P4 2.20	(P3, P4, P5, P6 2.68)		
S H - 713				8.08	P1 (22 × 21 - 32.3) P2 (24 × 25 - 7.1) P3 (22 × 22 - 21.3) P4 (22 × 22 - 20.6) P5 (22 × 22 - 16.5) P6 (22 × 20 - 30.2) P7 (23 × 20 - 23.8) P8 (30 × 27 - 22.5)	3間×1間
	P1~P2 1.12	P1~P4 3.59	P1~P8 2.25	(P1, P2, P7, P8 2.64)		南北棟
	P2~P3 1.13					E-39°10'-S
	P3~P4 1.34					
	P8~P7 1.12					
	P7~P6 1.13					
S H - 714	P6~P5 1.34	P8~P5 3.59	P4~P5 2.27	(P3, P4, P5, P6 3.04)		
	P2~P3 1.29	P2~P5 4.03	P2~P1 2.02	8.13	P1 (20 × 20 - 27.2) P2 (21 × 21 - 25.9) P3 (22 × 21 - 29.9) P4 (22 × 21 - 28.3)	3間×1間
	P3~P4 1.28				P5 (26 × 23 - 28.2) P6 (19 × 18 - 32.7) P7 (22 × 22 - 25.2) P8 (16 × 16 - 17.0)	南北棟
	P4~P5 1.46					N-28°-E
	P1~P8 1.29					
S H - 715	P8~P7 1.29					
	P7~P6 1.44	P1~P6 4.02	P5~P6 2.02	(P4, P5, P7, P6 2.90)		
S H - 715		P1~P2 1.75 (?)	P1~P4 1.67 (?)		P1 (24 × 23 - 20.0) P2 推定 P3 (24 × 22 - 17.6) P4 (24 × 22 - 26.4)	1間×1間 東西棟 N-70°-E
				2.94		
		P4~P3 1.75 (?)	P2~P3 1.67 (?)			

#### 第4節 土器棺墓群

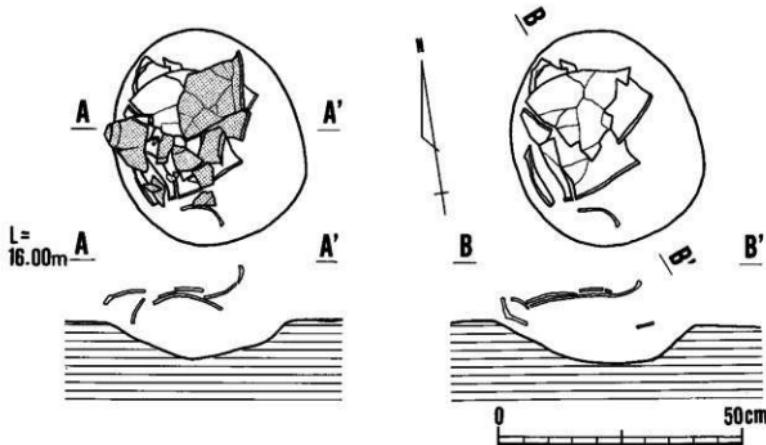
**群構成** 土器棺墓群は6基確認している。集落の立地条件で述べた通り発見された位置から東側と西側の2群に分かれて墓域を形成する可能性がある。SF702とSF806の2基、またSF1101、SF1102、SF1103、SF1105の4基でそれぞれ1群を成す。あるいは先の掘立柱建物群にそれぞれが結びつく可能性が考えられる。

**器種構成** 発見された土器棺墓群は、甕を使用した合わせ口棺と単棺または壺と甕を使用したものや壺だけのものなど、使用された器種・組合せは多様である。検出された土器棺は先に触れたようにSF806を除いて単棺である。いずれも棺を埋めた土坑の掘り方は明らかでなく、土器をかなり露出させた状態で検出している。

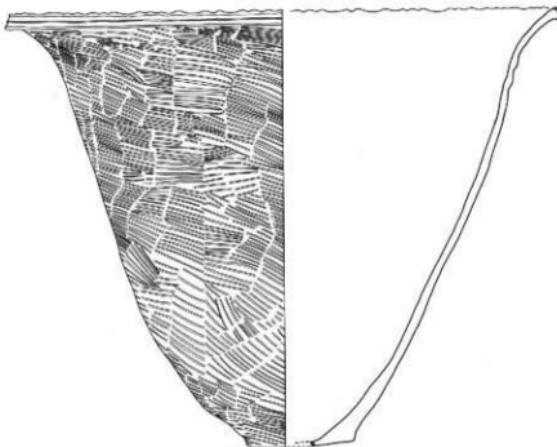
##### SF702 (第12図 図版8)

**甕の単棺** I-20グリッドに位置し掘立柱建物跡群に最も近い。土坑の大きさは明確ではないが、覆土に炭化物の含まれている範囲を土坑と推定している。それによれば土坑は径0.65m程度で平面は橢円であり、断面は皿状になっている。深さはさほど深くなく土器棺が埋まる程度と推定している。第13図に示した甕を本体にしているが、いくつかの大破片に壊れている。口縁部が東南方向を向いている。また内部より少量の炭化物が検出した。

使用されていた甕(第13図 図版16)は、口縁部の2/3と体部の1/2が残っていたため全体を復元した。口径27.1cm、器高34cm、底径6.7cmで、暗褐色を呈している。胎土には2~3mm程の砂礫が混入し、焼成はあまり良くない。口縁部は外反させる。口唇部は面を取り半截竹管で2本の平行沈線を施した後口縁全体を6分割するように指でつまんでいる。また口唇部の沈線と同じ工具で口縁の内側にキザミを施している。体部には右廻りに上から下に斜めの荒い条痕を施している。条痕の単位は4本/1.6cmであり、原体は明らかでないが植物の茎を使用していると考えられる。底部への穿孔はみられない。



第12図 土器棺墓 SF702 平面図  
左. 土器上面 右. 土器下面



第13図 土器棺SF 702 出土遺物復元図

#### SF806 (第14図 図版9)

I-21グリッドに位置する。最も良好な保存状態で検出された合わせ口の土器棺である。ほぼ同じ大きさの甕を口縁部でぴったりと合わせ、さらに合わせた部分を中心に別の甕の破片を上からかぶせている。二つを合わせた土器棺の長径は63cm、短径は37cmである。土器棺の検出されたレベルは海拔高15.85mであった。その時点での土坑の範囲を確認したところ長径0.82m、短径0.52mの楕円形の土坑をとらえたが実際の掘り込み面は確認面よりそれほど高くないと考えられる。土器棺の主軸の方針はN-91を示し西側をやや高くして斜めに埋設されている。

この土器棺は保存状態が良いため、現地では解体を行わずそのまま周囲の土も含めて取り上げてあり、整理作業の段階になって初めて解体作業を行った。まず蓋のように、上面にかぶせてあった土器片を除いたところ、使用された甕は土圧のためにやや扁平になっていたものの、ほぼ合わせた当時のままの状態を保っていた。内部には割れ目よりも流れ込んだ粘土が充填しており炭化物も含まれていた。土器棺内部の土壤の脂肪酸分析を行った結果、内部に哺乳動物（ヒト）が存在した兆候があるとの報告を得ており、埋葬用のものであることを確認した。詳細は中野益男氏による報文（第8章）を参照されたい。またこの土器棺付近では地震による噴砂現象が観察されている。詳細については加藤芳朗氏の報文（第7章）を参照されたい。合わせ口の土器棺の蓋の部分にかぶせてあった土器は、風化が激しく取り上げは不能であったが、観察により甕の破片と考えられ、わずかに斜め方向の条痕が観察された。合わせ口に使われていた甕が完形で残っていたので、これは別の個体の破片を使用していると考えられる。底部は残っていないので体部から口縁部にかけての膨らみを利用して内側を下にして重ね合わせていると推定できる。

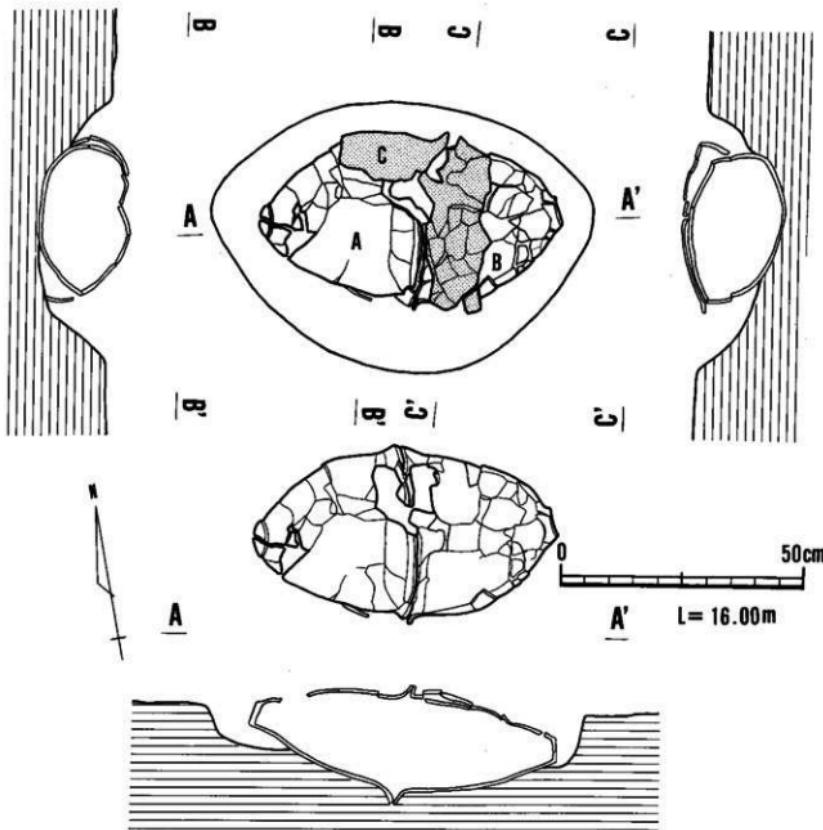
使用されていた甕は2個体ともほぼ同形のものなので、識別するため西側をSF806(A)、

合わせ口  
甕  
棺

解体作業

脂 脂 酸  
分 析

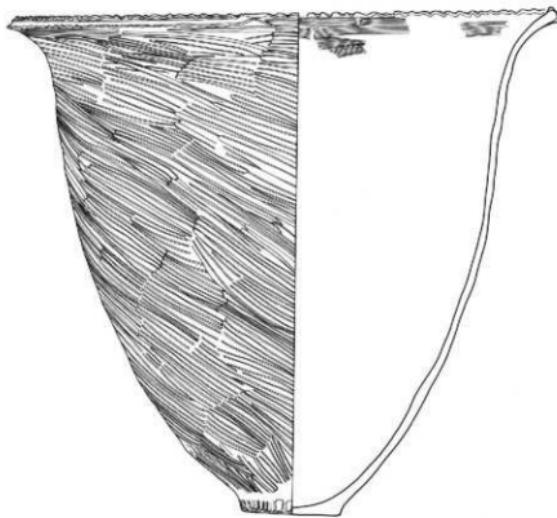
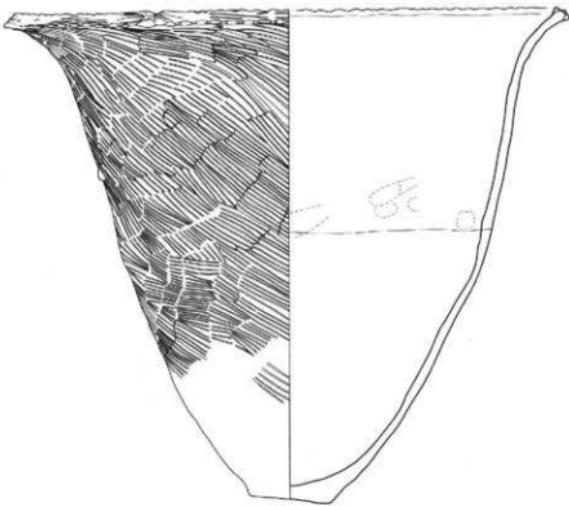
噴 砂 現 象



第14図 土器棺墓 SF 806 平面図

東側を（B）とした。

**S F 806 (A)** S F 806 (A) (第15図上 図版17) は土圧で変形を受けているがほぼ完全に残っていた。口径35.2cm、底径5.0cm、器高30.4cmで焼成は悪くはないが、劣化のため表面が磨滅しており、体部の条痕の残りはあまり良くない。色調は茶褐色を呈し外面の胴部中央部より上にかけてと底部内側に炭化物が付着して黒褐色を呈し、胎土には1~2mmほどの砂礫を含む。口縁部は外反させ口唇部に面を取り半截竹管で2本の平行沈線を施した後同じ工具で口唇部の内側にキザミ目を施している。口唇部6ヶ所程内外両面から指でつまんでおり、先のS斜条痕 F702あるいはS F 806 (B) とよく似ている。体部には単方向の浅い斜条痕を全体に施す。条痕の原体は植物の茎のような棒状施文具を束ねたと考えられ、土器を時計回りに回転させながら上から下へ左回りに斜めに条痕を施している。条痕の単位は4本/1.5cmである。



第15図 土器棺 S F 806出土遺物 復元図 (A) : 上 • (B) : 下

S F 806 (B) (第15図下 図版17) も土圧でやや変形を受けているが、ほぼ完全に残っている。(A) と細部の調整まで非常に良く似ている。口径34.4cm、底径6.1cm、器高31.1cmで焼成も良く体部の条痕の残りも比較的よい。淡茶褐色で胴部中央部より上にかけてと底部裾に炭化物が付着し暗褐色を呈する。胎土には1mmほどの黒色砂粒や雲母片を含む。口縁部は外反させた後口唇部に面を取り、半截竹管で2本の平行沈線を施した後同じ工具で口唇部の内側にキザミ目を施している。口唇部の6ヶ所を内外面からつまんでいる。体部は浅い斜条痕を全体に施す。条痕原体は棒状施文具を束ねており条痕の単位は4本/1.6cmである。土器を右回りに回転させながら上から下へ左回りに斜めに条痕を施している。土器の内面は横撫で仕上げられているが一部に成形時の粘土輪積の痕が残っている。

#### 条痕の施文

##### S F 1101 (第16図 図版11)

#### 壺の单棺

L-18グリッドで検出した大型の壺1個体を使用した单棺の土器棺墓である。土坑掘り方の平面形は土器棺検出時で長径0.55m、短径0.4m、深さ0.1mの橿円形を確認しており本来の深さもちょうど土器棺が埋まる程度の深いものだと推定できる。大型の壺は底部を除いて胴部より上をほぼ1/4ずつ縦に分割されている。

#### 埋設の仕方

壺の残存状態が第16図上段の様に良好であったため、解体を慎重に進めることができた。その結果出土状態の詳細な観察から埋設の仕方を想定してみると次の様になる。まず下段の図のように土坑を掘りその中に壺体部破片の一枚を内側が上になるようにして置く。次に埋葬物を入れる。東南向きに底部の破片の内側を埋葬物に向かながら伏せるようにして置く。中段の図の様に残りの3枚を口縁部を東南に向けて全体が覆えるようにややすらしながら内側を下にして重ねる。検出状態からほぼ原形に近いと判断した。

この壺は復元するとほぼ完全な1個体となるが、外面の体部中央部分と底部、内面の底部に炭化物が付着していることから日常使用されていた壺の転用と考えられる。なお土坑内から他の遺物の出土は見られなかった。

#### 大型の壺

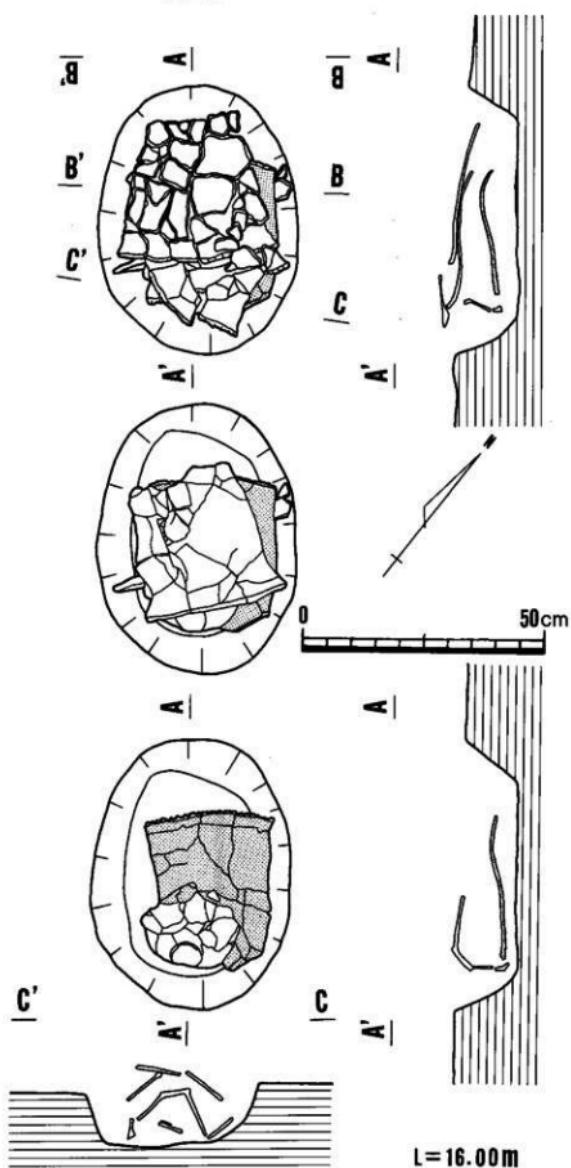
壺はほぼ完全に残っており復元できた(第17図 図版16)。復元された壺の中では最も大型である。土圧でやや変形を受けている。

口径39.8cm、底径6.1cm、器高34cmであり焼成も良好である。胎土は1~3mm程の砂礫を含むがその中でも石英の小粒子の比率が大きい。本来は淡黄土色であるが炭化物が付着して暗褐色を呈する。口縁部は外反させて面を取った後半截竹管により2本の平行沈線を施す。口唇部の内側にキザミ目を連続して施しており、また口唇部の8ヶ所を内外から指でつまんでいる。体部にはすべてやや荒い条痕が施される。条痕を施す順序は口縁部に近い部分から右回りに上から下へと横方向の条痕を施している。体部の条痕は基本的に横方向であるが一部に縦の羽条になっている部分も見られるが、これは体部の調整の中で最後に残った部分を縦羽条痕的に仕上げたためと考えられる。

#### 条痕の施文法

条痕の単位は4本/1.2cm幅であり長いところでは5~6cm程延ばしている。内側は撫で整形をしており口縁の内側に半截竹管による平行沈線が2組施されている。この平行沈線は口唇部のつまみの部分で波状の盛り上がりをみせる。条痕や口縁部の半截竹管による沈線、キザミに使用された工具はすべて幅2mm×4mm程の先端が丸い棒状工具(植物の茎か)ではないかと観察される。

第16図  
土器棺墓  
S F1101  
平面図



▷検出状況からみて S F1101は当初の形を動いていないと考えられるので、検出過程から逆に埋葬状況を想定すると①～③の順となる。

③ 上図  
残る2枚の壺の破片を少しずつずらしながらさらに全体を覆う様に重ね埋土する。

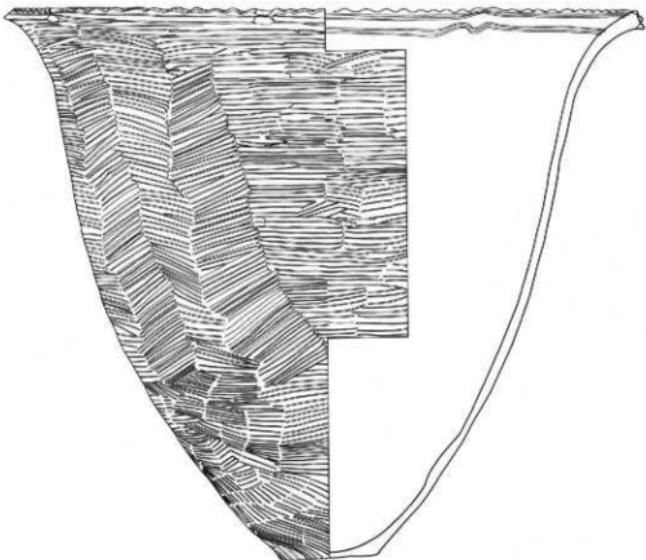


② 中央図  
残り3枚の壺の破片の内1枚を口縁部を東に向けて重ね合せる。



① 下図  
土坑を掘り、4分割した壺の1片を底にし埋葬物を入れる。東南に底を向けて底部をかぶせる。

L=16.00m



第17図 土器館 SF 1101 出土遺物 復元図

#### SF 1102 (第18図 図版12)

K-18グリッドに位置する。土坑の平面形は長軸方向0.55m、短軸方向で0.45mを測る梢円形である。掘り方も浅いと考えられる。

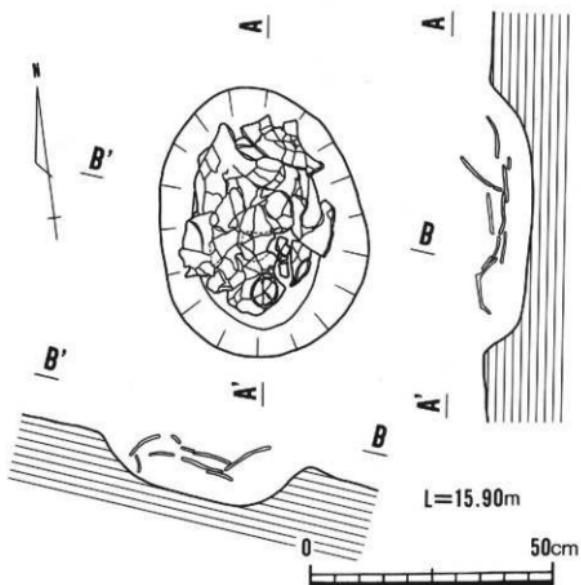
土器は土圧で粉々になっていたため埋設時の想定をしがたいが、断面の観察からすると底部を南にし同一個体の他の体部の破片を口縁部を南にしながら重ねたものである。

**壺の単棺** 使用されていた壺（第19図 図版18）はSF 702とほぼ同じで口径35.5cm、器高27.4cm、底径6.4cmである。口縁部1/6、体部は1/2が残存している。焼成は余り良くなく外側の体部中央に炭化物が少し付着している。胎土は荒く砂質で黒色粒子を含む。残りは良くないが体部には横または斜めの条痕が施され、単位は4本／1.8cmである。口縁部はゆるく外反した後面を取り沈線を施す。また内側にキザミ目をつける。

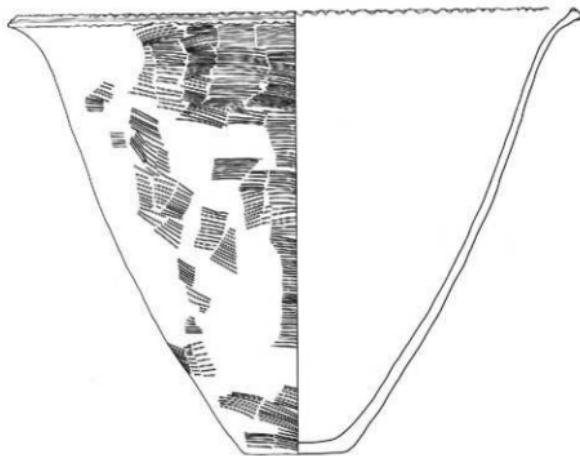
#### SF 1103 (第20図 図版12)

K-18グリッドで検出されたものである。約25cm四方の円形の土坑の中に壺の可能性が強い同一個体の破片が集中的に見られた。土器の量も残存が少なく土器棺墓とは考えられない部分もあるが出土地点から見て一応单棺の土器棺墓としておく。

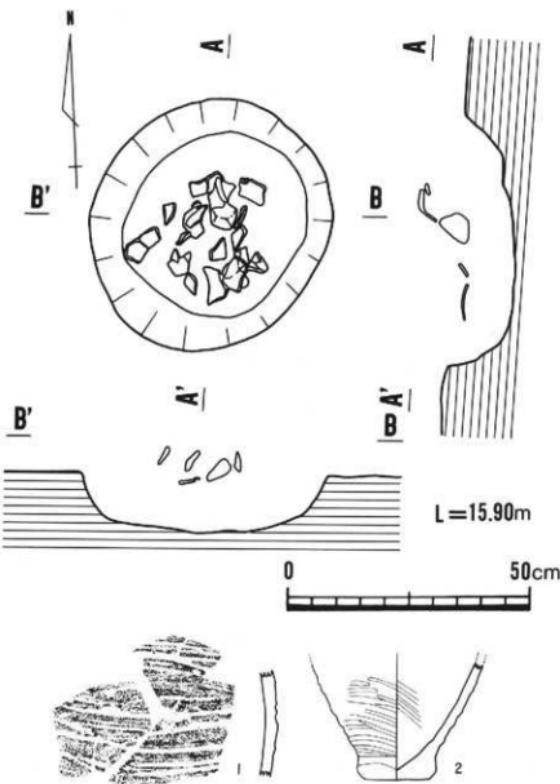
**壺** 第20図の1は壺の体部の破片であり2は底部の破片である。口縁部が残っていないため底部や体部の形から壺と推定した。焼成は良く赤褐色で胎土には5～6mmの石英を含む。先端が丸く幅4mmほどの棒状工具を数本束ねて、荒く斜めに条痕を施しており、単位は3本／2cmである。



第18図 土器棺墓 SF 1102 平面図



第19図 土器棺 SF 1102 出土遺物 復元図



第20図 土器棺墓 SF1103 平面図(上)・出土遺物(下)

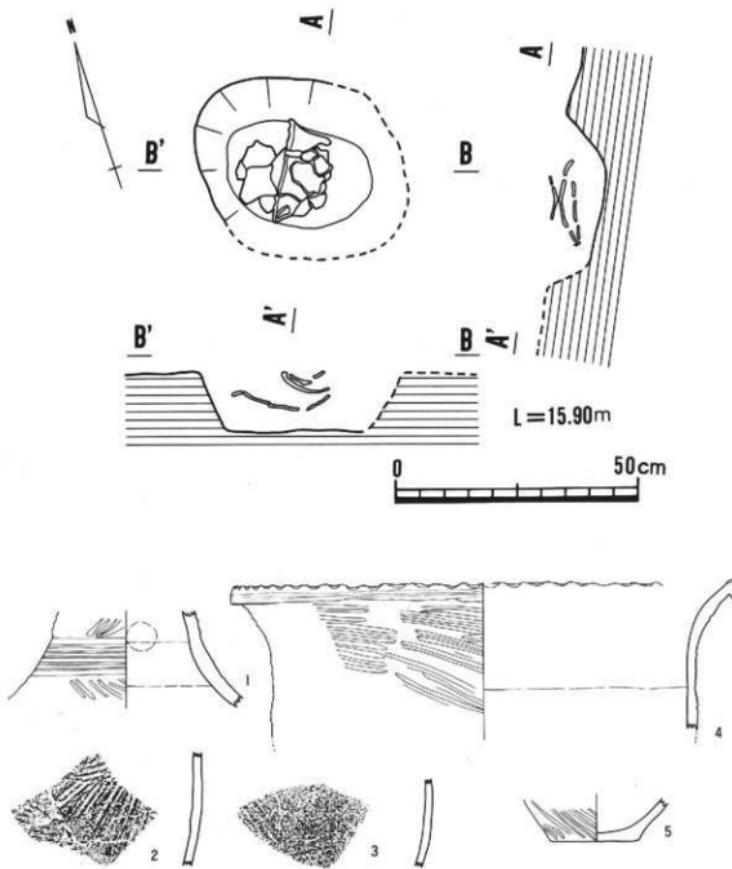
SF1105 (第19図 図版12)

L-19グリッドで検出されている。掘り方が検出できたのは北側のみであるが長径0.2m、短径0.18m程の楕円形ではないかと推定できる。

**壺・壺の  
土 器 棺**

出土した土器は3個体、その内の2個体は壺の破片で他は壺であるが、いずれも一部分の破片で完形になるものはない。検出状態から埋葬の手順を推定すると、まず土坑を堀り2個体分の壺の破片を内面を下にしておく。埋葬物を納めた後その上に壺の口縁部を内側を下にしてかぶせる。さらに壺の底部の破片をのせて全体を覆っている。第21図 拓1は壺の頸部から上胴部の破片である。焼成は良く淡茶褐色で砂礫を含む。幅4mm程の棒状工具を束ねて頸部の下部から斜条痕を施す。頸部中央に同じ工具で6本の横方向の櫛描文を施した後、上部の下にさらに斜条痕を施しているのが観察される。第21図 2は1とは別個体の壺の胴部破片と考えられる。淡茶色を呈し胎土は砂質が多く器面に浅い羽条痕が見

られる。第22図3・4は壺の口縁部と底部の破片であり同一個体と考えられる。口径31.2cm、底径5.5cmでSF806 (A)・(B)と同じタイプと考えられることから器高は35cm前後と推定できる。焼成は良く淡黄灰色で胎土には1~2mm程の黒色粒子、石英、雲母などの小粒子を含む。口縁部は外反させた後、面を取り半截竹管で平行沈線を施した後内側にキザミを入れている。条痕は土器を右に回転させながら左から右へ斜めに施しており単位は3本/1.2cmである。



第21図 SF1105 平面図(上)・出土遺物(下)

## 第5節 溝 S D10B16

### SD10B16 (第22図 図版13・14)

10区A～B F-18～19にかけて発見された、道路部分を挟んで長さ25m程が検出されており東西方向の溝である。溝底は西から東に向かってなだらかに落ち込んでいる。西側F-18では溝としての形態を示し幅1.2m、深さ0.2mを測り遺物もかなり密集した状態で出土している。しかし東側F-19付近になるとその流れは極く浅くなり遺物も拡散しているが炭化物が集中しているところもある。自然地形の窪みの部分にできた流路であり、東側を流れるS D10B14の下層の流れに合流していた可能性もある。遺物は溝の基底部に密着した状態で出土しており、先に述べたように南側に広がる居住域からの廃棄遺物とみられる。土器は比較的単一時期のものであり、ほぼ一括物と考えて良いと思われる。出土した土器の総破片数は1238片以上であるが、大半は小破片で器壁が荒れており施文など十分に観察できないものが多い。一部に復元できるものあるいは推定実測の可能なものがあり、23図～24図に示した。また拓本を25図～28図に示している。(拓本は1～124まで通し番号を付けている)

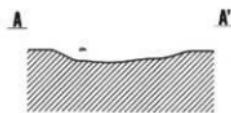
**条痕文土器** 出土した土器は壺・壺が中心であるが、他に小型壺等の特殊なものも含まれている。大半が条痕文系の土器であり、一部に範描によるもの、あるいは櫛描文・繩文を施したものがある。ここでは条痕文系の土器を中心に説明する。壺には大型壺、中型壺、小型壺の三者がある。

**大型壺** 大型壺 第23図1(第25図 拓2 図版18)は口縁部から頸部にかけての破片である。胎土に小破片を多く含んでいるが焼成は良く、器壁も厚い。一部に焼けひずみがあるが、推定復元で口径34cmを数える。口径の広さおよび、器壁のカーブから太頸の大型壺であろうと考えられる。口縁部に縦方向の条痕を施しており、頸部は器壁が荒れており明瞭でない

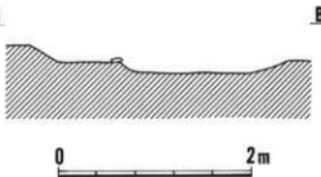
**太頸壺** が、恐らく横あるいは斜めの条痕を施しているものと思われる。この段階の太頸の大型壺は比較的少なく愛知県豊川市麻生田大橋遺跡・湖西市伊賀谷遺跡出土の土器群が復元されているが、他に類例は乏しい。また第23図2(第25図拓1)は口縁部から頸部の破片であり、口径は20cm程度であるが、頸部が長く直立しており、他の壺とはかなり異なる形態を示している。頸部に方形の重区画文を施し、その下に鋸歯文・横羽状および縱羽状の条痕を施している。頸部が長く肩の張った壺は中期中葉(第Ⅲ期)に属する嶺田式あるいは瓜郷式等に一般的に見られており、あるいはそれらの系譜に連なるものかも知れない。

**中型壺** 中型壺 口縁の外反した太頸壺が大半であるが一部に細頸の壺がある。太頸の壺には口縁部外側に凸帯を巡らすもの(壺A) 拓2～4と、口縁部に凸帯を持たないものの(壺B) 拓7～10とがある。壺Aは頸あるいは肩にも凸帯を持つものがあり(拓6 51～59) また拓56に示すように複数の凸帯の間を縦の凸帯で結んでいるものがある。凸帯の上には指頭あるいは棒状施文具による押引文を施しており、施文の方法でいくつかに細別が可能である。口縁部は断面が比較的角張ったものと丸みを持ったものがあるが、後者は小型壺に多い。前者は口唇部に沈線風の横位の条痕を施しており(拓4) 口唇端部に内・外から小さなキザミを施しているもの(拓4) 外側からのみキザミをついているもの(拓3) 等がある。拓14・19は胎土・色調から同一個体と考えられるもので、口唇部に範描きで細かい羽状文を施しており、一部に縦方向に凸帯を施している。口唇部に凸帯を持って

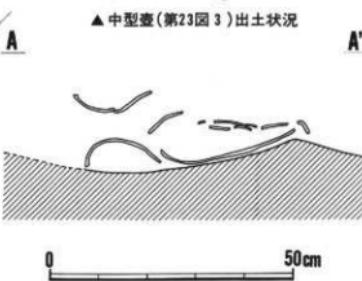
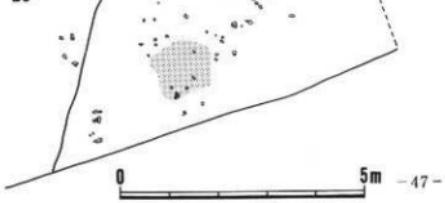
18

 $L = 15.80\text{ m}$ 

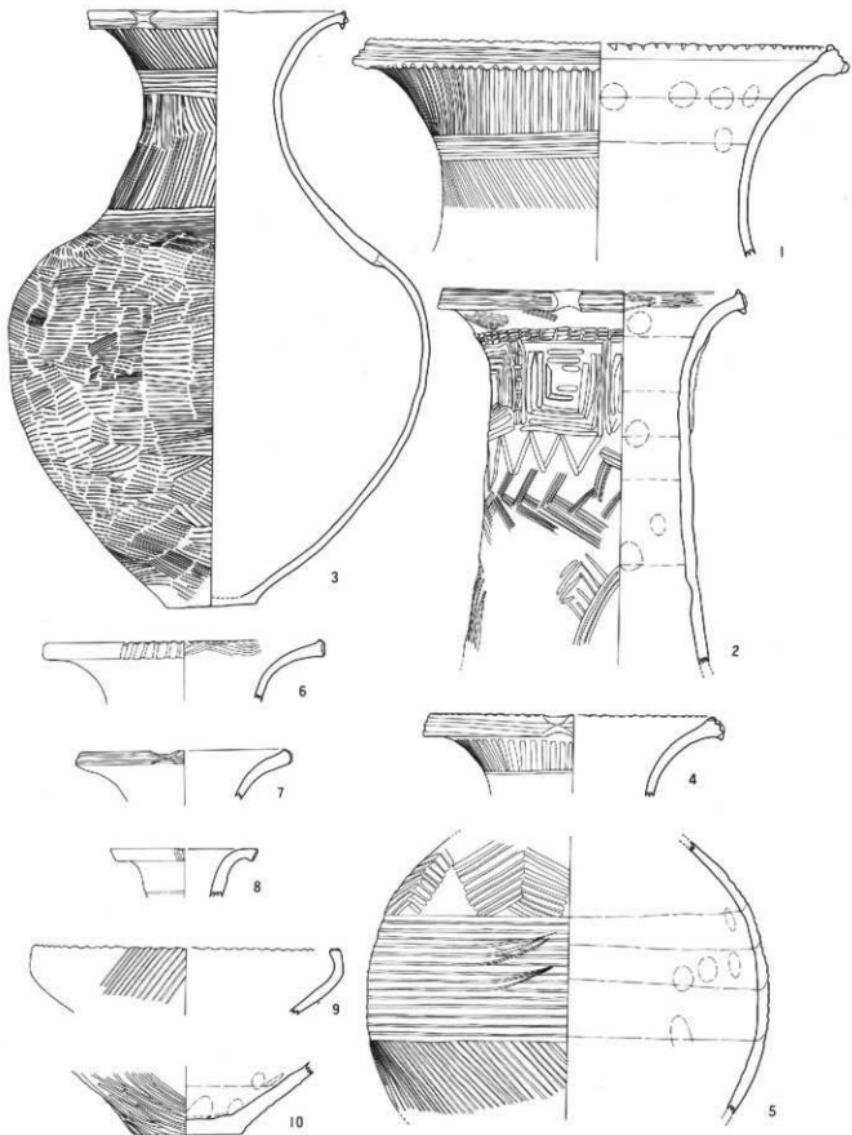
19



20

 $L = 15.70\text{ m}$ 

第22図 SD10B16 造構平面図



第23図 S D10B16 出土遺物 復元図1

いることからここに含めているが、胎土色調共に他の土器とは異なっており検討が必要である。口縁部の凸帶は口縁部に接してその直下に付けられているものが多いが、拓11に示したように口縁から少し下がった所に付けられているものがある。頸部に波状文を持つものが多いが、波状文には荒い櫛描き手法によるもの(拓49・50)と沈線によるもの(拓48)あるいは2本の沈線によるいわゆるコンパス文等がある。

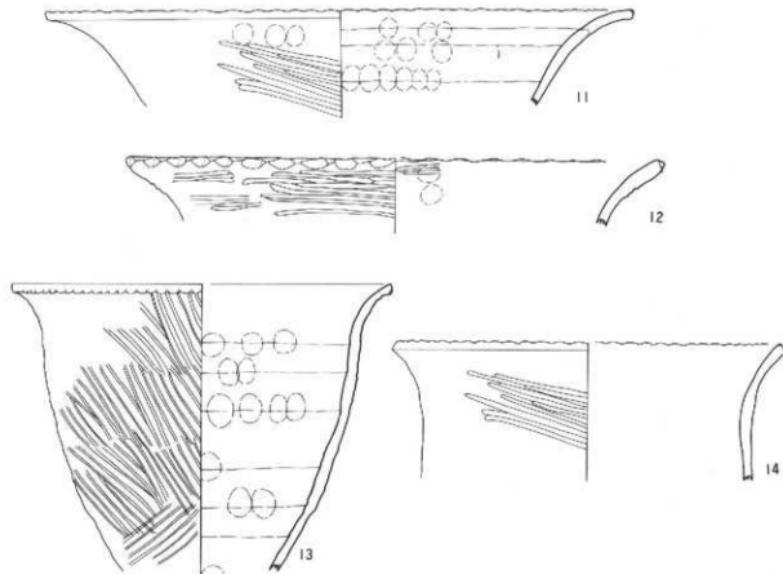
壺Bは口唇部に沈線風の横位の条痕を施しており、口縁に内外からキザミをいたるものあるいは内側からのみ小さなキザミを施したもの(拓9)がある。頸部から胴上半部には横方向の条痕のみのもの(拓21~24)、縱横の条痕を施したいわゆるT字文(拓26~29)あるいは横方向の条痕の間に横羽状の篦描文(拓36)を施したもの、さらには何列かの縱羽状文を施したもの等がある。拓37は横羽状の篦描文と繩文を組み合わせた珍しい例である。口縁の内側に波状文(拓9)あるいは平行線文を施したものがあり、また縱方向の櫛描文風の条痕を3~4カ所施すものがある。

細頸壺 条痕文系の土器は少ない。拓20に示したものは受け口の口縁を成すもので口唇部に円形の点列文を持っている。頸部以下の施文は明らかではないが櫛描き文あるいは繩文を持つものであろう。また拓60~81に示した擦り消し繩文を持った壺の多くは細頸の壺である。

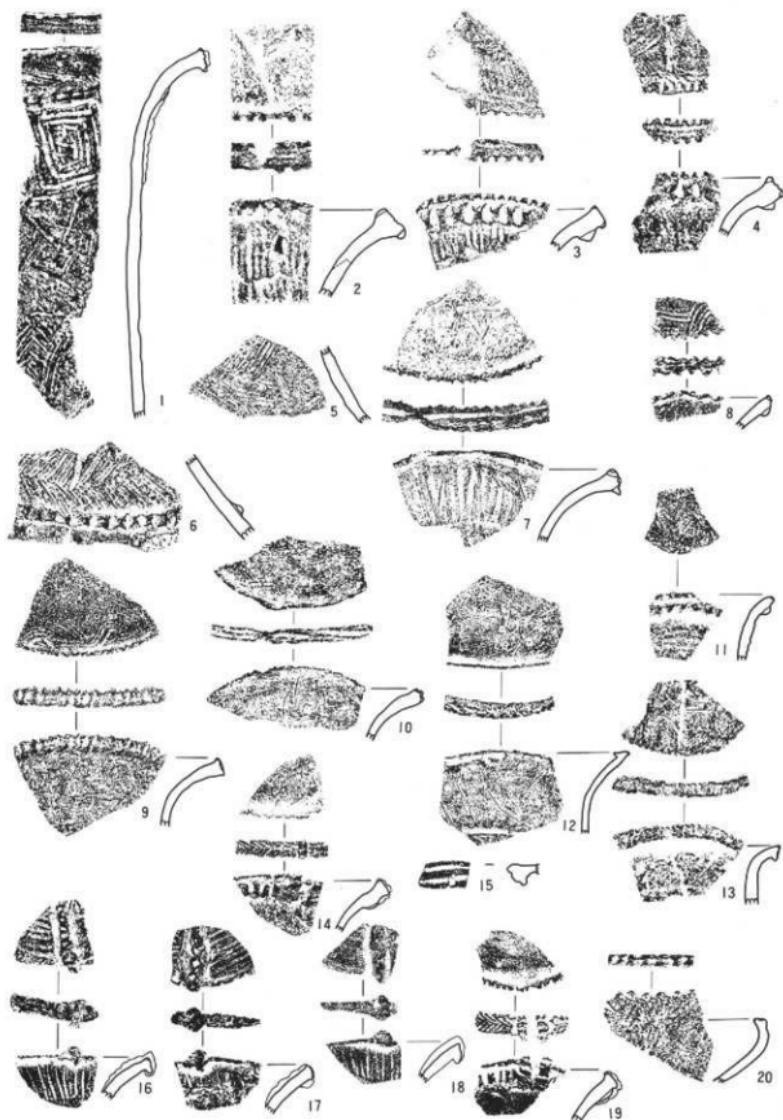
小型壺 小型壺は量的に多いものではない。器面全面に条痕文を施しているものと、篦描の平行線文あるいは縱羽状文で飾るものがある。また異形壺の図は小型の異形壺が含まれる。

細頸壺

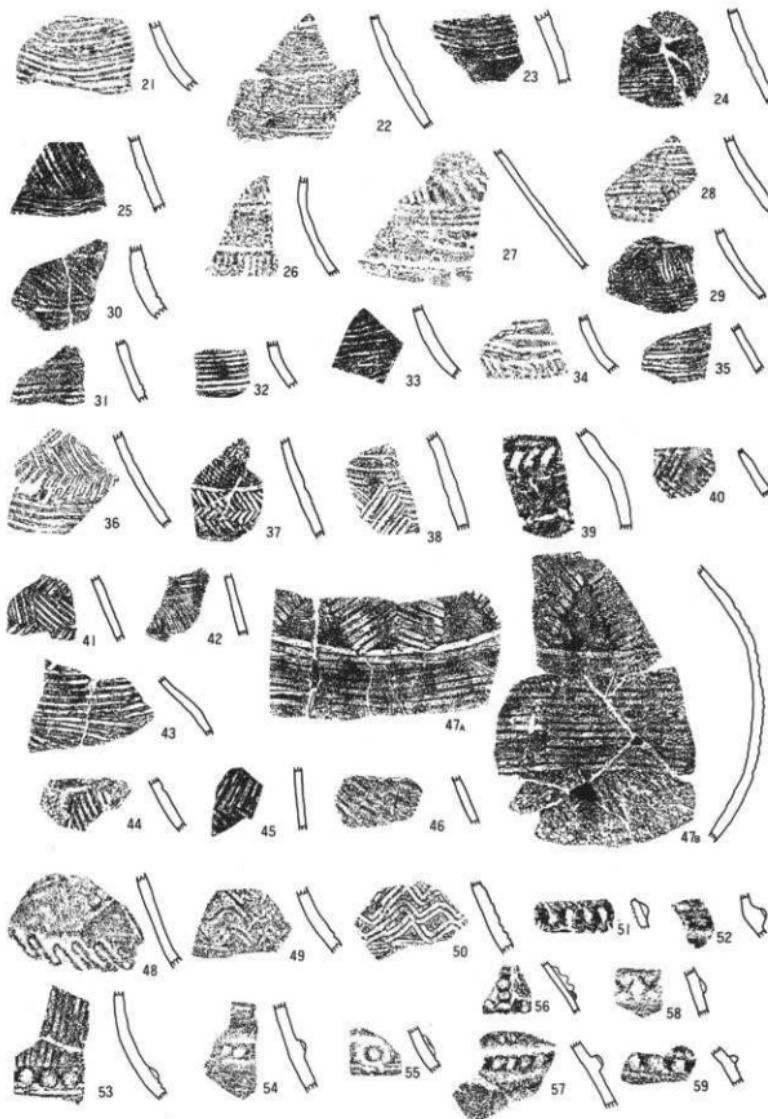
小型壺



第24図 S D 10B 16 出土遺物 復元図 2



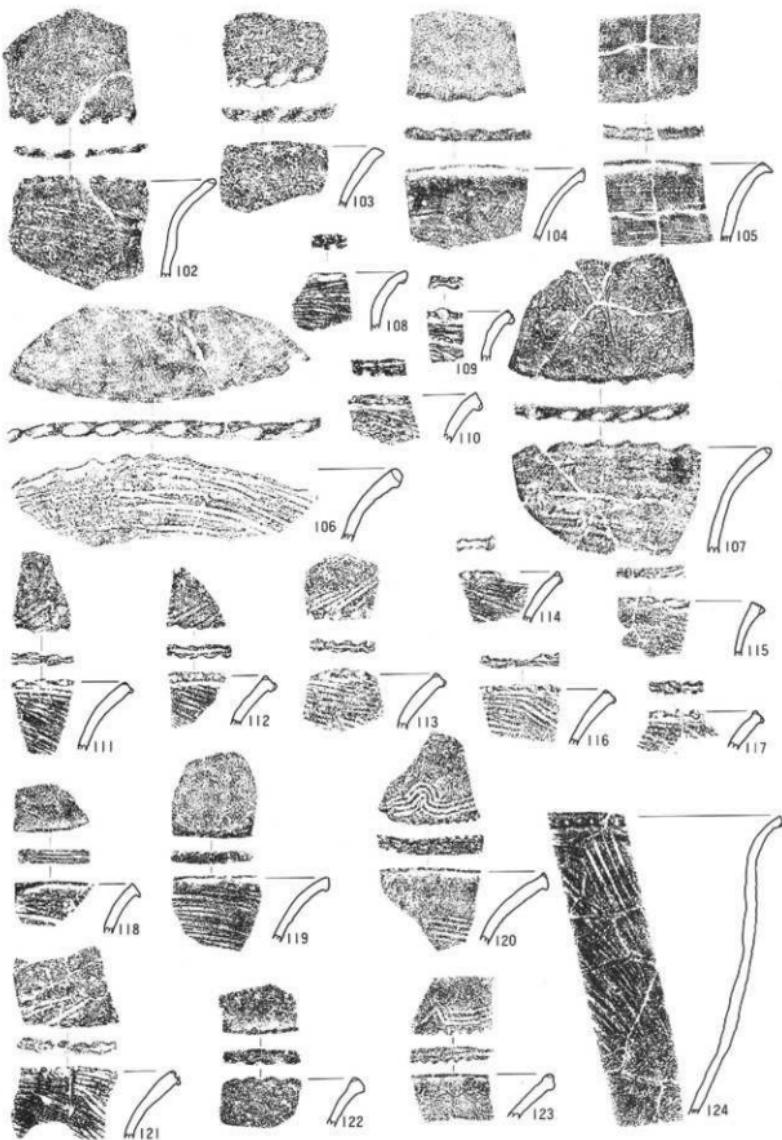
第25図 S D10B16出土遺物 拓影 その1



第26図 S D10B16出土遺物 拓影 その2



第27図 SD10B16出土遺物 拓影 その3



第28図 SD10B16出土遺物 拓影 その4

まれている。条痕文系の壺には外反する口縁に凸帯を持つもの（壺A拓11）とやはり外反する口縁を折返し気味にするが凸帯を持たないもの（壺B拓13）がある。拓13の土器は口唇部全面に縦方向のキザミを施している。頸部には横方向の条痕のみを施しているものが多い。

壺(A)

壺(B)

壺 口縁がやや外反し、胴部の張りが少ない。口唇部に施文したもの（壺A）と無文のもの（壺B）あるいは口縁内外に施文したもの（壺C）がある。壺Aには口唇部を平坦にし横位の条痕文を施したもの（拓111～118・121）あるいは指頭による押捺を施したもの（拓102～107）等がある。前者には口唇部内外にキザミを持つものとまったく持たないもの等があり、口縁内側に平行線文を持つものがある（拓120・123）。また器面の条痕は比較的整っているものが多い。後者は器面の条痕が荒く、斜めあるいは縦に施されているものが多い。この差が時間的なものか、地域的なものかは判断が難しいが、時間的なものである可能性が多い。壺Bにも横方向の浅い条痕のもの（拓119）と斜めの荒い条痕のもの（拓124）がある。

条痕文系土器の他に小型壺・広口壺・細頸壺等がある。拓12に示した土器は器面が荒れており表面の観察は十分できないが頸には一本の沈線が巡っており他は範磨きがしてある。口唇部を内側に折返し気味にし、平坦部を作つておりあまり見かけない器形をしているが、あるいは遠賀川系の広口壺の変形したものかも知れない。また第23図9に示した小型の異形壺がある。赤褐色をし、胎土・焼成の良くない土器である。この他に拓60～拓81に示したように磨り消し繩文を施したものがある。いずれも細頸壺になると思われる。

S D10B16出土の土器を条痕文系の土器を中心にして観察してきた。壺には容量から大・中・小の三者があるが、出土量の最も多い中型壺では、口縁に凸帯をもつ壺（壺A）と凸帯を持たないもの（壺B）の間には量的には差が無い。しかし両者の間には分布地域に多少の差があるようで、壺Aは遠江から三河にかけての地域に多く壺Bは駿河から東に多く分布している。また壺では口唇部に施文を持つ壺Aが圧倒的な量を占めるがなかでも口唇部に横位の条痕を施し胴部に整った斜めの条痕文を施したものが多い。さきにも述べたように、これらはいずれもこの地域の弥生中期前半の土器である丸子式土器に見られる特徴であり、この遺構出土の条痕文土器の多くが丸子式土器に比定し得ることを示している。しかし磨り消し繩文を持った土器が比較的多く見られること、小型の異形土器が含まれていること、また拓9・13・20等丸子式土器に含める事に無理がある土器が見られること、さらには壺Aの施文方法に雑多なものが多く含まれていることなど、資料全体には丸子式土器のみでなく多少の時間差のあるものが含まれていることを理解しておこうと思う。

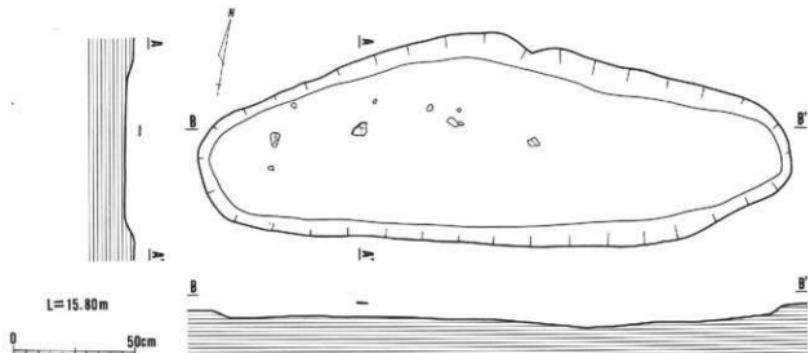
## 第6節 その他の遺構

### SX703 (第29図 図版15)

J-18グリッドに位置する。東西幅4.82m、南北幅1.72m、深さ0.34mの東西に細長い梢円形をした浅い窪みで長軸の方位はE-19°-Nである。覆土は2層に分かれ上層は暗灰色粘土に炭化物が多く混じり、遺構の性格は不明であり、SXとしている。土器片も含まれるに対して、下層は炭化物の混入がわずかな灰色粘土からなる。

出土遺物

遺物の量は比較的多いが、小破片が多くまとまつたものはない。しかし多少時間が経つと思われる壺底部第30図拓15を除き他は、全て条痕文系の壺・壺の破片である。第30図拓1～6は壺の底部口・縁部・頸部の破片である。壺には中型壺と小型壺がある。拓1・2・

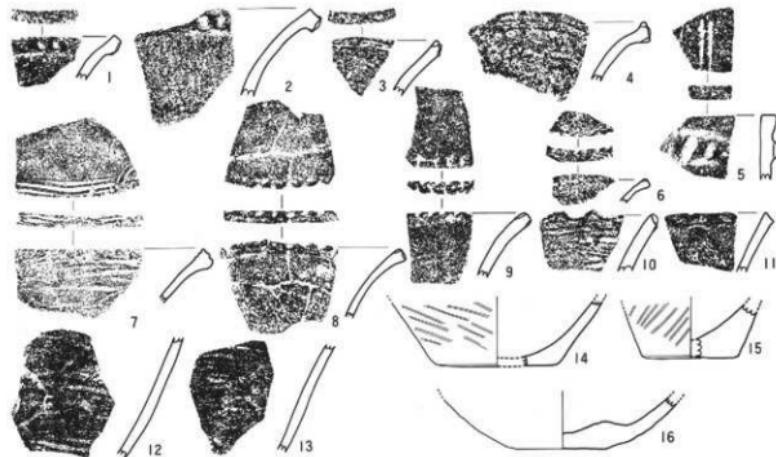


第29図 S X 703 平面図

5は口縁に凸帯を持っている。中でも拓5は口唇部ではなく口縁直下に凸帯を持ち、口唇部は角張っている。湖西市伊賀谷遺跡に類例がある。またS X 802からも同様の土器が出土している。また口縁内側に縦方向の沈線が2本あるが、おそらく3~4ヶ所内周を分割する形で施文されていると思われる。この時期の壺に良く見られる施文である。

口縁直下に  
凸帯のある  
土 器

拓7~14は甕である。拓7は口縁部内側に沈線を施しており、一部は弧状を施すらしい。壺、甕ともにこの地域の弥生中期初頭のものであり他に混じりは少ない、従ってこの遺構の年代もそこに把えることができる。しかし出土した土器は小破片で多くの個体を含んでおり、まとまったものではないので出土土器から遺構の性格を推定することはできない。



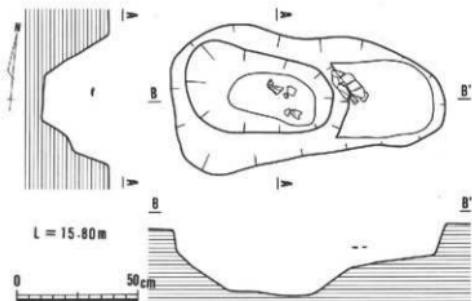
第30図 S X 703 出土遺物 拓影

#### SX704 (第31図 図版15)

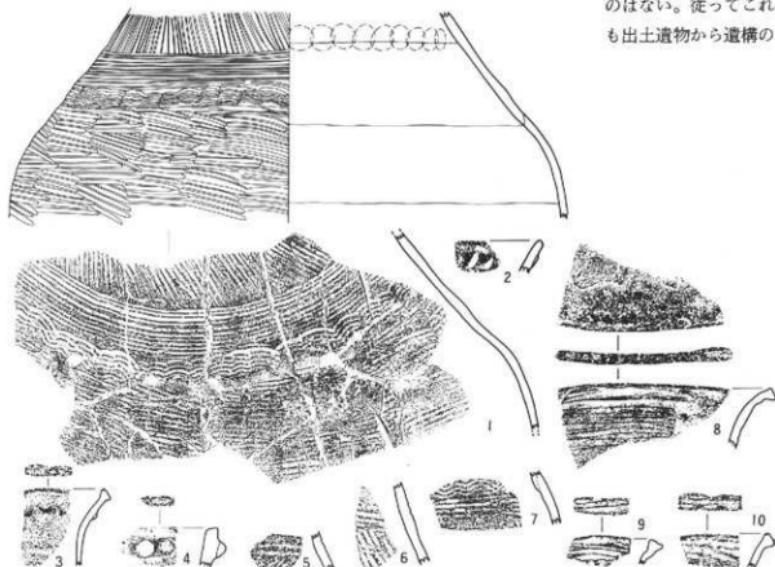
J-19グリッドに位置する。東西2.2m、南北の最大幅1.16mの土坑で東側の幅はやや狭くなり底部は浅く段をなしている。掘り込みは垂直に近く西半分がさらに一段深く、最も深いところでは底部は検出面から1.31m程である。覆土はレンズ状の堆積を示し特に上層の暗褐色粘土には炭化物の混入が著しく、土器片も含まれている。

## 出土遺物

遺物の量は比較的多いがやはり小破片が多く、大部分は条痕文系の壺と壺の破片である。第32図拓1～7は壺口縁部・頸部・胴部の破片である。中型壺と小型壺がある。拓1は中型壺の頸部から体部にかけての破片であり、最大径は34.2cmである。頸部に上から下に斜条痕を施した後、肩部に横方向に連続した11本の櫛描文が観察できるが、これは4本単位で3回に分けて施文したものである。その下に同一の施文具により波状文を巡らす。施文の方向は右から左へ、順序は左から右へほぼ3cm幅で継ぎ足している。体部は横に近い斜条痕が4～5本の単位で施される。条痕の密度は1cm幅に5本程度である。拓2～4はいずれも口縁部に凸帯をもつもので拓2・3は小型壺、拓4は中型壺である。拓8・10は条痕文系の壺の口縁部である。同一個体で口縁部を外反させ端部に半截竹管を施し、また外面に幅の浅い条痕を施す。いずれも弥生中期初頭のものである。出土した遺物はいずれも小破片であり接合できるものはない。従ってこれも出土遺物から遺構の



第31図 S X 704 平面図



第32図 S X 704 出土遺物 拓影

性格は推定できない。

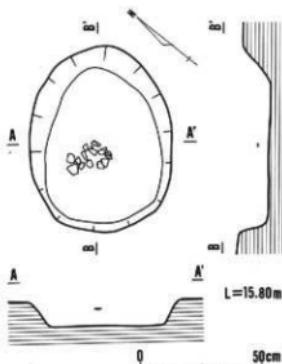
#### SX705 (第33図)

J-19グリッドに位置する。東西1.18m、深さ0.27mの浅い橢円形をした土坑で、覆土上層の暗褐灰色粘土には炭化物が多く含まれている。土坑の中央部には土器片が集中している。

破片は壺と壺の2種類である。第36図 拓1は壺の口縁部で外反させた後半截竹管を施し、また体部に浅い横方向の条痕を施している。拓2~4は同一個体とみられる中型壺の体部と底部であり斜条痕を施す。いずれも弥生中期初頭に属するものである。遺構の性格は不明である。

#### SX709 (第34図 図版15)

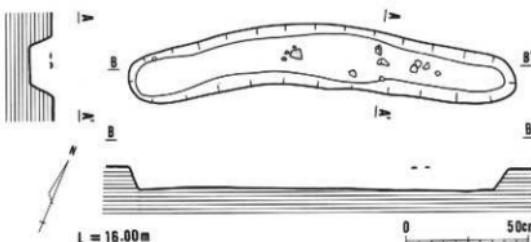
J-20グリッドに位置する。東西3.18m、南北0.5m、深さ0.24mの細長く浅い土坑で内部に土器片と石が散らばる。覆土である暗褐色粘土には炭化物の混入が著しい。遺物は破片ばかりで、壺と壺に分かれる。第45図 拓5・6は中型壺の口縁部で拓5は口唇部の直下にキザミ目を持つ凸帯を有する。また拓6は口唇部を大きくつまみ出している。拓7は条痕文系の壺の口縁部である。



第33図 SX705 平面図



S X 709 出土遺物



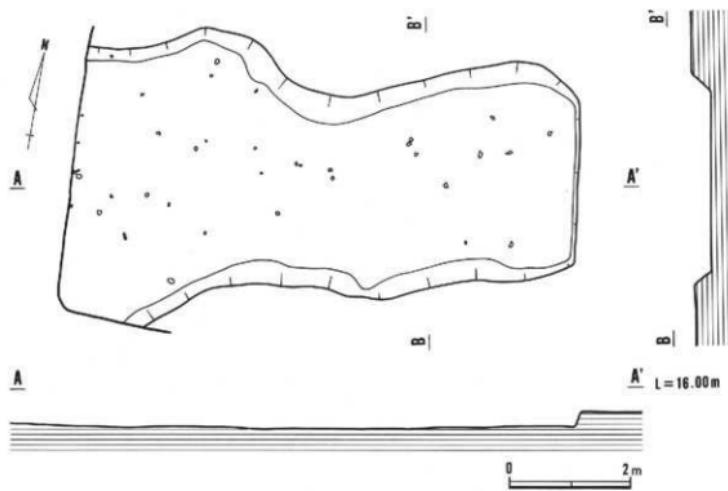
第34図 SX709 平面図(下)・出土遺物(上)

#### SX802 (第35図)

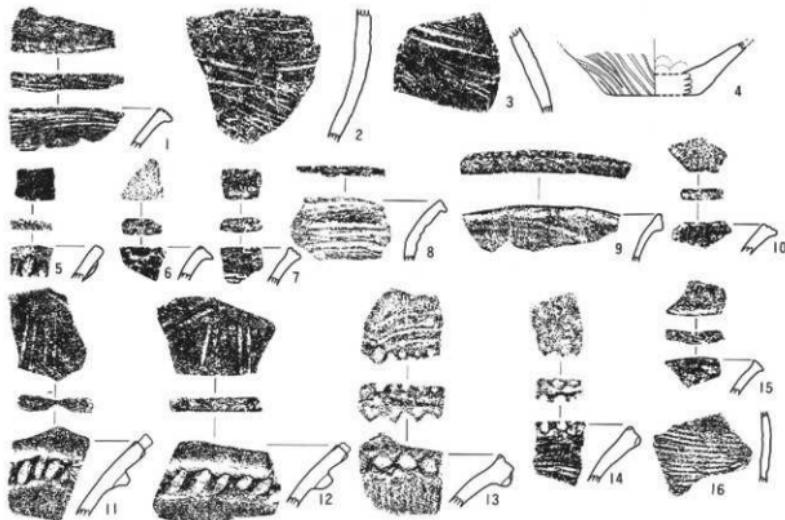
J-23グリッドに位置する。西側が調査区外に広がるため、東西幅は不明であるが南北幅は最大4.5m、狭いところで3.4mである。土器は散在しており、遺物の出土状態遺構の形態などから遺構の性格は推定できず不明である。先に述べたようにこれらは溝の一部であったのかも知れない。

土器の出土量は比較的多いが小破片のみで接合し得るものはない。第36図拓8・9、14・15は条痕文系の壺の破片、また拓11~13、16は壺の破片である。拓11・12は同一個体の大壺の口縁部である。口唇部は四角に面取りしており、所々を三角形につまみだしている。

出土遺物



第35図 S X 802 平面図



第36図 S X 705・S X 709・S X 802 出土遺物 拓影

口縁直下に凸帯を設け凸帯の上に幅4mmほどの棒状工具でやや斜めの深いキザミを施す。また口縁内側には半截竹管あるいは櫛状施文具で縦の沈線を施しており、全体で4ヶ所程度に施文するらしい。赤褐色を呈し焼成は脆く、胎土には径1~6mm程の小砾を多量に含む。類例はさほど多いものではないが、三河・遠江のこの期に時々見ることができる。また良く似た土器がS X 703からも出土している。拓13は大型壺の口縁部破片で口唇部は四角に面を取り、半截竹管文を施した後内側にキザミ目を入れ、口唇部を軽くつまんでいる。内側には横位の櫛描文あるいは半截竹管が施されている。また外面には縦方向の条痕が施される。拓14は甌の口縁部で口唇部に内・外面ともはっきりとしたキザミを施す。

## 第7節 その他の遺物

### 1 包含層の遺物 (第37~第39図)

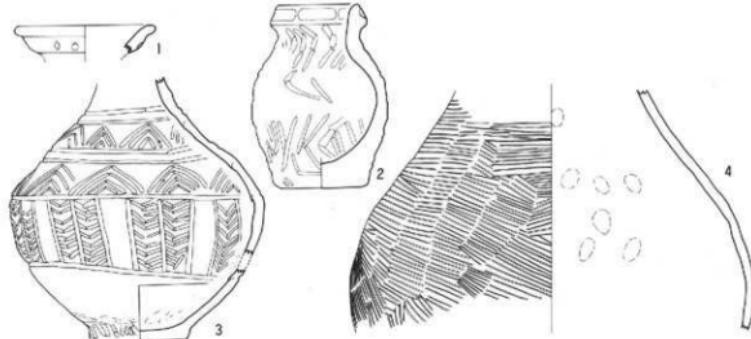
各遺構に伴う遺物について説明してきたが、ここでは包含層出土の遺物について述べることにする。包含層出土の遺物には石器と土器がある。

土器はやはり条痕文系の土器にほぼ限定されており、他のものは極めて少ない。また全体に小破片が多く、器壁も荒れており、観察を充分に行得ないものが多かった。壺・甌が中心であるが、他に小型の鉢あるいは袋状口縁の壺等特殊なものが含まれている。

壺には中型壺と小型壺がある。量は中型壺の破片が圧倒的に多い。文様のあるものは拓本を38・39図に示した。口縁内側に横羽状沈線文(拓10)・波状文(拓1)等を持つものがある。

頭部には櫛描きの波状文(拓30・31)、あるいはいわゆるハネアゲ文(拓29)を持ったもの、さらに横位あるいは斜めの櫛描文風の条痕文(拓27)を持ったものがある。

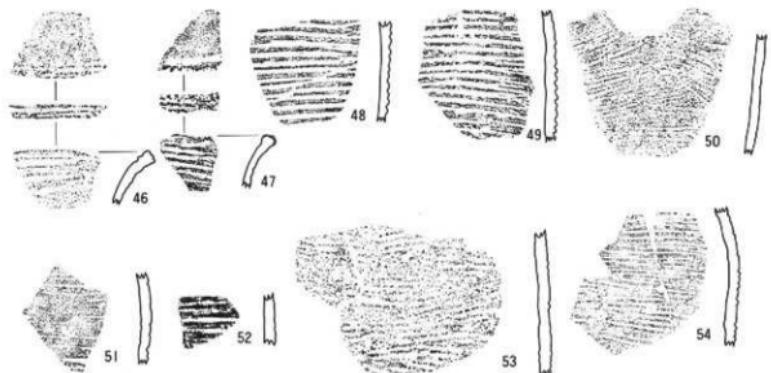
甌には強く外反した口縁を持ち、口唇部を肥厚させたものと、拓32・33に見るようほぼ直行させた口縁に比較的角張った口唇を持ったものがある。後者は胴部の条痕も荒く時期的に多少古い要素を持ったものであり、前段階の水神平式土器の残影と考えられよう。胴部は器面前面に斜行の条痕を施したもののが主体であるが、一部に縦羽状の細い条痕を施したものがある。



第37図 包含層出土遺物 復元図



第38図 包含層出土遺物 拓影 その1



第39図 包含層出土遺物 拓影 その2

## 2 石器 (第40図 図版21)

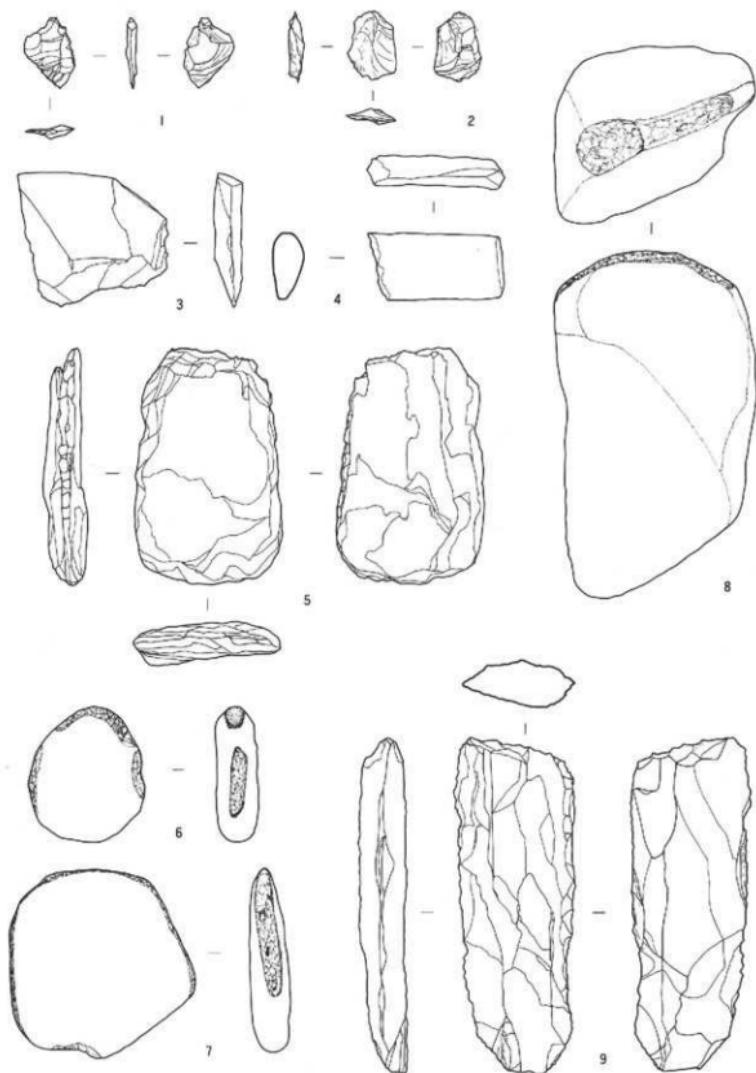
石器の出土は極めて少ない。打製石斧および磨製石剣の破片が出土している。他に自然礫の一部に敲打痕のある敲き石と考えられるものあるいは黒縞石の破片が少量出土している。全体に出土量が少ないとともに出土する石器は打製石斧・磨製石剣等縄文時代からの延長上にある石器のみである事が注目される。

東海地方の縄文晩期後半から弥生中期にかけての石器の変化を明解に示したものはないが、縄文晩期末の条痕文系土器群には富士川町山王遺跡で見るように土掘り具と考えられている大型打製石斧が多量に出土しており、また石剣・石棒等を伴う等縄文晩期以来の石器の組合せを保っている。こうした組合せは大筋では弥生中期初頭まで続いているようだ。富士宮市渋沢遺跡では、大型の打製石器を中心になかなりの量の石器を出土している。しかしこの段階では一方に丸子遺跡の扁平片刃石斧あるいは、先の渋沢遺跡出土の石包丁を見るように、いわゆる大陸製の磨製石器を少量ながら併せている。また原川遺跡あるいは磐田市鉛影遺跡で見るように石器の出土量の少ない遺跡も現れており、縄文時代以来の石器の組合わせに変化のおきていくことをうかがわせる遺跡が現れている。弥生時代特有の石器が出揃うのは中期中葉段階であり、この段階には太型始刃石斧・柱状片刃石斧あるいは扁平片刃石斧と言った木材の伐採・加工用と考えられる磨製石器群が出そろう。この段階では藤枝市郡遺跡・静岡市有東遺跡等が多量の磨製石器を出土する遺跡として古くから有名である。しかしこの期には有東遺跡の石剣・石棒等にみるように非実用的な石器はなお残っていたようである。原川遺跡の石器の組合せには弥生時代特有の磨製石器は現れていないが、全体的に石器の量、種類とともに減少しており、縄文時代の石器組成に変化が現れ始めている事をネガティブに現していると見ることができる。そうした中でも磨製石剣が残っている事は先に見た非実用的な石器の残存を示す一例と見ても良かろう。こうした非実用的な石器の消滅は中期後葉までには確実であろうが、これは条痕文系土器群の消滅と期を同じくするものである事は注意して良い。この期までには縄文の残影の払拭が行われ、弥生的な祭祀に統一されていることを示していると考えて良かろう。

縄文晩期の  
石 器

弥 生 中 期  
中葉の石器

磨 製 石 剣



黑耀石破片 (1. SH715 柱穴出土 2. SD10B16 出土) 磨製石針 (4. 6区包含層)

打製石斧 (3. II区 A 包含層 5. I区包含層 9. II区 A 包含層) 敲き石 (6. 7. 8. II区 A 包含層)

第40図 包含層出土石器 実測図

## 第8節 出土遺物の器種構成と編年的位置

原川遺跡の各遺構および包含層から出土した土器を説明してきた。次にこの土器群の器種構成とその編年的な位置について多少検討してみよう。原川遺跡から出土した土器はほぼ大半が条痕文系の土器であり、一部に磨り消し繩文を施すものが目につくが、その量はさほど多くなく、拓影に示したものがほぼ全てである。条痕文系の土器は壺・甕に分かれ、このうち壺は大・中・小の3者に分けることが可能である。量的には圧倒的に中型壺が多く、大型壺は図示したものに他1点が加わるのみである。また小型壺は特殊な器形のものが多く、施文の上でもかなり様相が異なっており、その系統的な検討を要するものがある。

### 器種構成

**大型壺** 第23図1はSD10B16から出土したもので、口頸部の破片である。口縁が強く外反した太頸の壺であり、口径は29cmに復元できる。口縁部に凸帯はない(壺B)。幅広く造り出した口唇部に横方向の条痕手法による平行沈線が施されており、端部に内外からキザミ目を施している。頸部は整った櫛描文風の条痕で口縁直下に綫方向、その下に横方向に施文している。器面の摩耗が激しく、それ以下の条痕の方向は明瞭でないが、斜め方向に施されているものと思われ、またその境目に太い沈線を持っているものと思われる。(第25図拓2では頸部以下の条痕は示していないが、第23図1では復元想定してある。)

### 大型壺

施文の方法は条痕ではあるが、櫛描文を充分意識して施されたものであり、単に器面調整でなく明らかに文様である。この段階の太頸壺には口縁部に凸帯を持ったもの(壺A)と凸帯のないもの(壺B)の両者があり、前者には頸部に波状文を施すものが多いらしい。豊橋市麻生田大橋遺跡・湖西市伊賀谷遺跡等に類例があり、多くは土器棺として発見されている。

### 丸子式土器

**中型壺** 第23図3はやはりSD10B16から出土したもので、ほぼ完形に復元されている。口縁部に凸帯を持たない壺Bで、口径16.1cm・器高36.8cm・最大径は胴部上半で26.1cmである。口縁が強く外反しており、比較的細目の頸部から強く張った肩部を持っている。口唇部にはやはり浅い条痕手法による沈線を施しておりその上を5ヶ所でつまんでいる。頸部は斜めあるいは横方向の整った条痕を施しているが、胴部以下は横あるいは斜めの単方向の条痕である。丸子式土器の典型的な壺である。浜松市半田山II遺跡・渋沢遺跡あるいは丸子遺跡に良好な資料が出土しており、また神奈川県三ヶ木遺跡・平沢同明遺跡あるいは群馬県岩櫃山遺跡等関東地方にも広く出土例が知られており、各地域の初期の弥生土器に伴っている。この他に中型壺には口縁部・肩部に押し引きを持った凸帯をめぐらした壺Aが多い。凸帯のつく位置あるいは形にはかなりの変化があり、第36図拓11・12に示したような口縁下部に凸帯を示すものがある。水神平式土器にこうした例は認められず、続水神平式あるいは丸子式土器に多く認められるものである。また壺Aは頸部には波状文を持った例が多い。また口縁内面に波状文、横あるいは綫の沈線文を持っていることが一般的である。

### 小型壺

**小型壺** 第37図3は条痕文系の土器ではなく、恐らく客体としてもたらされたものであろう。頸部から上胴部に籠描きによる綫羽状から変化した山形文がある。胴部以下も同様に籠による羽状沈線が施されている。天竜川上流域から長野県に類例が多い。また第37図

2に示した小型特殊な土器がある。類例の少ないものであるが、阿島遺跡あるいは塙崎遺跡などに見る特殊な小型土器に連なるものであり、あるいは関東から東北地方に見られる土坑墓出土の小型特殊土器に連なる可能性が強い。

#### 発

口縁が強く開き、底部が比較的小さな壺である。口縁内側に施文する例が多いが、櫛描文風の横方向の沈線、あるいは波状文等各種が認められる。肩部は横あるいは斜め單方向の条痕を全面に施している。多少くどくなつたが、原川遺跡から出土している条痕文系の土器群は大略以上の通りであり、大型壺・中型壺・小型特殊壺および壺であり、量的には中型壺と壺が最も多い。

#### 編年的位置

次にこれらの土器群の特徴を整理し、その編年的位置を考えてみる。先に述べたように中型壺の口縁部に凸帯を持つものと持たないものの両者がある。条痕文系土器の壺に凸帯を持たないものは楔式土器・水神平式土器の段階には本来見られず、比較的新しい段階のものであり、水神平III式段階あるいは丸子式土器に見られるものである。凸帯そのものはこの段階で消えるものではなく、丸子式さらには一部は後続する嶺田式土器の段階にも一部は残るようである。また口縁部に凸帯を持たないものはほぼ例外なしに口唇部に横位の条痕手法による沈線が施されており、何ヶ所かでつまんでいる。壺・壺ともに口縁内側に施文されている場合が多く、櫛描きの波状文、横位の平行線文あるいは何ヶ所かで縦方向の平行線を施す等かなりの変化がある。こうしてみると原川遺跡出土の条痕文系土器の特徴は多くこれが丸子式土器であることを示している。また第23図2に示した長頸壺は肩が強く張り、最大径が上肩部にくる比較的大型の壺であるが、施文も範描きによる重圈方角文あるいは縦方向の羽状文であり、口縁直下から頸部にキザミ目のある凸帯文を貼り合わせている。条痕文系土器から生まれるものではなく、一見して北関東地方あるいは信濃の影響の強い土器であることが知られる。また第37図2～3の小型壺も同様である。また第27図60～81に示したように磨り消し繩文を施した土器を比較的多く持っている。丸子式段階では先の渋沢遺跡・河津町姫宮遺跡・丸子遺跡等比較的まとまった量の遺物を出土する遺跡ではほぼ例外なしに磨り消し繩文を施した壺が伴っている。これらを含めて原川遺跡出土の土器を弥生中期初頭の丸子式段階のものと考えて良い。丸子式土器が新旧に細分される可能性があるとすれば、その新しいものに属すと考えており、他地域のものを含んでいるが、時間的には比較的混じりの少ないものであろうと考えている。

#### 丸子式土器

#### 参考文献

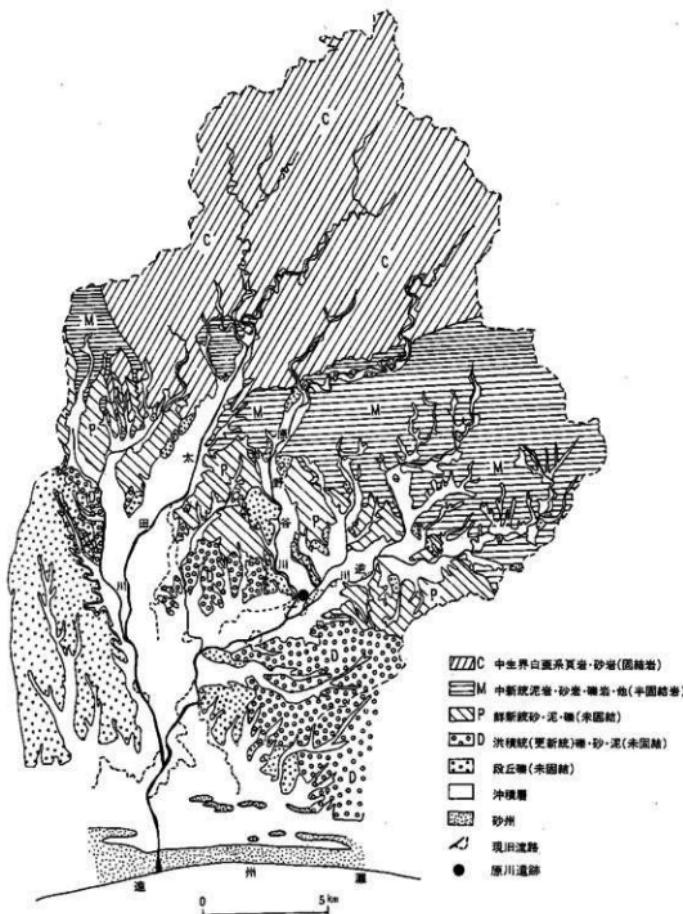
- 稻垣甲子男他『駿河山王』 静岡県富士川町山王遺跡群調査報告書 富士川町教育委員会 1975  
鳴 竹秋『湖西運動公園内遺跡群第2次発掘調査概報』 湖西市教育委員会・湖西文化研究協議会 1976  
漆畠 敏『向山遺跡・谷上古墳群発掘調査概報』 浜松市教育委員会 1982  
松井 一明『掛の上遺跡II』 袋井市掛の上遺跡2次調査報告書 袋井市教育委員会 1983  
太田 好治・漆畠 敏『国鉄浜松工場内(梶子)遺跡第VI次発掘調査概報』 浜松市遺跡調査会 1983  
柴田 稔『弥生時代の袋井市城』『袋井市史』通史編 袋井市史編纂委員会 1983  
鳴 竹秋他『観音山遺跡発掘調査報告書』 静岡県西部農林事務所・静岡県湖西市教育委員会 1986  
羽二生 保『十王山砲跡発掘調査報告書 善千鳥遺跡確認調査報告書』 中遠地区広域農業団地農道開設工事に伴う発掘調査報告書 森町教育委員会 1988

## 第7章 原川遺跡をめぐる 地形・地質・土壤学的背景

静岡大学名誉教授 加藤芳朗

### まえがき

本遺跡は国道1号線沿いに細長く、原野谷川の左岸側から、垂木川を横切って、逆川右岸側に達する範囲にわたっている。弥生～奈良時代に営まれたこの遺跡の自然立地条件を探るべく調査を行った。その結果、原野谷川から派出したと思われる小河川の流路跡（河



第41図 原野谷川・太田川流域の地形・地質図（加藤 1985を一部変更）

道と自然堤防跡) や地震に伴う噴砂と推定される脈状砂が3ヶ所で見出されるなど、興味ある事実を知ることができたので、これらを中心報告する。

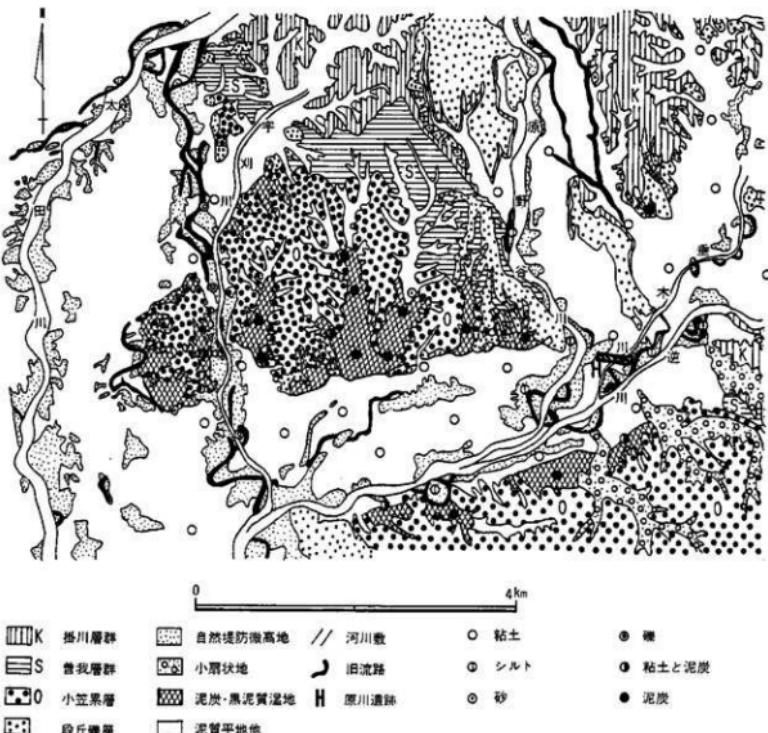
## 第1節 原野谷川流域の地形・地質概況

### 河川系統

原野谷川は掛川市八高山に源を発し、西ノ谷川を合して南流し、本遺跡付近に至る。同市上垂木地区を源流とする垂木川が本遺跡を貫流し、同市栗ヶ岳を源とする逆川が本遺跡をかすめて南西に流れる。原野谷川は遺跡付近で向きを南西に変え、間もなく、遺跡南方で垂木川を合った逆川と合流し、袋井市街付近で宇刈川を合して再び南流し、浅羽町富里で太田川と合流する。

### 地質・地形

地質・地形的観点に立つと、原野谷川は、原野谷グム付近から上流で中生代の白亜紀の四万十層(三倉層)よりなる山地間を流れる(支流の西ノ谷川流域も同様)。それより下流、本遺跡付近までは、新第三紀中新世の倉真層群、西郷層群、鮮新世の掛川層群、第四紀更新世古期の曾我層群などからなる丘陵地を流れる。流域には河岸段丘が発達する。垂木川、逆川も同様の地質からなる丘陵地を流れる。三川が合流した後は更新世古期の小笠累層の



第42図 原川遺跡周辺の地形・地質図(加藤 1985より作成)

丘陵の間を走り、袋井市に至る。それより下流は、幅広い、勾配のゆるやかな平野地帯を蛇行しながら南下する（第41図）。

原野谷川の礫は上流の四万十層由來の砂岩・頁岩を主とするので硬い。これに対し、垂木川、逆川の礫は新第三紀中新世の砂岩・泥岩を主とするので軟らかい。

## 第2節 遺跡周辺の地形・地質

本遺跡に直接関連するのは、前記三河川であるが、隣接して丘陵・段丘があるので、まず、これらについて概略の説明をすることとする。

### （1）丘陵・段丘

原野谷川右岸に接して、袋井市国本北部の段丘がある。高・中・低3段の段丘面からなる。高位面は不入斗部落北の神社付近を南端として（標高40m）、北へ細長く伸び、袋井ゴルフ場の東を通り、標高80mに達する。中位面は北原川の水源寺付近から南東、東名高速道路を越したあたりまで分布し、標高は40~30mである。低位面は北原川や不入斗部落の載る面で、標高25~20mである。これらはいずれも、更新世末期の古原野谷川（数万年前の）の河原の残存物である。厚さ数mの古原野谷川の礫層が最上位を占める。その下には、曾我層群、小笠累層の泥・砂・礫層が来る。両者の境界からしばしば水が湧き出している。菅ヶ谷北の尾根は袋井市油山寺、村松一帯に広がる丘陵地の一部で、地質は小笠累層の泥・砂・礫層からなる。これらの丘陵・段丘地帯には沖ノ川支流の作る大小多数の小谷が発達し、尾根筋・谷筋が錯綜する。

掛川市岡津を南端として南北に伸びる、もう一つの段丘がある。大部分は上述の中位面（標高40~25m）に相当するが、北端に高位面（標高45m）が小面積見られる。最上位の厚さ数mの礫層の下には掛川層群の砂泥互層が来る。

掛川層群、曾我層群、小笠累層の相互の関係は平行不整合で、各層とも走向、傾斜が北西~南東、南西~5~10°落ちの単斜構造をなす。これに対し、段丘礫層は段丘面に平行するので傾斜は<1°（ほとんど水平）である。

遺跡の南方に逆川や東海道線を越えて、小笠山丘陵がある。小笠累層の礫層からなるため、小谷沿いに多量の礫が押し出し、掛川市領家、平野、袋井市石野など、丘陵の出口に小扇状地を形成している。

### （2）原野谷川平野

原野谷川は遺跡北方の各和付近で、上記段丘北部の東縁にぶつかり、そのへりを南東に進み、遺跡付近（北原川）で同段丘が終わるや否や流れの向きを南西に急変する。堤防のない過去においては、この部分（国道1号同心橋付近）で同川水流が東ないし南東方向に発散しやすかったと推定される。河川改修によって現流路は南西向きに直進するが、原川、徳泉、上貫名にはもとの蛇行流路の跡が残り、かつて、川の勾配が緩やかだったことを示す（第42図）。現地形図の等高線で読みとると、掛川市大池と袋井市新屋間の高低差約10mで平均の勾配は千分の1.4である。流路ぞいの自然堤防の発達は他の二つの川より顕著である。これは流域面積が大きいためであろう。旧東海道の通る久津部、新屋は東西に伸びる微高地と一致しており、古原野谷川の自然堤防と考えられる。両集落間に旧流路跡も認められる。しかし、現流路ぞいの自然堤防に比べると幾分不明瞭である（第42図）。

### （3）逆川平野

逆川も原野谷川との合流点より上流の掛川市祢宜家、領家、末広町付近に蛇行流路の名

礫の硬軟

国本北部の  
段丘

段丘礫層と  
その下位の  
地質

岡津付近の  
段丘

各地層の傾き

小笠山丘陵

流路方向の  
急変と蛇行

緩やかな  
川の勾配

旧東海道  
ぞいの流路跡

蛇行流路

残がある。この部分に存在する自然堤防は原野谷川のそれに次いで発達している。しかし、掛川市大池付近から上流では、支流の倉真川（そのまた支流の初馬川）とともに、川筋は平野面を数m削りこんで流れているため、自然堤防の形が明らかでない。この平野面が大池より下流の平野面より形成時代が古いのかどうか、今のところ不明である。

#### (4) 垂木川平野

垂木川は、原野谷川・逆川と比べて流域規模が小さいので、二俣線と交差するあたりから下流側の蛇行跡は小さく、より上流側の自然堤防も発達が弱い。逆川との合流点近くでは自然堤防がなく、むしろ、逆川の後背低地の余水を集めて流れる、排水河川の状態を呈する。

#### (5) 遺跡周辺の地下地質 ポーリング資料から

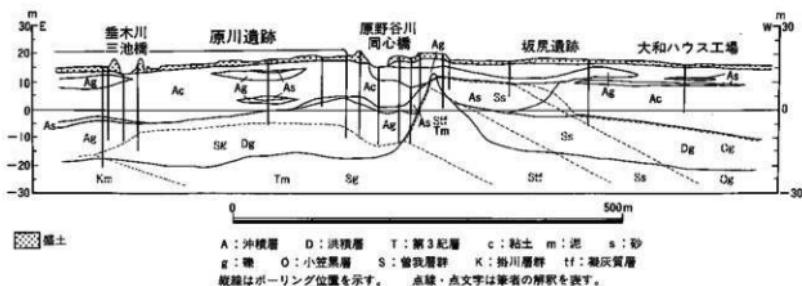
第43図は建設省が行ったポーリング調査を参考にとりまとめた国道1号線ぞいの地質断面図である（建設コンサルタントセンター、1981）。点線の部分は筆者が周辺の丘陵の地質に調和するよう描きなおしたものである（加藤、1985）。

沖積層（鵜文海進時の堆積）

A（沖積層）は粘土層（Ac）を主とし、礫や砂層（Ag, As）をレンズ状に挟む。疊層は亜円礫を主とするので、古原野谷川などの運搬物であろう。現流路に対応する疊層は地表下10m以内にある。その下に厚い粘土層がくるので、これらの川の進出は粘土層の堆積がかなり進んだ後だったことがわかる。この粘土層は鵜文海進（約6000年前、繩文前期初にピーク）に伴って生成した内湾や湿地に堆積したものと推定される（後述）。

上部礫層

第43図の上部の疊層（Ag）で現河川から離れて存在するものが2つある。その1つが垂木川、原野谷川の中間点付近にある。これが本遺跡の7・8区に出現した疊層に相当すると思われる（後述）。



第43図 國道1号線沿いの地質断面図（建設省資料より）（加藤 1985）

### 第3節 発掘区における地質の状況

#### (1) 埋没自然堤防の疊層

平野の下に一部または全部が埋没する自然堤防をこう呼ぶ。

8区Aの新旧の河道

a. 8区Aにおいて旧河道と思われる溝状の細長い凹地形とその両側の自然堤防らしい疊層が見いだされた。当時の観察メモ（1984.10）に従って略述すれば、以下の通りである。

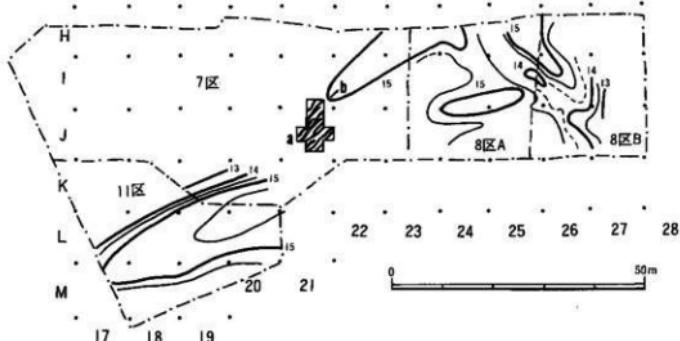
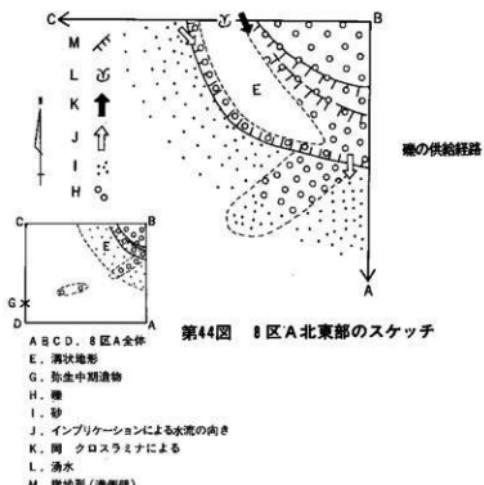
新しい河道の時期

『8区Aの東壁において、疊層を切り込む2つの溝状地形を確認した。今までのところ、これらは自然の作用によるものと判断される。新しい溝は、それを充填する堆積物の下底

から出土した遺物から判断して、古墳時代後期頃にはすでに存在していたものと思われる。この区や7区でその疊層は弥生時代中期前半の遺物包含層（粘土層）によっておおわれる。この遺物包含層が古い溝によって切られるか、あるいは、前者が後者をおおうのかは不明である。従って、古い溝は疊層より新しいかまたは同時（溝と疊層が流路と自然堤防の関係にあった場合）であり、古墳時代後期（新しい溝）より古いとだけ言うことができる。』

『上記の疊層はつぎのような特徴を有する。イ。こぶし大以下の亜角疊からなる。疊の岩種は砂岩、頁岩（粘板岩）で硬く、原野谷川上流の白亜紀の三倉層に由来するものと判断される。従ってこの疊は同川から供給されたとみてよい。ロ。この疊層の露出面で扁平疊の傾き（インプリケーション）の方向を調べると、北ないし北西に向いている。これに対し、疊層中にある砂層のクロスラミナ（斜交層理）は南東に傾く。これら的事実はともに水流が北～北西から南～南東に向かっていたことを示す（第44図）。以上の2点から、疊層は原川集落の北方から分派した古原野谷川の一支流が運搬堆積したものと推定される。新旧二つの溝の方向もこれに沿って調和的である。

## 古い河道の時期 疊層の特徴



## 低地への様の導入

ハ、疊層中にはレンズ状に粘土層がはさまり、また、それが水流の勢いでちぎれて団子状になったもの（偽礫）も多く含まれる。これから、上記の支流が垂木川との間の低湿地に、洪水のたびに流入して礫を堆積させたり、洪水のないときに沈殿した粘土層をはがしたりしたことがうかがわれる。』

## 8区Bの新しい溝

『8区Bでは上記の新しい溝の続きが出てきた。溝の中心は南東方向に延び、両側の自然堤防状の疊層を伴うことも変わりがないが、左岸の疊層の表面高度が下流側に向かって急速に低下する（第45図）。これは、8区Aで溝の左回りの曲流の内側に同疊層があること、その曲流が8区Bで終わること、および疊層の堆積は曲流する流路の内側で顕著に起こること、で説明される。これに対して右岸の疊層の表面高度はあまり変わらない。あるいは、8区B南端あたりから溝が右回りの曲流を開始するのかもしれない。

## 8区Aの浅疊層帯

『8区Aの溝地形から南西方向に派出する浅疊層帯が認められた（第44図）。溝から離れた場所にも同様のものがあるかもしれないと考えて、発掘の土層記録、現地での筆者のボーリングステッキによる調査結果などから、7,8,11区にかけて第45図のような疊層の表面等高線図を作製した。これによると、8区A北西端から7区北東端にかけてと7区南端から11区B,Cにかけて浅疊層帯があり、共に、8区A中央のそれと同じく西南西方向に伸びている。これらの相互関係は直接確認できなかったが、11区B,Cのものは8区A中央のそれとつながる可能性がある。

## 10区Bの溝状地形

『一方、国道の北側の10区Bにおいても、基盤疊層の頂部に溝状地形が発見された（第45図）。その向きは東南東である。その海拔高は13.5m~14.5mを中心とするので、弥生中期の溝S D10B16 (15.3~15.6m) や古墳後期の溝S D10B14 (15.0~16.0m)（昭和60年度概報、第3,4図、高度は発掘担当者の資料に基づく）よりも低位にあり、これらより時期が古いと考えられる。10区Bではこの溝地形をおおって、北から南側に傾いた砂層が刺身を重ねたようになって、いわゆる、単斜構造をなしている。これらは、恐らく、幅広い溝の曲流部内側の堆積物であろうが、くわしいことは不明である。これを切り込んで上記の古墳後期の溝がある。

## 16区の自然堤防

『前項の埋没型に対して自然堤防としての形が地表面に明瞭に認められるものをこう呼ぶこととした。これに關係するのは16区A,Bである。ここは逆川の改修前の蛇行流路ぞいに当たり、自然堤防だけでなく、流路、後背低地を横切る。自然堤防を構成する土層は灰黄褐色、シルトないし砂質で無遺物である。

## 洪水常習地

『原野谷川、逆川の自然堤防に挟まれた部分は両者の後背低地にあたり、そこを垂木川が流れる。青灰色の粘土層からなる。地形的に、下流側を自然堤防にさえぎられているので、洪水時の溢水常習地だったと思われる。14,15区の東部、16区の西部がこれに含まれる。

## 第4節 遺跡環境の形成史

本遺跡は原野谷川を挟んで西側の坂戸遺跡と近接しているので、遺跡周辺の環境変遷についても両者の共通する面が多い。筆者はすでに坂戸遺跡の調査でそれを考察したので（加藤、1985）、ここではその概要紹介に本遺跡の問題を加えて解説することとする。

### （1）沖積層のボーリング資料から

『a. 繩文海進時の入江 最終氷期以来の気候温暖化により、それまで低下していた海面

が上昇を始め、約6,000年前ころにピークに達した。これを縄文海進と呼ぶ。以後の海面は数m以内の変動をへて現在にいたっている。原野谷川平野の沖積層のボーリング記録からそれをたどることとする。

袋井市の市役所、ボーラなどの資料の貝殻混じり泥層（塩水下の堆積）の上限高度から海進ピーク時の水位は現海拔で5~10mにあったと推定された（加藤、1985）。原川地内の資料では、この高さを挟んで15mもの厚さの粘土層があるが、有機質まじりの暗灰色を呈し貝殻を含まない。従って、海進ピーク時でも、このあたりは河川から流入する淡水の影響が強い入江の奥の湿地であったと思われる（入江は掛川市街近くまでおよんだであろう）。

b. 河川流路の進出 海進ピークまでの入江は拡大の一途をたどったが、ピークを過ぎると奥の河川が土砂や泥土を運びこんで、入江の埋立て、縮小が開始された。埋立ては川筋ぞいに砂礫（微高地形成）、その他に粘土（湿地の継続）という形で進行した。第43図の本遺跡内では、最上部のAgが前者に、その両側のAcが後者に当たっている。上述の7,8,10,11区の疊層が垂木川右岸のAgの上部である。原野谷川に近い1,3区あたりにはAgが見当たらない。原野谷川の川筋は現流路から坂尻遺跡方面と本遺跡の10,7,8区方面の2筋に分かれているに違いない。これら砂礫層の時期を坂尻遺跡のボーリング資料で推定したところでは、大ざっぱに言って約4,000年前であった（加藤、1985）。この頃（縄文中期）に小海退（2~3m程度の海面低下）があったとの見解（太田ら、1982）に従えば、水位の低下が入江の縮小を招いたため、それ以後の原野谷川では川筋ぞいの砂礫の堆積が活発化して、本遺跡やもっと下流にまでそれがおよんだものと思われる。

## （2）遺跡内の疊層、溝状地形の形成

本遺跡での基盤疊層の出現状態はすでに第45図に示した通りである。いずれも弥生中期よりも古いと言えそうだが（上記4(1)a,dや後出の第46図）、どこまでさかのぼれるか確かめることができなかった。ただ、前項から縄文中期以降の堆積の可能性が強い。10区のものは8区や7-11区のものよりもやや深く位置し、少し古いかかもしれない。

これらの疊層またはその被覆層を掘りこんで溝状地形がある。10区A,Bの弥生中期初頭の溝、8区A,Bの古墳後期の溝（新しい溝）のように時代の上限が確定したものの他に、8区A,Bの古い溝、10区Bの基盤疊層に伴う溝状凹地、その上の砂層の単斜構造を覆土とする幅広い浅い凹地など、疊層の高まりを自然堤防とする流路なのか、その後の削りこみでできたものが不明なものもある。いずれにしても、いろいろな時代に疊層の堆積や溝状地形が形成されつけたことが分かる。これは、すでに述べたように、本遺跡付近が原野谷川の流れの転換部の外側にあって、しばしば氾濫を受けやすかったためであろう。

また、これらは形成後そのつど、時期をおかずには埋没・被覆されてしまったのが特徴で、そのため外形があまりはっきりしない。原野谷川や太田川平野にこれがよく見いだされるので、4.で埋没自然堤防と呼んだのである。

溝状の削りこみ（侵食）には河流の勢いの強まりが、埋没・被覆にはその反対がおこることが必要であるが、海岸近くではその原因が、それぞれ、海水位（浸食基準面）というの低下または上昇にある事が多い。本遺跡のように海岸から離れた所でも、太田川・原野谷川平野にできた入江を通じて海水位の変化を比較的鋭敏に感應すると考えれば、覆土中に弥生中期初頭、古墳後期の遺物を含む溝は、明らかにその形成期がそれ以前にさかのぼるので、それぞれ、縄文後・晚期から弥生にかけての小海退（井関、1983）および古墳前半の小海退（加藤、1977）に起因したと解釈することができる。前者の時期の溝は太田川

縄文海進

海進ピーク  
時の水位

入江の奥の  
湿地

入江の埋立

縄文中期の  
小海退

基盤疊層の  
形成時代

溝状地形の  
形成と埋没

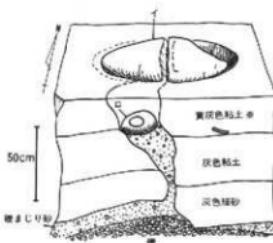
溝の形成と  
小海退

水系の平野では始めてであり、従って、筆者がこれまで言及しなかった井関説と関連させるのもこれが始めてである。筆者の暫定的な考えでは、この小海退のピークは縄文晩期から弥生初期としたい。そして弥生末と平安期には小海進のピークがあり、このピークへ向かう過程で溝の埋没・被覆が起こった(加藤、1977; 1985)。

### (3) 露出自然堤防の形成

原野谷川や逆川にある明瞭な形を残すシルト質の自然堤防からは今のところ、古墳から律令時代の遺物、遺構が出土していない。坂尻遺跡では旧流路(古名栗川)が古墳後期に埋没されてからその南部がこの自然堤防によっておおわれる所以である(加藤、1985)、自然堤防の形成期をそれ以後とすることができる。

前回はその形成を古墳期の海退とからめて考察したが(加藤、1985)、もっと新しい可能性もあるのでそれを保留したい。



第46図 7区 I-21の弥生中期初頭の土器館(イ)を切る脈状砂(第45図のb)同時期の壺(ロ)がその中に転落している。脈状砂は基盤の砂礫層につながる。SF806を中心に方柱状に残した土層のスケッチ。(発掘担当者の撮影した写真をもとに作成)

## 第5節 脈状砂(噴砂跡)の产出

### (1) 7区

#### 狭まじりの 砂 の 脈

I 21で第46図のような狭まじりの砂の脈が見いだされた。上部の幅が広い部分で20cm強あり、その中に弥生中期初頭の土器(図のロ)が含まれていた。下部は最下位の砂礫層につながり、上面は北東に走る脈をなし、上と同時期の土器館(図のイ)を切断している。この南西側の I 21~J 21でも北東~南北方向に枝分かれしながら平行に走る砂礫の脈群が



第47図 第7区 I 21~J 21の脈状砂の平面パターン(第45図のa)  
(発掘担当者撮影)

検出された(第47図<写真>)。長さが10m以内、幅が20cm以内の規模である。第46図のものはこれらのうちの一つの北東への延長部に当たる。これらは古墳時代後期の遺物包含層に覆われる。また、

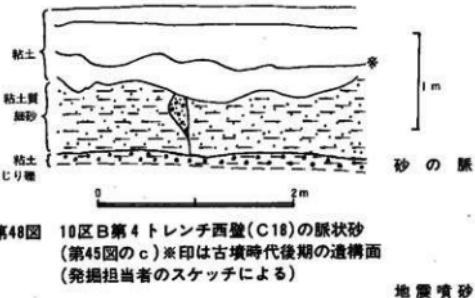
#### 砂礫の脈群

脈群の向きが図5の浅疊帶の伸びの方向とほぼ平行であることが注目されるがこれについては後述する。

## (2) 10区B

4トレンチの南東端に近い部分(C)

18)で砾まじりの単一砂脈が発見された。実はこれが、筆者が最初にぶつかった砂の脈であった。すぐにはその成因が思い浮かばなかったが、脈に切られる粘土層の下には砂疊層があること、脈の中には、まわりの青色粘土層の破片が混入していることから、下の砂疊 第48図 10区B第4トレンチ西壁(C18)の脈状砂(第45図のc)※印は古墳時代後期の遺構面(発掘担当者のスケッチによる)

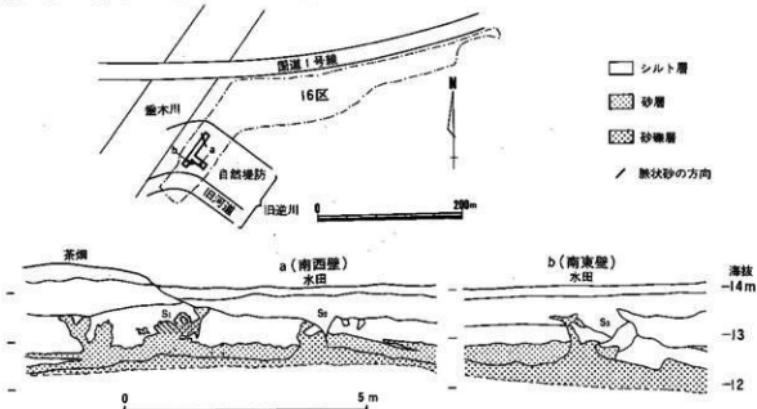


が脈にそって噴き上げてきたと判断された。ここで閃いたのが、地震に伴う噴砂の通り道ではないかということであった。しかしその確証がないので、一応、脈状砂と呼ぶこととした。これがきっかけで、すでに調査の済んでいた7区にもっと立派なものある(あった)ことが分かった。筆者はこれを実際に見ることができなかつたが、発掘担当者による写真、スケッチから上記(1)の記述を試みたわけである。さて、本区の脈も上に向かってふくらみ、厚みが20cm弱に達する。脈の延長はトレンチの関係で1mくらいしか追えなかつたが、幅は10cm程度、方向は西北西で近くの基底疊層上面の溝状凹地の伸びに平行である。これをおおう土層中に古墳後期の遺構面が含まれる(第48図)。

## (3) 16区

南西端のトレンチ(E 29, F 29)の露出自然堤防堆積層の中に多数の例を見いだした。厚さ約2mの砂質シルト層に向かって、下の砂層(約40cm)と疊層から不規則な輪郭の脈をなして砂や砾が突き上げたり、両層の上端が波状を呈したりして、砂、疊層が流動状態にあった様子がよく残されている(第49図と第50図<写真>)。ここは北西から西に

不規則形態  
の脈状砂



第49図 16区トレンチにおける脈状砂(S)と旧逆川河道  
S<sub>2</sub>とS<sub>3</sub>は連続するとと思われる。(スケッチは発掘担当者による。)

流れを転ずる旧河  
流の外側に位置す  
る自然堤防に当た  
る。平面に露出し  
た状態の脈を観察  
できなかったので、  
平面での形や幅を  
捉えることができ  
なかった。トレニ  
チの両側を比較し  
て確認された脈の

脈状砂の方向 方向は北北西—南  
南東と東西の2例  
で、前者は自然堤  
防の外側、後者は同中心から内側に位置し、それぞれの自然堤防の向きと大体平行してい  
る(第49図)。この自然堤防堆積層の年代は遺物が含まれず、よく分からぬため、これら  
を切る脈状砂の年代の限定ができない。

#### (4) 生成メカニズム

駿府城  
三の丸跡 すでに報告した駿府城三の丸跡の脈状砂(加藤、1987)と比べると、本遺跡の方が規模  
が大きいことを除くと、形や産状はきわめてよく似ているので、それと同様のメカニズム  
で形成されたと推定される。同報告の内容を摘記するとつぎの通りである。

『ほぼ垂直な、水平方向に長く伸びた脈をなすこと、基盤砂疊層と連続することから、  
割目に向かって下の砂、疊粒子が入りこんだと推定される。進入のエネルギーは、飽水した  
基盤砂疊層が地震動を受けて流動化して生じた間隙水圧による(地盤の液状化現象)。し  
ばしば、地震時の噴砂が直線状をなして並ぶことから、地中に垂直な割目の潜んでいるこ  
とが暗示される。新潟地震(1964)、日本海中部地震(1983)時の噴砂の産状を検討した藤  
田(1986)は、液状化層の上にのる土層が傾斜方向にずれて展張力を受けるため、垂直な  
割目を生じ、そこ  
を噴砂が通る、と  
いう説を提唱した。  
これによると、割  
目は土層と液状化  
層との境界面の傾  
きに直角にできる  
ことになる。』

割目の形成と  
噴砂の進入  
アスファルト路盤上の  
割 目 この形成メカニ  
ズムと似ているの  
が道路舗装のアス  
ファルト上にでき  
る割目である(第  
51図<写真>)。路



第50図 第16区 A レンチの脈状砂(第49図のS<sub>1</sub>)(発掘担当者撮影)



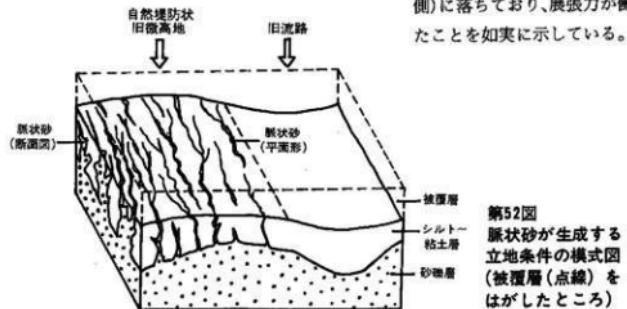
第51図 アスファルト路面上に生まれた展張亀裂(スケールの長さは20cm)

盤の陥没部分でアスファルトが低い方に流動し（車輪の圧力で）展張力を受けて生ずるものと思われる。

本遺跡の脈状砂はいずれも、旧流路ぞいの埋没砂礫層（自然堤防）上に位置し、かつ、脈の伸びる方向は旧流路の向きに平行（自然堤防砂礫層の傾斜に直角）ないしそれに近いので（第52図）、上記の藤田説に類似したメカニズムによって形成されたとみられる。7区の弥生中期土器棺を切る脈状砂（第46図）の割目は正断層（約70°）で、かつ、埋没砂礫層

（浅縫帶）頂部が低くなる方（南東側）に落ちており、展張力が働いたことを如実に示している。

原川遺跡での脈状砂の形成メカニズム



#### (5) 生成の立地環境

以上をまとめると、脈状砂のできやすい土地条件として、旧流路ぞいの砂礫層の高まり（浅縫帶）の上にあり、それを覆う土層が割目ができる程度に粘土を含むこと、常時または季節的に砂礫層が水で飽和していること、などを挙げることができる。高燥な台地や、平地でも、扇状地本体はこれに適合せず、結局のところ、地下水位の高い扇状地末端、自然堤防帯、三角州、砂堤列などが適地として浮かび上がってくる。

脈状砂のできやすい土地条件

#### (6) 生成時代

7.10区の脈状砂は古墳時代後期の土層に覆われるので、これより古いことは確実である。7区の方は弥生時代中期の遺物に影響を与えてるのでこれより新しいことが分かる。10区の方は時代の下限が不明である。なお、報告書「駿府城三の丸跡」の中で（加藤、1987、p.62、下から1行目）、10区の脈状砂を古墳時代後期以後と誤記したがここで上記のように訂正させて頂く。

古墳後期  
前～弥生中期  
初頭後

16区のものは時代の決め手になるものがなかった。

なお、他県の例だと（後述）、報告された「噴砂」の時期を古記録にある特定地震に対応させているが、本地域では、百数十年（最近数百年の統計で）に一度の割で大地震が起こったとされる。時代の上下が限定されている7区の脈状砂でも可能性のある時期が500年以上にわたり（弥生中期から古墳後期まで）、この間に数回の大地震が起りうるので、特定地震との対応が付けにくい。とも考えられるが、昔も果たして同じ率で起きたかどうかは分からない。むしろ、事例を増加し、逆にその率を推定するようになれるのが望ましい。

特定地震  
との対応が  
つけにくい

### (7) 他例との比較

埼玉、滋賀、京都での例  
これもすでに報告したように(加藤、1987)、まだ発見が始まったばかりの段階にある。本県では、前述の駿府城三の丸跡の例だけである。県外でも、埼玉で1例(堀口他、1985)、滋賀で2例(浜他、1987; 寒川他、1987)が報文として出されているだけである。埼玉の深谷バイパス遺跡の「噴砂」の平面形は本遺跡7区のもの(第47図)と酷似しているのが注目される。滋賀のものは幅が1m以上という巨大なものである。これらの他に、最近続々と検出例が非公式に報じられつつある。

滋賀県新旭町の針江浜遺跡(滋賀理文ニュース、92号、1987.11)や京都府八幡市木津川河床遺跡(朝日新聞、1987.11.9夕刊)では、脈状の砂だけでなく地表に吹き出して円錐形にひろがった砂までが保存されて出土し、脈状砂が「噴砂」であることを確認した。さらに、埼玉県では深谷市の周辺の妻沼町、行田市など数カ所の遺跡でも発見され同一の地震(弘仁9年、818年)によってもたらされた可能性があるという(上記朝日新聞夕刊)。しかし、本県の両遺跡の例のように、生成の立地、メカニズムを暗示するような事例はないようである。

### (8) 考古学的意義

これもすでに考察を加えたので(加藤、1987)、簡単に要点を述べるにとどめる。

脈状砂が地震によって生じたとすると、つぎの点が考古学上で重要なってくる。

①時代の共通尺度として噴砂(脈状砂)はかなりの規模( $M=6-7$ 以上)の地震に起因するので、少なくとも、県の半分位の範囲で同時に発生しうる(条件さえ満足されれば)。発見例が増えれば、遺跡間の時代考証の手段となりうるであろう。

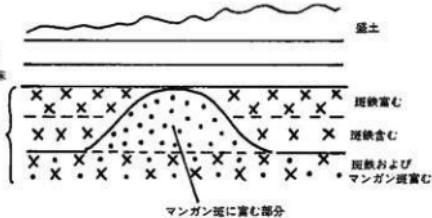
②遺跡立地と関連して脈状砂が旧流路ぞいの砂礫質自然堤防(微高地、浅灘帯)で出現しやすいことと、弥生時代以降の平地遺跡の拠点が同じ場所を占める場合が多いことから、脈状砂と同時代以降の平地遺跡とが相伴う確率が大きいことが暗示される。前者をもたらした大地震が遺跡の建物他に甚大な損傷を与えたとすれば、場合によれば遺跡の廃絶につながりかねないので、脈状砂が遺跡の興滅の目安になるかもしれない。

## 第6節 近世水田の畦畔の土壤学的復元

マンガン班のふくらみ  
14,15区の垂直断面で、下層の  
酸化マンガン沈殿層(マンガ  
ン班)がこぶ状に盛り上がる  
部分がある(第53図)。この部分  
を上層から水平に土層を削っ  
てゆくとそのこぶ状のふくら  
みが直線をなして現れ、時に  
は直交して、あたかも、水田  
の畦畔を思わせる。はたして  
そうであるかどうか、土壤学的観察と理論的考察を試みた。

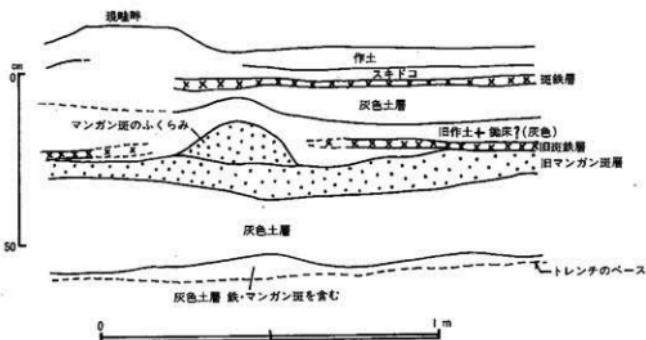
### (1) 畦畔とマンガン班のふくらみとの関係

これに対する重要なヒントは15区F35北壁で得られた(第54図)。現在の水田作土層、耕  
床層およびその直下の斑鉄層は現畦畔の下では消滅する。耕作と浸透水の影響が畦畔の下  
までおよばないからである(図の右の外側では耕床層の中間に薄い斑鉄層が挟まるが、これ



第53図 14区K30南壁のマンガン班のふくらみ  
(上下の高さ約1m)

は手起こしや牛馬耕から浅い機械耕に変わったため、新たに斑鉄層が鋤床層の上部にできることによる。これらの下にはオレンジの斑鉄に富む土層（旧斑鉄層）と径数mm以下の茶褐色のマンガン斑に富む土層（旧マンガン斑層）がくる。この土層構成は灌漑水（表面水）型の粘土質水田土壤の典型である（下述）。ところが、現畦畔からやや外れた位置でマンガン斑層とその上の灰色土層がともに上にふくらむ。旧斑鉄層はこのふくらみに近付くと消滅する。上述の、現畦畔に対する作土層、鋤床層、斑鉄層の関係を参考にすると、灰色土層のふくらみが旧畦畔、その横に続く灰色土層が旧作土層+鋤床層に、それぞれ、相当する可能性がある。もしそうなら、マンガン斑のふくらみは畦畔の下にあってその指示者の役を果たすことになる。なお、F34において旧斑鉄層が古墳時代の溝状遺構をおおっていることから、マンガン斑のふくらみを伴う旧水田遺構の形成はそれより新しいことになり、発掘担当者の推定形成時期（近世）と矛盾しない。15区北壁には、このほかに、2例のマ



第54図 15区F35北壁スケッチ(発掘担当者による)と  
水田に関係する土層名(筆者記入)

ンガン斑のふくらみが観察されたが(F33, F36)、上記のものも含めて、いずれも現畦畔に接近している。水田の区画が近世以降、固定化したのであろうか。

## (2) 土壌学的考察

畦畔とマンガン斑のふくらみとの関係をどう説明したらよいであろうか。その前に灌漑水（表面水）型の水田土壤の土層構成について解説する。地下水の低い乾田型の水田での水稻栽培にはよそから水を引いてこなければならない。田面に張った水（灌漑水、表面水）は夏の高温と有機物のために強還元状態になり、マンガン、鉄を還元して水に溶かす。これは水とともに下に移動するが、そこは依然として酸化状態にあるので、今度は、酸化されて酸化マンガン、酸化鉄として沈殿する。通常は酸化鉄が上位を占める。鋤床は代播きによる粘土の目詰まりや圧密などによって作土直下に形成される。かくて第54図右端の旧作土以下のような土層構成ができる。

畦畔の下には耕耘や灌漑水の浸透はおよばないので、作土はもちろん鋤床、酸化マンガン、酸化鉄の沈殿層もできにくいはずである。にもかかわらず、酸化マンガンのふくらみがその下にできるのは、浸透水が畦畔の内側に向かってごく浅い角度で拡散するためと想

定される。畦畔の下の酸化状態が強いほどマンガンの沈澱する深さは浅くなるであろう(浸透水中のマンガンがより速く酸化されるため)。

上の説明から、酸化マンガンのふくらみがなくても、鋤床(灰色土層、作土を含む可能 性がある)、斑鐵層、マンガン斑層が揃えば、灌漑水(乾田)型の水田の、何よりの証拠に なることに注目する必要がある。

#### 引 用 文 獻 (年代順)

- 加藤 芳朗 「伊場遺跡をめぐる自然環境の地学的検討」『伊場遺跡遺構編』  
—伊場遺跡発掘調査報告書第2冊— p 150-155 浜松市教育委員会 1977
- 建設コンサルタントセンター 『袋井バイパス同心橋地質調査報告書』 建設省中部地方建設浜 松工事事務所 1981
- 太田 陽子・松島 義章・森脇 広 「日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問 題」『第四紀研究』21巻 p 133-143 1982
- 井関弘太郎 『沖積平野』 p 145 東大出版会 1983
- 堀口 万吉 「埼玉県深谷バイパス遺跡で発見された“噴砂”について」『埼玉大教養部紀要 (自然科学編)』 21巻 p 243-249 1985
- 加藤 芳朗 「坂尻遺跡をめぐる地形・地質学的背景」『坂尻遺跡』—自然科学編— p 1-12 袋井市教育委員会 1985
- 藤田 至則 「傾斜する地下水面上に起因する亀裂・噴砂・崩壊などの地震災害」『地質学論集』 27号 p 95-108 日本地質学会 1986
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 『原川遺跡』昭和60年度発掘調査概報 p 21 1986
- 浜 修・寒川 旭 「滋賀県大津市の螢谷遺跡において認められた地震跡」『地質ニュー ス』 390号 p 18-19 1987
- 加藤 芳朗 「駿府城三の丸遺跡における脈状砂」『駿府城三の丸跡』 p 59-64 静岡県教育 委員会 1987
- 寒川 旭・佃 栄吉・葛原 秀雄 「滋賀県高倉郡今津町の北仰西海岸遺跡において認めら れた地震跡」『地質ニュース』 390号 p 13-17 1987

# 第8章 原川遺跡の土器棺に 残存する脂肪の分析

帯広畜産大学畜産環境学科

中野益男 幅口剛

北海道測量図工社総合科学研究所

福島道広 中野寛子 長田正宏

## はじめに

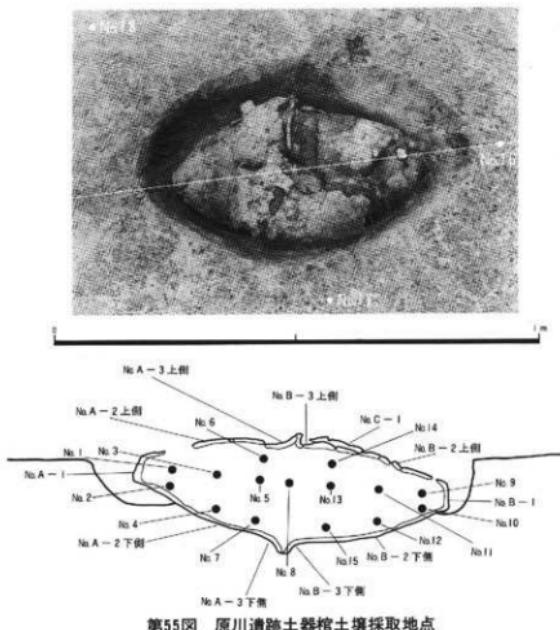
すべての動植物は体内に脂肪を持っており、それを構成する脂肪酸とステロールの化学組成は種によって異なる。最近、この脂肪は千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。原始古代の遺物や土壤に残った脂肪を抽出、分析し、現生の動植物の脂肪酸組成、ステロール組成と比較することで“脂肪の持主”を特定しようとするのが残存脂肪分析法である。この「残存脂肪分析法」を用いて、原川遺跡出土の土器棺の性格を解明しようとした。

脂肪の持主  
の特徴

## 第1節 土器棺試料

原川遺跡遺構は、弥生時代中期初頭と推定されている。その遺構配置図と土器棺試料出土地点を第55図に示す。土器棺は、2個の同大、同形の深鉢をぴったりと合わせ、その上に他の深鉢の破片をかぶせたものであり、大きさは2つ合わせると長軸方向に62cm、短軸方向に37cmである。土器棺試料は土器棺A、Bのそれぞれ底部（No.A-1, No.B-1）、体部の上側と下側の部分（No.A-2上側, No.A-2下側, No.B-2上側, No.B-2下側）、口縁

合わせ口  
土器棺塞



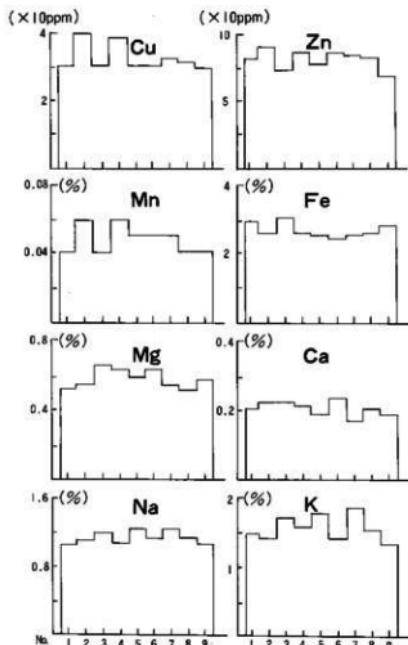
### 無機成分の分析方法

部の上側と下側の部分 (No.A - 3 上側, No.A - 3 下側, No.B - 3 上側, No.B - 3 下側) と土器棺にかぶせてあった土器片試料 No.C - 1 を採取した。土器棺内土壤は、土器棺 A, B の底部、体部、口縁部の中心と表面から採取した。また、土器棺内土壤から土器片等が出土し、これら試料についても採取し、分析に供した。対照区としては、土器棺のあった遺構外の離れた部分の土壤 3ヶ所を採取した。各試料は分析まで冷蔵庫で保存された。

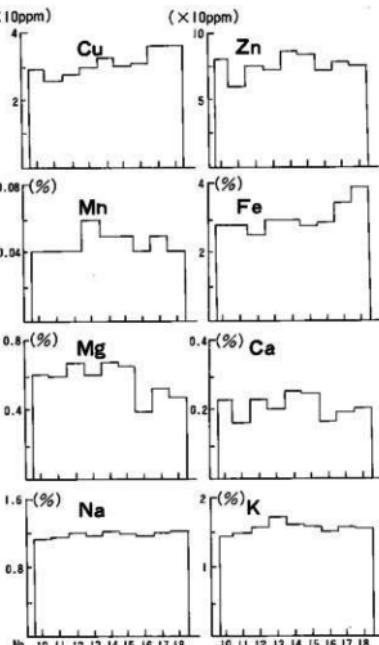
## 第2節 土壤試料の無機成分

土器棺内土壤試料中の無機成分を調べ土器棺の性格の解明を試みた。

試料の分析は次のようにして行った。乾燥土壤試料をメノウ乳鉢で細粉し、それを正確に磁製ルツボにとり、500°Cの電気炉で4時間加熱して有機物を分解、冷却後、テフロンビーカーに移し、沸騰水素および硝酸-過塩素酸 (3:1) を加え、200°Cで加熱分解。これを蒸発乾固後、残渣に塩酸を加え、加温溶解し、一定容にしてから、原子吸光法により鉄 (Fe), マンガン (Mn), カルシウム (Ca), マグネシウム (Mg), ナトリウム (Na), カリウム (K) の主要元素および銅 (Cu), 亜鉛 (Zn) の微量元素を分析した。磷 (P) は比色法により定量した。土器棺内土壤試料および対照区土壤試料の重金属分布を第56図の 1, 2 に示す。色調や他の外観から土壤試料は灰色粘質土壤と推定された。主要元素のうち、Mg, Ca, Na および K 含量は土器棺内外とも土壤試料間にそれほど大きな差



第56図 その1 土器棺内から採取した土壤の重金属分布

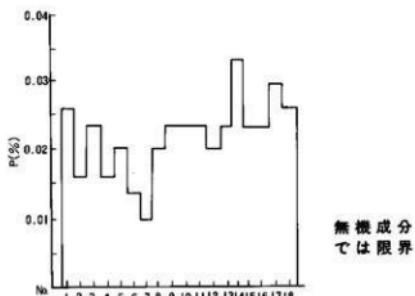


第56図 その2 土器棺内から採取した土壤および対照区土壤の重金属分布

が認められなかった。Fe含量は対照区土壤で多少高い値を示した。また微量元素は各地点でほとんど差が認められなかった。

基準の認定に広く利用されているPの分布を第57図に示す。P含量は、土器棺内土壤試料No.13で最も高かったが、全体的に対照区土壤試料で高い傾向にあった。

これらの結果を総合すると、土壤の無機成分から土器棺を発掘と認定する有力な情報は得られなかつた。



第57図 土器棺内から採取した土壤および対照区土壤の磷分布

### 第3節 残存脂肪の抽出

試料に3倍量のクロロホルム・メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理して残存脂肪を抽出した。

残存脂肪の抽出量を第3表の1, 2に示す。残存脂肪抽出量は、土器棺試料で0.0060~0.1578%, 平均0.0570%, 土器棺内土壤で0.0014~0.0153%, 平均0.0041%, 対照区土壤試料では0.0008~0.0023%, 平均0.0015%であった。土器棺の残存脂肪抽出量は秋田県大潟原状列石周辺遺跡から出土した発掘土器の平均0.036%と比較して高かつた。土壤からの残存脂

残存脂肪の  
抽出方法

第3表 その1 原川遺跡の土器および土壤の  
残存脂肪抽出量

No	遺物の種類	重量(g)	全脂質(%)	抽出率(%)
A - 1	土器片	33.97	29.9	0.0880
A-2上側	土器片	40.77	30.2	0.0741
A-2下側	土器片	30.82	7.6	0.0247
A-3上側	土器片	15.97	25.2	0.1578
A-3下側	土器片	12.96	18.8	0.1451
B - 1	土器片	31.58	5.2	0.0165
B-2上側	土器片	21.73	11.8	0.0543
B-2下側	土器片	31.52	1.9	0.0060
B-3上側	土器片	21.09	4.0	0.0190
B-3下側	土器片	12.82	1.2	0.0094
C - 1	土器片	120.58	38.0	0.0323
1	A 1 中心土壤	1059.85	15.0	0.0014
2	A 1 表面土壤	220.02	15.4	0.0070
3	A 2 中心土壤	609.99	11.6	0.0019
4	A 2 表面土壤	503.78	20.6	0.0041
5	A 3 中心土壤	560.38	14.6	0.0026
6	A 3 表面土壤	306.03	17.0	0.0056
7	A 3 表面土壤	22.15	1.2	0.0054
8	A B 中心土壤	320.26	5.8	0.0027
9	B 1 中心土壤	1031.50	14.1	0.0014
10	B 1 表面土壤	706.69	19.3	0.0027
11	B 2 中心土壤	611.09	11.2	0.0018
12	B 2 表面土壤	1059.10	16.2	0.0053
13	B 3 中心土壤	708.03	11.3	0.0016
14	B 3 表面土壤	359.20	9.5	0.0026
15	B 3 表面土壤	568.53	16.6	0.0030

第3表 その2 原川遺跡の土器および土壤の  
残存脂肪抽出量

No	遺物の種類	重量(g)	全脂質(%)	抽出率(%)
16	外土 - 1	1068.99	8.8	0.0008
17	外土 - 2	1015.49	13.4	0.0013
18	外土 - 3	504.19	11.4	0.0023
19	A 1 出土土器片	22.16	10.6	0.0478
20	A 1 出土土器片	4.30	0.9	0.0209
21	A 2 出土土器片	12.52	11.2	0.0895
22	A 3 出土土器片	31.56	17.1	0.0542
23	A 3 出土土器片	14.51	73.1	0.5038
24	B 3 出土土器片	47.85	6.0	0.0125
25	A 1 出土炭化物	0.19	0.3	0.1679
26	A 2 出土炭化物	0.31	11.8	3.8065
27	A 2 出土炭化物	1.39	0.1	0.0072
28	B 1 出土根	14.64	1.1	0.0075
29	B 1 出土根	0.37	0.1	0.0270
30	B 1 出土根	3.07	0.4	0.0130
31	B 2 出土根	19.65	1.4	0.0071
32	B 3 出土根	5.49	2.1	0.0383
33	B 3 出土塊	4.42	0.1	0.0023
34	B 3 出土塊	3.64	0.3	0.0082
35	B 3 出土塊	28.41	0.9	0.0032
36	A B 出土根	6.70	0.5	0.0075

肪抽出量は全国各地の遺跡土壤の平均0.02%と比較して低かったが、分析には十分量であった。残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した。脂質クラスはグリセロールと脂肪酸の結合したトリグリセリドから誘導されたと推定される遊離脂肪酸が最も多く、次いでトリグリセリド、ステロールの順に多かった。この他に微量のステロールエステル、長鎖の炭化水素も検出した。

#### 第4節 残存脂肪の脂肪酸組成

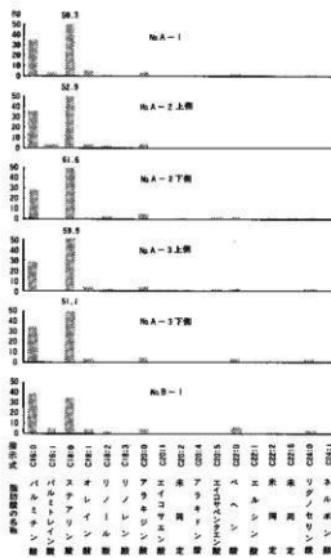
**分析方法** 試料の残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°Cで2時間封管中でメタノール分解し、生成した脂肪酸メチルエステルを薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。

**12種を検出** 試料の残存脂肪の脂肪酸組成を第58図の1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸(C 16:0)、パルミトレイン酸(C 16:1)、ステアリン酸(C 18:0)、オレイン酸(C 18:1)、リノール酸(C 18:2)、アラキシン酸(C 20:0)、エイコサエン酸(C 20:1)、ベヘン酸(C 22:0)、エルシン酸(C 22:1)、リグノセリン酸(C 24:0)など10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。土器棺試料の脂肪酸組成を第58図の1, 2に示す。土器棺A, Bの上側、下側およびCといずれの試料ともパルミチン酸、ステアリン酸が主成分で全脂肪の約70%以上を占めていた。パルミチン酸、ステアリン酸などの中級飽和脂肪酸の占める割合が高い脂肪酸パターンは高等動物の体脂肪に多い。また土器棺B, C試料では高等動物、

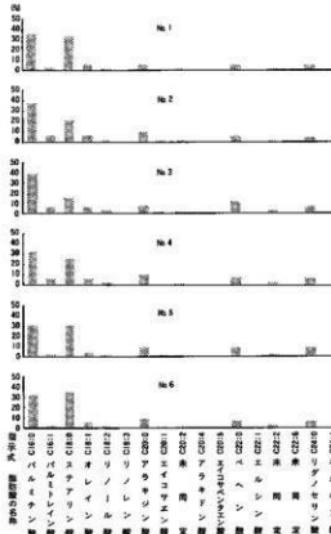
**中級飽和脂肪酸** とくに臓器・脳・神経組織に特徴的にみられるベヘン酸以上の高級脂肪酸は約10%近い割合で分布していた。土器棺内土壤試料ではいずれの試料とも主成分はパルミチン酸、ステアリン酸で50%以上を占めていた。中心土壤試料と側壁土壤試料とは、いずれも大きな違いはみられなかった(第58図の3, 4, 5)。また土器棺A-1土壤試料No.1, 2では高等動物の脳、臓器等に多く含む高級飽和脂肪酸がほとんど検出されない。しかし、試料No.3からNo.5, No.7, No.8, No.9, No.10, No.11, No.12, No.13, No.14, No.15というように、土器棺B側へ向かうにしたがって、10%から20%以上高級飽和脂肪酸が分布していた。また、対照区土壤試料No.16, No.17およびNo.18でもパルミチン酸が主成分であり、高級飽和脂肪酸も20%以上占めていた(第58図の5)。一般に考古遺物は植物や動物などの遺体を包含する土壤から出土してくるので、これらのしみ出した脂肪の影響を受けやすいため、異種脂肪酸の混入の可能性が極めて大きい。土器棺内出土土器片試料および遺物試料(第58図の6, 7, 8)についても土器片試料No.19~24ではパルミチン酸、ステアリン酸が主成分であり、遺物試料No.19~24ではパルミチン酸、ステアリン酸が主成分であり遺物試料No.25~36では、パルミチン酸・ステアリン酸の他に高級飽和脂肪酸であるベヘン酸、リグノセリン酸が多く検出され、特に試料No.26, No.29, No.30, No.31, No.32, No.35およびNo.36では約22~52%と高い割合で分布していた。土葬形態の墓壙では、一般に特徴的な脂肪酸としてベヘン酸とリグノセリン酸が多く検出されるところから、土器棺内に動物遺体が存在していた可能性が高い。

#### 第5節 残存脂肪のステロール組成

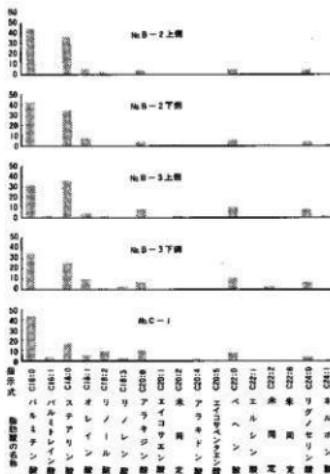
**分析方法** 土器棺、土器棺内土壤および出土遺物に残存する脂肪からステロールをケイ酸薄層クロマトグラフィーにより分離・精製後、アセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィー



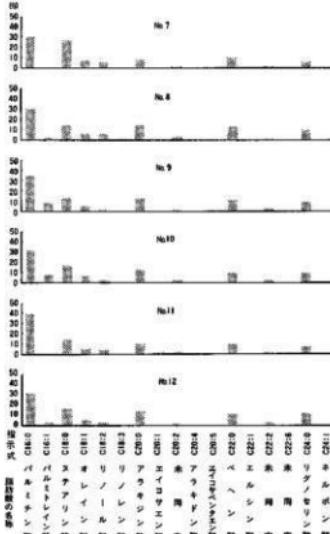
第56図 その1 土器棺に残存する  
脂肪の脂肪酸組成



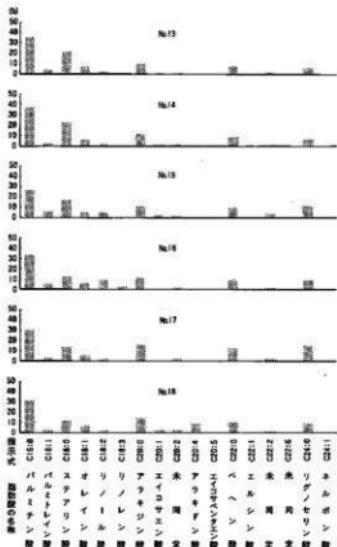
第56図 その3 土器棺内土壌に残存する  
脂肪の脂肪酸組成



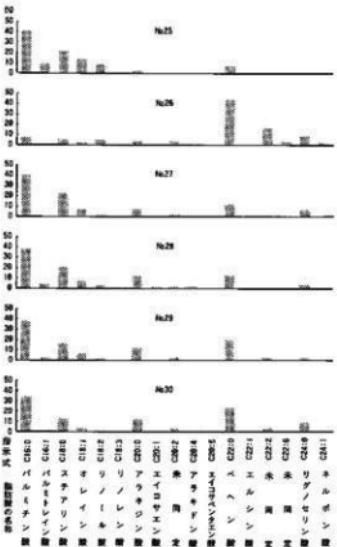
第56図 その2 土器棺に残存する  
脂肪の脂肪酸組成



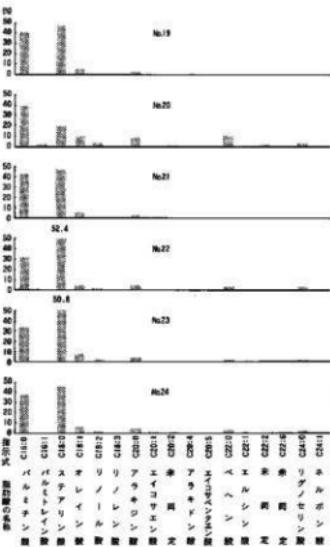
第56図 その4 土器棺内土壌に残存する  
脂肪の脂肪酸組成



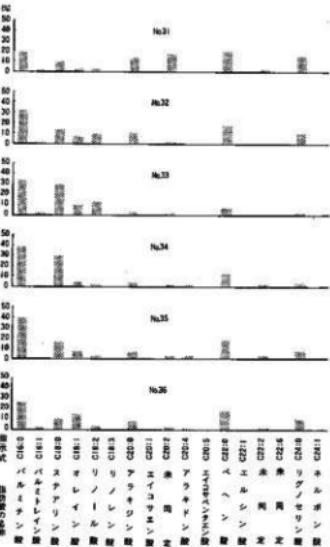
第58図 その5 土器棺内土壌および対照区  
土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成



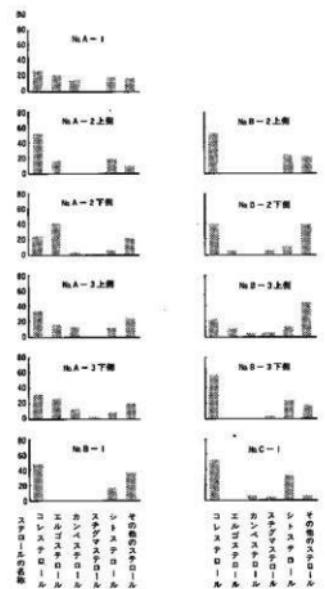
第58図 その6 土器棺内から出土した土器片  
に残存する脂肪の脂肪酸組成



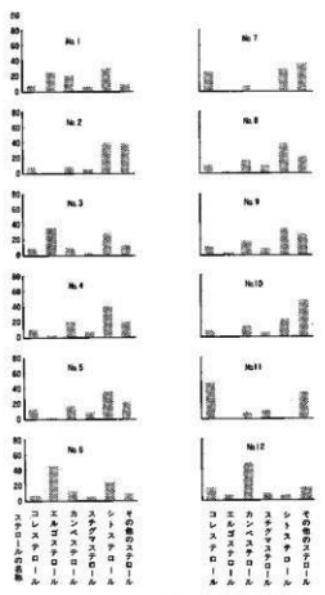
第58図 その7 土器棺内から出土した遺物に  
残存する脂肪の脂肪酸組成



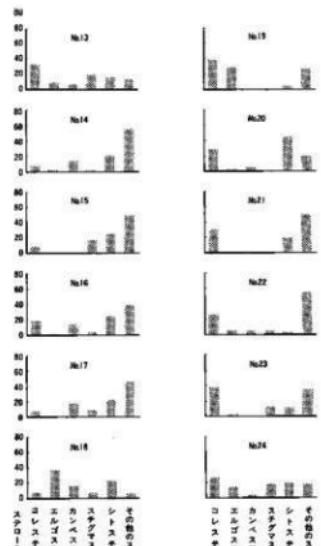
第58図 その8 土器棺内から出土した遺物に  
残存する脂肪の脂肪酸組成



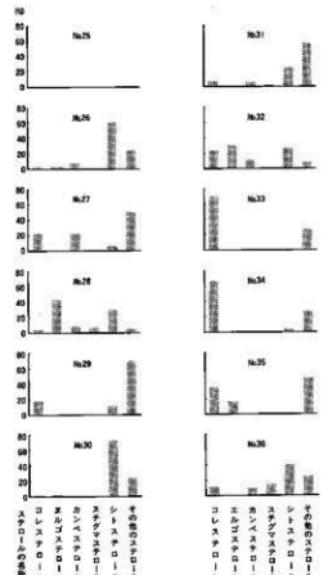
第59図 その1 土器棺に残存する脂肪のステロール組成



第59図 その2 土器棺内土壤に残存する脂肪のステロール組成



第59図 その3 土器棺内土壤・対照区土壤および土器棺から出土した土器片に残存する脂肪のステロール組成



第59図 その4 土器棺から出土した残存する脂肪のステロール組成

により分析した。

#### ステロールの検出

試料の残存ステロール組成を第59図の1, 2, 3, 4に示す。残存脂肪から7~11種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。土器棺試料ではいずれの試料とも動物由来のコレステロールが23%以上分布しており、特に土器棺試料 No.A-2上側、No.B-1、No.B-2上側、No.B-2下側、No.B-3上側およびNo.C-1で約50%占めていた(第59図の1)。土器棺内土壤試料については試料No.7、No.11、No.12およびNo.13でコレステロールが約16~46%分布していた。このうち試料No.11、No.13の土器棺B側の中心土壤で34%以上と高い割合で占めていた(第59図の2, 3)。また土器棺内から出土した試料については土器片試料No.19、No.20、No.21、No.22、No.23およびNo.24でコレステロールが26%以上の割合を占め、遺物試料No.33、No.34およびNo.35で36~72%と高い値で分布していた。土器棺内のコレステロールの分布状態をみると土器棺Aと土器棺Bとの合わせ口の所に多く分布していた。これまでの墓壙資料から得られた動物遺物の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの指標値は0.6以上である。従って、第4表の1, 2に見られるように、土器棺試料はいずれもステロール比が1.429~3.935と高い値で分布していた。また、土器棺内土壤試料 No.7、No.11、No.12およびNo.13でステロール比0.907~57.900、出土土器片試料No.19、No.20、No.21、No.22、No.23およびNo.24でステロール比0.668~7.553、出土遺物試料No.27、No.29、No.33、No.34およびNo.35でステロール比1.538~47.720と動物遺体の存在・付着を示唆する高い値を示した。これに対して、対照区土壤試料No.17およびNo.18のステロール比はそれぞれ0.341、0.352と低い値を示し、植物腐植土壤を示

#### コレステロールの分布

第4表 その1 土器棺および土壤試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料(No.)	コレステロール (%)	シトステロール (%)	コレステロール/シトステロール
A-1	26.93	18.85	1.4285
A-2上側	51.56	19.49	2.6455
A-2下側	24.56	7.65	3.2105
A-3上側	33.45	12.19	2.7441
A-3下側	32.23	8.19	3.9353
B-1	47.90	16.64	2.8786
B-2上側	53.20	24.57	2.1652
B-2下側	40.03	10.45	3.8270
B-3上側	22.90	13.48	1.6988
B-3下側	56.08	23.34	2.4027
C-1	51.82	32.50	1.5945
1	7.42	30.59	0.2426
2	7.46	39.14	0.1906
3	10.06	28.38	0.3545
4	9.82	40.07	0.2451
5	13.38	36.49	0.3667
6	6.38	23.41	0.2725
7	26.17	28.86	0.9068
8	10.87	39.56	0.2748
9	10.33	34.66	0.2980
10	7.75	22.87	0.3389
11	46.32	0.80	57.9000
12	16.07	5.04	3.1885

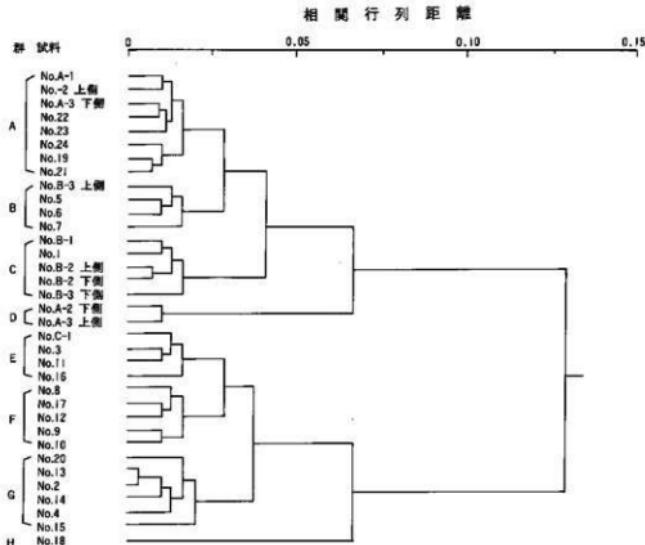
第4表 その2 土壤試料、出土土器片および分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料(No.)	コレステロール (%)	シトステロール (%)	コレステロール/シトステロール
13	33.45	16.42	2.0371
14	6.84	20.53	0.3332
15	7.88	24.71	0.3189
16	17.95	23.40	0.7671
17	7.39	21.69	0.3407
18	8.17	23.20	0.3522
19	39.20	5.19	7.5530
20	29.25	43.77	0.6663
21	30.07	19.15	1.5702
22	26.20	3.63	7.2176
23	38.85	11.23	3.4150
24	26.31	19.94	1.3195
25	N.D.	N.D.	N.D.
26	2.26	60.47	0.0374
27	22.23	6.28	3.5398
28	4.07	30.87	0.1318
29	18.33	11.92	1.5878
30	1.22	73.36	0.0166
31	7.73	24.62	0.3140
32	23.04	26.83	0.8587
33	71.58	1.50	47.7200
34	67.63	3.88	17.4820
35	35.58	1.03	34.5437
36	10.67	40.47	0.2637

していた。対照区土壌試料No16のステロール比は、0.767と動物遺体の存在を示す値を検出した。これは異種脂肪の混入によるものと推測される。

## 第6節 脂肪酸組成からの数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成を重回帰分析にかけ、相関行列距離を基にした群平均によるクラスター分析の結果を第60図に示す。樹状構造図に見られるように、いずれの試料とも類縁距



第60図 土器棺土壤および土器棺内から出土した土器片に残存する  
脂肪酸組成樹状構造図

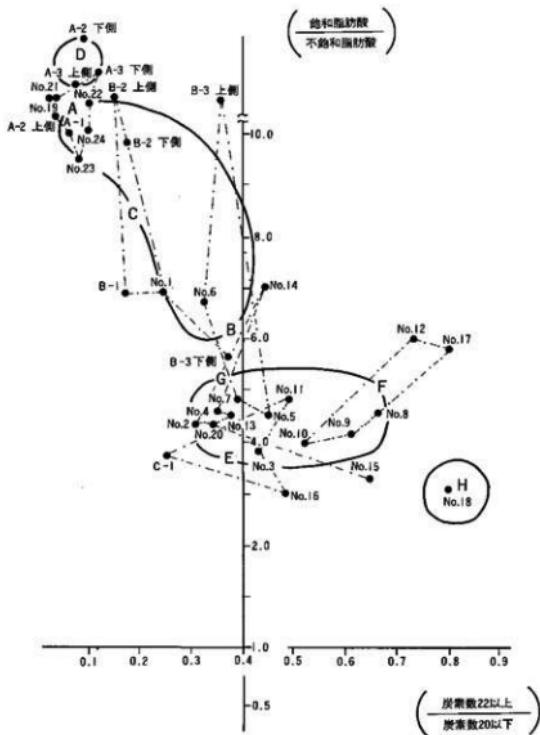
相関係  
によ  
る  
系  
統  
樹

離は0.13以下と互いに短い。この相関距離内で土器棺試料NoA-1, NoA-2上側およびNoA-3下側、出土土器片試料No19, No21, No22, No23およびNo24はA群を、試料NoB-3上側, No5, No6およびNo7はB群、試料NoB-1, No1, NoB-2上側, NoB-2下側およびNoB-3下側はC群、試料NoA-2下側とNoA-3上側はD群を形成した。A群、B群、C群およびD群は相関距離0.07以下と比較的近い系統樹に属していた。これらの群には土器棺試料と土器棺内出土土器片試料が主であった。それに対して土壌試料No3およびNo11、土器棺試料NoC-1、対照区土壌試料No16はE群、試料No8, No9, No10およびNo12と対照区土壌試料No17はF群を、試料No2, No4, No13, No14およびNo20はG群を、対照区土壌試料No18はH群をそれぞれ形成した。これらの群も相関距離0.06以下と近い系統樹に属していた。

脂肪分布による種の特徴

## 第7節 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のバルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20以上のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸の比をY軸にとり、種特異性相関を求めた。この比例配分により、第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等に由来する脂肪が分布し、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪が分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。



第61図 土器棺・土器棺内土壤および土器棺から出土した土器片に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

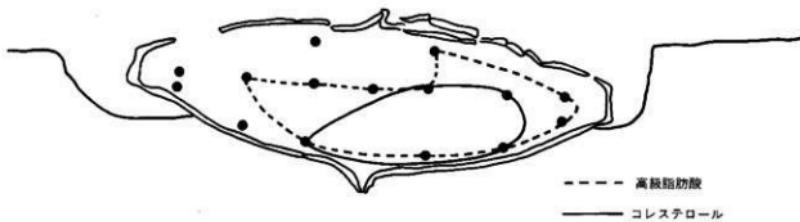
土器棺、土器棺内土壤および土器棺内出土土器片残存脂肪酸から求めた相関図を第61図に示す。A群、B群およびC群を形成する試料は第2象限の原点から離れたY軸沿いに分布した。またD群は第2象限の原点から離れた位置に分布していた。これらの位置は高等動物の体脂肪・骨油の存在・付着を示すものであり、北海道千歳市美々4遺跡のヒト遺体の存在とよく一致していた。E群、F群およびG群は原点から離れた第1象限から第2象限にかけて分布していた。この分布位置は高等動物の血液、脳、臓器等と体脂肪、骨油の混合物である可能性が高く、ステロール組成から見ても特に試料No.C-1、No.11、No.12、No.13およびNo.20では高等動物遺体の存在を示唆する値を示していた。しかし、対照区土壤試料であるNo.16はE群にNo.17はF群に属していた。またNo.18は原点から離れた第1象限にH群を形成していた。この分布位置は高等動物の脳、臓器等の存在を示すものであるが、ステロールの分布比はNo.16を除いて低い値を示しており、異種脂肪の混入が極めて大きいと推測される。脂肪酸とステロールの分析結果から、両者の関係を照合してみた。第62図は高級脂肪酸とステロールの土器棺内での分布状況を示したものである。脂肪酸とコレステロールの分布範囲はほぼ一致しており、土器棺Bを中心に底部の方に広がっていた。

これらの成績と脂肪酸のクラスター分析およびステロール分析の結果を総合すると、土器棺には動物遺体が存在していたと推定できた。従って、土器棺は甕棺であり、この土器棺内に遺体が埋葬されたと断定した。

#### 高等動物

土器棺内で  
の分布状況

遺体の埋葬



第62図 土器棺内の高級脂肪酸およびコレステロールの分布状況

#### 第8節 総 括

原川遺跡から採取した土器棺、土器棺内土壤および土器棺内から出土した土器片32試料から動物脂肪とステロールを検出した。対照土壤区からは異種脂肪が混入したと推測される脂肪酸と植物性ステロールを検出した。その結果、土器棺は甕棺であり、甕棺には高等動物に属する遺体が埋葬されていた可能性が極めて高いと認定された。甕棺には幼児埋葬用と骨を集め埋葬した成人骨改葬（洗骨葬）用土器がある。甕棺の大きさ、土葬形態で検出されるベヘン酸、リグノセリン酸含量が高いこと、多量の体脂肪の脂肪酸およびコレステロールが存在することから、出土甕棺は幼児埋葬用と認定される。動物種、とくにヒトの認定は脂肪酸とステロールの成績からだけでは判定するには困難を伴う。更に、免疫学的な手法により解析する必要がある。

幼児埋葬用  
と 認 定

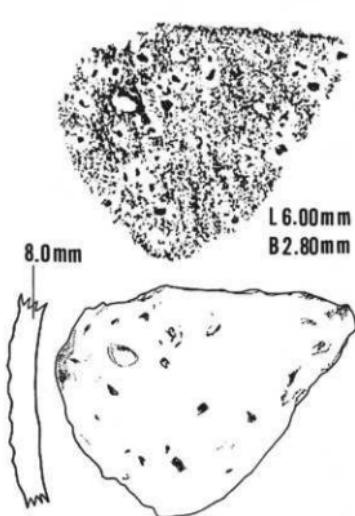
### 参考文献

- 土壤養分測定法委員会編 『土壤養分分析法』 P430 養賢堂、東京 1970
- M. Nakano and W. Fischer : 'The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021' 『Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem.』 358巻 P1439 1977
- 中野 益男・伊賀 啓・根岸 孝・安本 敦博・畠 宏明・矢吹 俊男・佐原 真・田中 琢 「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生化学研究』第26巻 P 40 1984
- 中野 益男 「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻(6) P124 1984
- 中野 益男・中岡 利泰 「配石遺構の土壤および甕棺土器に残存する脂肪の分析」『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』 P40 秋田県鹿角市教育委員会 1986
- 中野 益男 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」『真脇遺跡－農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書－』 P401 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986
- 中野 益男・福島 道広・中野 寛子 「美々 4 遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」『美沢川流域の遺跡群IX－新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』 P460 (財) 北海道埋蔵文化財センター 1986

## 第9章 原川遺跡出土の圧痕

佐藤敏也

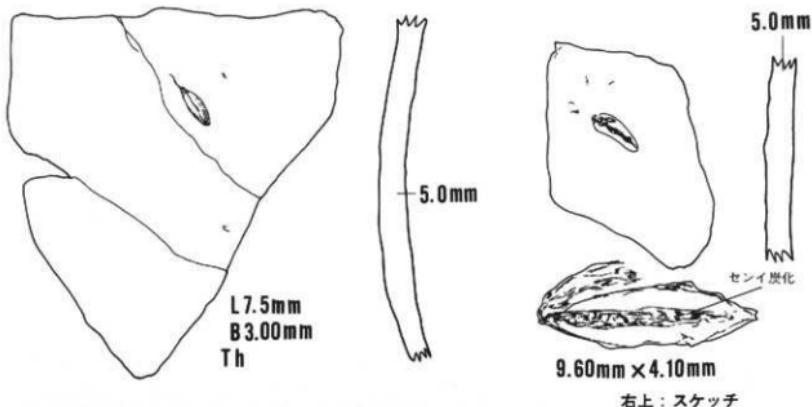
土器片5点 THG 2094, 2096, 2111, 2251および3737中植物種子の圧痕とおぼしきものは、THG 2111(12)およびTHG 251(15), THG SX802 3737の3点であるが、これらのいずれからも種子の組織の残像を捕捉することができなかった。しかしTHG SX802 3737からはイネ科または水草の維管束が発見された。それがイネのものかどうかは判然としない、と言うのはイネ科の特徴を示す細胞組織が検出できなかったからである。またTHG 2251(15)の圧痕は外見あたかも楔痕のような形態を示しているが、充填されている灰の灰像からは維管束と同様な組織が検出された。2111(12)の圧痕は不明痕で無論灰像では植物組織は捕捉されていない。



第63図 圧痕のある土器 その1(7区包含層2111(12))  
左上: 拓影 左下: スケッチ 右上: 拡大写真



第64図 圧痕のある土器 その2(7区包含層2251(15))  
左下: 拓影 右上: 拡大写真 次ページ左上スケッチ



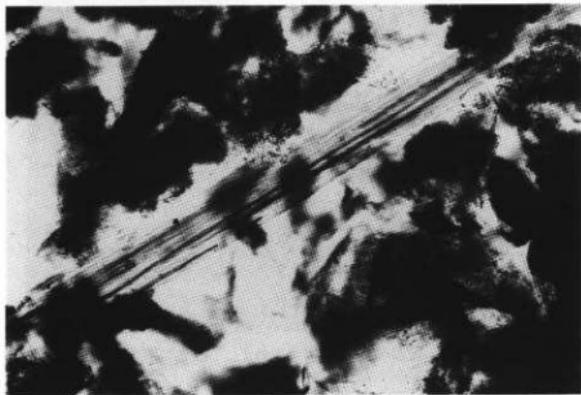
右上：スケッチ

左中：圧痕拡大  
実長 9.60×4.10mm



上：拓影

左下：灰像  
センイ × 100



第65図  
圧痕のある土器 その3  
(S X802 3737)

# 第10章 まとめ

## 第1節 遺跡の立地について

原川遺跡は原野谷川の自然堤防上に位置しており、検出された遺構は海拔16mを中心とする沖積平野部に形成されていた。原川遺跡の周辺は先に説明しているように、北から台地沿いに南流してきた原野谷川が、東からの逆川、あるいは垂木川の流れと合流する地点で、南から西へと大きく流れを変える地点であり、氾濫を繰り返したものと思われる。等高線図の微高地の観察によっても何本かの流路変遷を読み取ることが可能である。周辺に存する坂尻遺跡・領家遺跡あるいは梅橋北遺跡等の調査の結果からは、そうした地形が形成されたのは比較的早い段階であり、弥生中期の初頭には領家遺跡・原川遺跡の形成が始まっている。縄文晩期から弥生中期にかけての海面の後退「弥生中期の小海退」の影響もあり、原川遺跡の周辺は比較的安定した地域であった可能性が強い。

こうした沖積平野の自然堤防上に位置する遺跡は弥生中期段階からで、縄文時代集落の立地との間に差があることが考えられる。こうした立地を示す遺跡に磐田市鉢影遺跡、先の領家遺跡あるいは菊川流域の小笠町嶺田遺跡等がある。いずれも現水田下に埋没しているが中期中葉さらには後期～古墳時代にまで継続すると考えられる大集落であり、その発端は中期初頭段階である。こうした位置に集落が形成され始めることは、当然水稻耕作の開始と密接に関係するものであり、現在木製農耕具あるいは水田跡等直接水稻耕作の開始を示すものこそ発見されていないが、この地域で中期初頭段階での水稻耕作の開始を示す指標のひとつと考えて良いと思われる。

自然堤防  
上の遺跡

初期の農耕  
集落の立地

## 第2節 検出された遺構

発掘調査により検出された遺構は、掘立柱建物は8棟、土器棺墓6基および溝等であり、他に性格不明の土坑がある。

掘立柱建物は1間×2間あるいは1間×3間のものが中心であり、規模には多少の差があるが、梁間はいずれも1間で共通している。東海地方の各集落跡でも掘立柱建物の検出されている例は多く、静岡市有東遺跡では中期後半の例が知られている。また後期段階では登呂遺跡を始め静岡市瀬名遺跡・菊川町赤谷遺跡・三沢西原遺跡さらには清水市飯田遺跡等、集落跡を比較的まとまった広さで発掘している遺跡ではほぼ例外なく発見されている。しかし多くの場合は静岡市沙入遺跡で検討されたように、竪穴住居跡と組合せになっておりそれに伴う倉庫群と考えられている。また掘立柱建物のみのものに愛知県春日井市勝川遺跡・岐阜県岐阜市寺田遺跡があるが、前者は木器の製作に関する小屋的な性格を考えられており、集落そのものとは考えられていないようである。

掘立柱建物

原川遺跡の場合8棟のみではあるが、他に竪穴住居跡と考え得るものはなく、やはり掘立柱建物を住居跡と考えられる必要がある。そうした場合、先に分析したように検出された掘立柱建物はその位置から2群の建物群に分ける事ができ、それぞれを一単位の建物群と考えができる。隣接する台地上に存在する弥生時代集落の竪穴住居群との関係を含め今後の検討を要する部分が多いが、一応ここでは掘立柱建物を中心とした集落の存在を推定しておきたいと思う。

掘立柱建物  
から成る集落

### 第3節 土器棺墓群

#### 土器棺 墓群の形成

水神平遺跡に象徴的に見るように条痕文系土器に土器棺として発見された例が多い事は早くから知られていることであり、豊川市麻生田大橋遺跡では五貫森式土器から水神平Ⅲ式土器（丸子式土器）までの段階にかけて200個を超す土器棺墓が発見されている。原川遺跡でも完形に復元し得たものは土器棺として使用されたもののが多かった。先にも触れていたように、今回土器棺内部の土壤の脂肪酸分析の結果、哺乳動物の脂肪酸が含まれ、また人と推定されている。したがって從来考えられていたようにこうした壺・壺はやはり土器棺墓である事が明らかにされた。これらの土器棺墓は、集落の周辺に営まれた墓であるが、他の構造と混在しているものではなく意識的に墓域を形成している事が知られる。湖西市伊賀谷遺跡等にみると集落とは多少離れた丘陵上に土器棺墓群を構成する遺跡との間に立地上にも差がある。遠江において方形周溝墓が形成され始めるのは今のところ掛川市山下遺跡あるいは磐田市馬坂遺跡等で見るように中期中葉であり、中期前葉のものは発見されていない。土器棺墓は中期後葉以後にも残るが、縄文晩期後半から弥生中期にかけて盛行したもので、方形周溝墓に先行する墓制であろう事は広く知られている。脂肪酸分析の結果原川遺跡の土器棺が小児あるいは胎児用のものである事を推定し得たことは東海地方の土器棺墓と東日本に広く知られている再葬墓との関係を推討する上で新たな問題を示したことになろう。

### 第4節 遺跡の年代

#### 弥生中期前葉 の 土 器

発掘された資料は土器が大半であり、ボリコンテナ20箱におよぶ土器群の大半はその器形・文様から丸子式土器に属するものであり、一部に極く数片中期後葉あるいは後期に属するものが含まれていた。これは後に上層から掘り込まれていた遺構覆土内に含まれていたものが、調査時に遺構を充分検出し得なかったものであろうと思われる所以、除外すればその他はほとんど单一時期と考えて良い。従って原川遺跡で検出された弥生時代遺構は弥生中期前葉のものと言うことができる。

### 第5節 原川遺跡出土の土器について

#### 丸子式土器

原川遺跡から出土した土器は他地域の土器を含んでいるが、条痕文系の土器群のほぼ大半が丸子式土器と考えられる。いうまでもなく丸子式土器は静岡市丸子遺跡を標準遺跡とするもので中期前葉の土器であり、この地域の最初の弥生土器と考えられているものである。この土器群は壺・甕からなっており、壺は大型壺、中型甕および小型特殊壺が含まれるなど明らかに容量により器種分化をしている。従って丸子式土器は大・中・小に器種分化した壺と甕を持ったものと言つてよい。

#### 器種分化

これを前段階の水神平式土器と比較すると水神平式の段階で壺・甕の分化はすでに存在するし、また壺にも大型壺と中型甕の分化はほぼ完成しているようである。しかし從来調査されている例の多い遺跡の性格もあり、小型特殊甕の存在は明らかでない。恐らくこうした特殊甕は伴っていないものと思われる。

#### 小型特殊甕

従って今回の資料は丸子式土器の段階にこうした土器を伴とする例を示したものと言ふことができよう。また、富士宮市渋沢遺跡の土器群と比較すると、渋沢遺跡にみられる西閑東風とも言ふべき、擦痕あるいは条痕の広口の鉢、あるいは深鉢（甕）を持っておらず、条痕文系土器のみで構成されている。これは渋沢遺跡と原川遺跡の地理的な位置関係を反

映しているもので、より東側の渋沢遺跡に關東地方の縄文晩期末から初期の弥生土器に多く見る器形・文様を持った土器群を持つのに対して、条痕文系土器の中心地域とも言える遠江の原川遺跡では条痕文土器が圧倒的で他の要素の少ないと充分肯定できる。条痕文系土器のみとの比較であれば原川遺跡の土器群と渋沢遺跡のそれと大きな差はない。

### 主要参考文献

- 向坂 鋼二 「伊賀谷遺跡の成果」『湖西の文化』第12号所収 湖西文化研究協議会 1968  
平野 吾郎他 『遠江見性寺貝塚の研究』磐田市郷土館報告第2輯 磐田市教育委員会 1974  
加藤 安信他 『朝日遺跡 I』(本文篇 1) 愛知県教育委員会 1982  
赤塚 次郎他 『勝川』愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書第1集  
名古屋環状2号線建設に伴う発掘調査報告書 財団法人愛知県教育サービスセンター  
1984  
佐野五十三 『祝田遺跡 I』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第4集  
昭和57・58年度都田川河川改修工事(細江地区)埋蔵文化財発掘調査報告書  
財団法人駿府博物館付属静岡県埋蔵文化財調査研究所 1984  
愛知県考古学談話会編 『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題—縄文から弥生—』資料編 I  
1985  
加藤 芳朗 『坂尻遺跡をめぐる地形・地質学的背景』『坂尻遺跡』一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書 自然科学編 袋井市教委・静岡県教委・建設省中部地建 1985  
平野 吾郎 『伊賀谷遺跡出土の土器について』『古代』第80号 早稲田大学考古学会 1985  
向坂 鋼二・佐藤由起夫・西井 幸雄 『引佐郡三ヶ日町殿畠遺跡』三ヶ日町教育委員会 1985  
佐藤由起夫 『静岡市丸子セイゾク山・佐渡遺跡出土土器の再検討』『研究紀要』第10号  
静岡県博物館協会 1986  
中村 友博 『土器様式変化の一研究—伊勢湾第I様式から伊勢湾第II様式へ—』  
『日本考古学論集 5』吉川弘文館 1987  
吉田 英敏 『寺田・日野 I』一般国道156号岐阜東バイパス建設に伴う緊急発掘調査  
岐阜市文化財報告 建設省・岐阜県・岐阜市教育委員会 1987  
百瀬 長秀 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 I 本文編』  
岡谷市内 日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会 (財)長野県埋蔵文化財  
センター 1987

図 版

図面1　遺跡周辺旧地形図  
(1:20,000) 明治23年  
陸地測量部作成

図面1



図版1 遺跡遠景  
航空写真  
昭和51年5月22日撮影

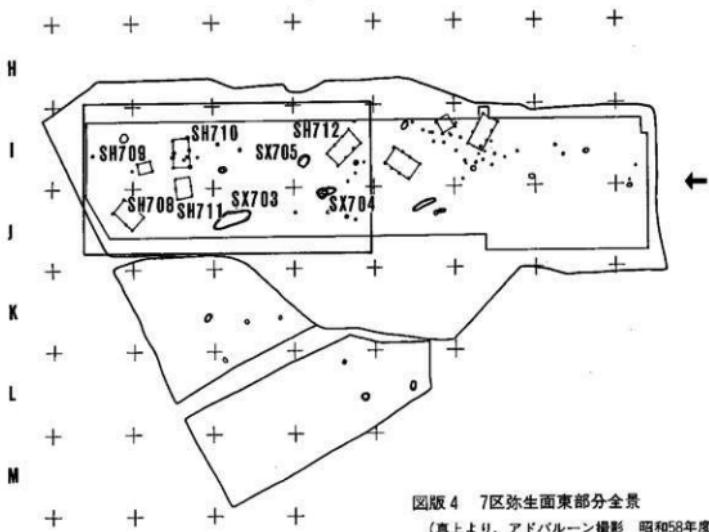


図版2 原川遺跡遠景  
(南より北を見る。昭和59年  
アドバルーンにより撮影)

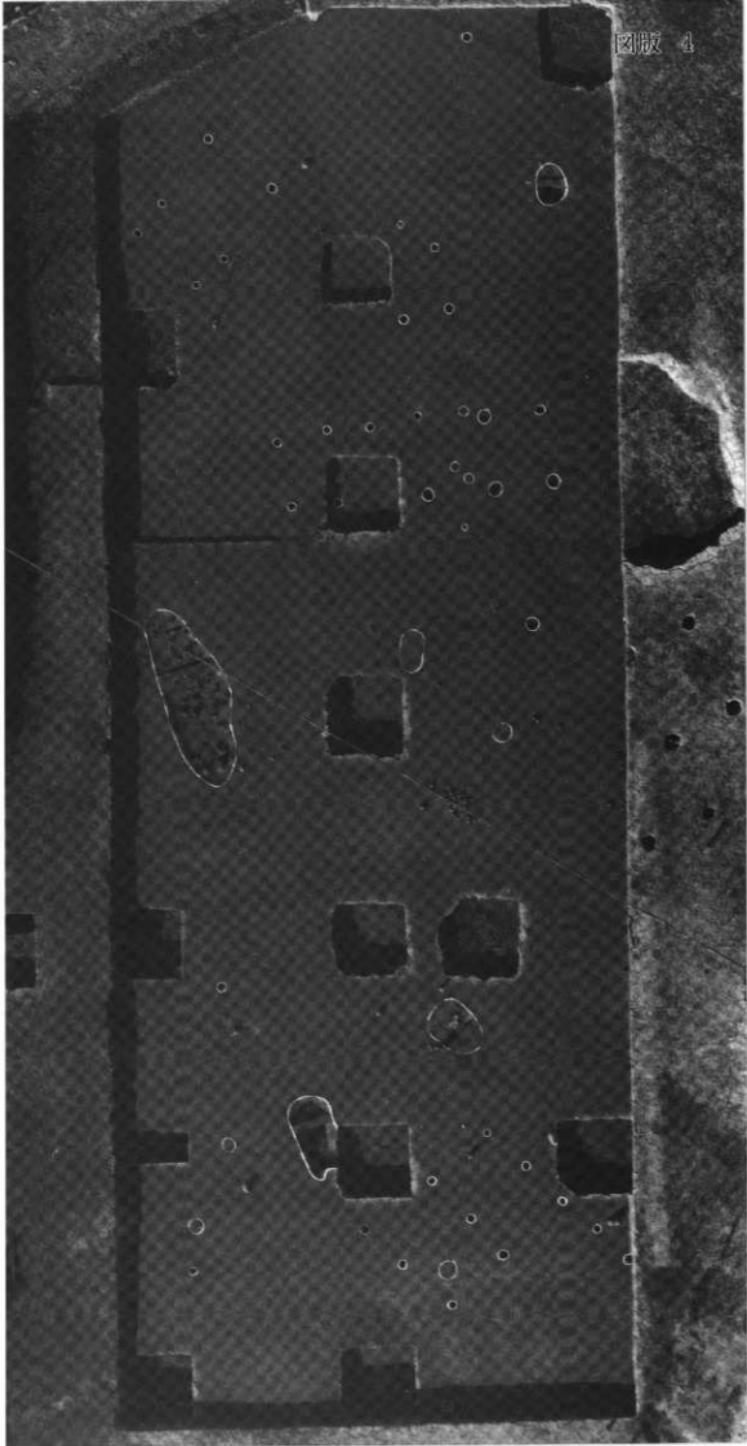


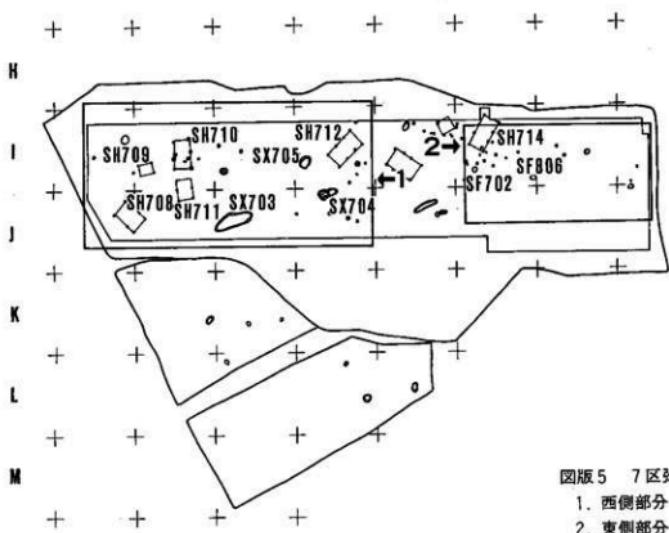
図版3 原川遺跡弥生面発掘区位置図  
(7区、8区A・B、10区A・B・C、11区A・B・C  
航空写真 昭和58年撮影)





図版4 7区弥生面東部分全景  
(真上より、アドバルーン撮影 昭和58年度)

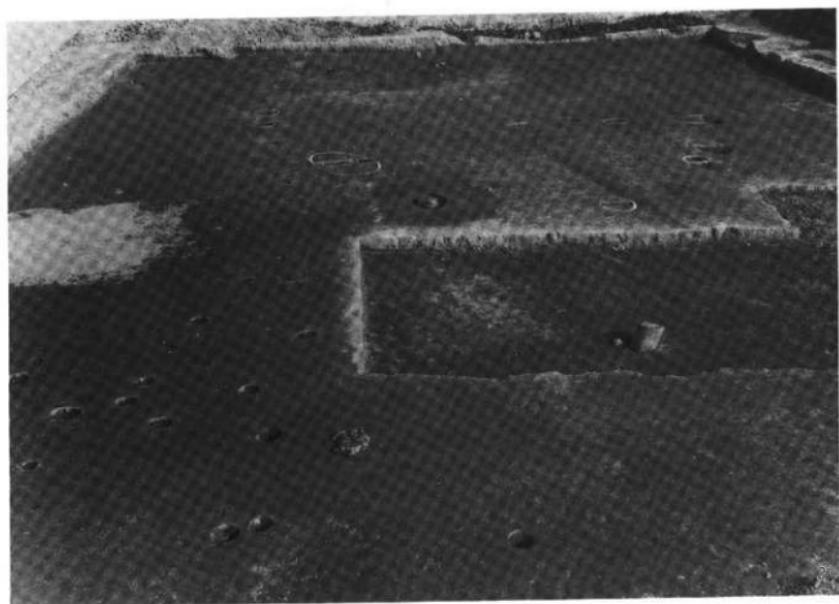


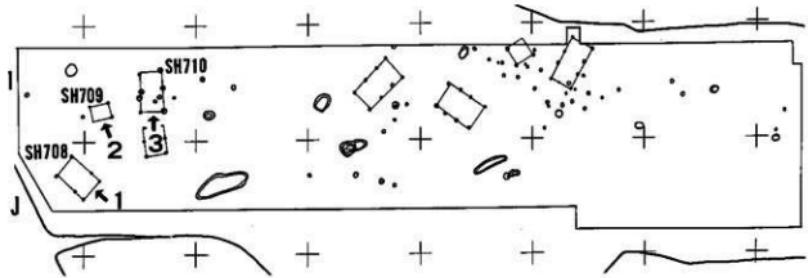


图版5 7区弥生面

1. 西侧部分

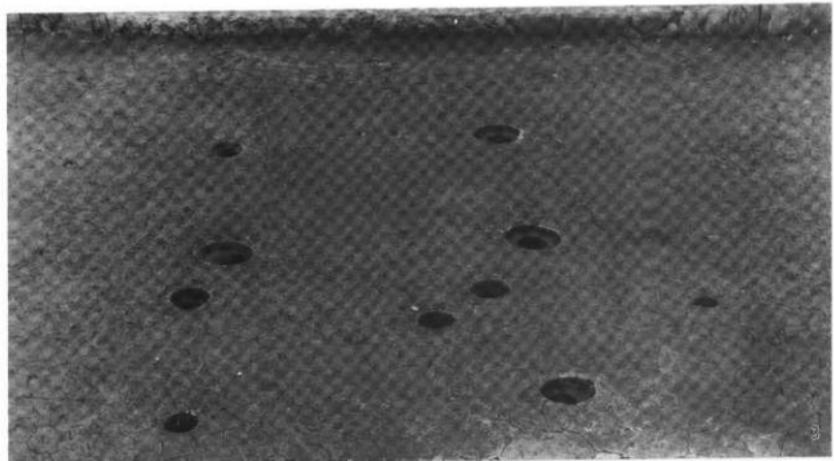
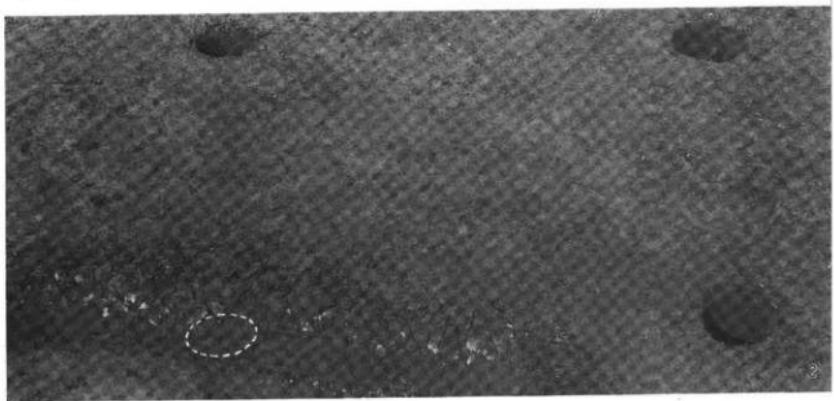
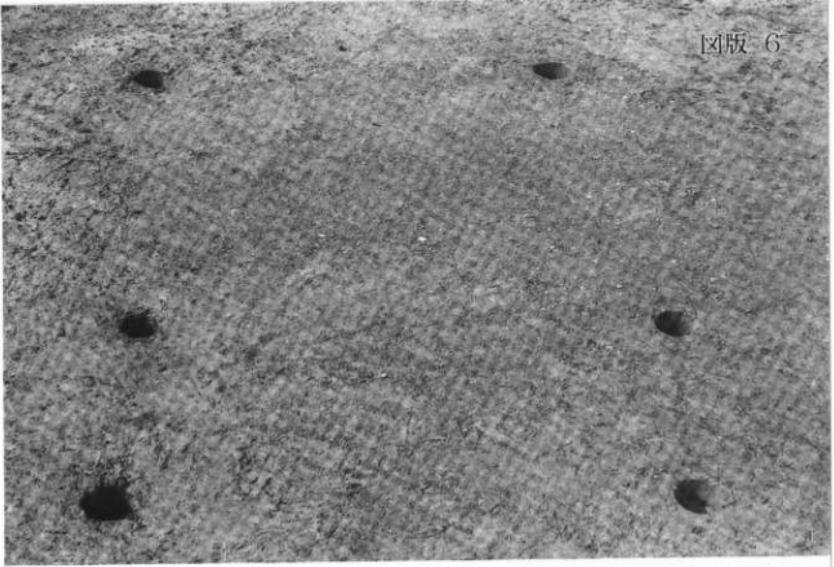
2. 東側部分

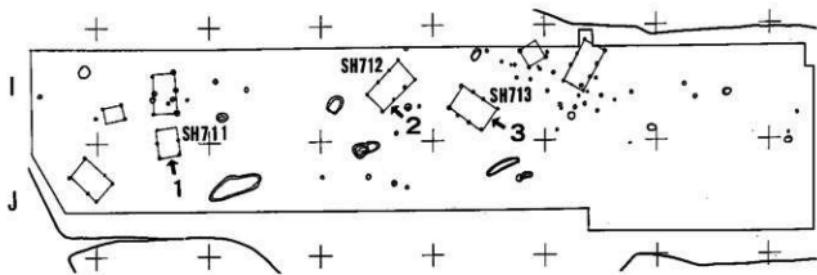




図版6 7区掲立柱建物

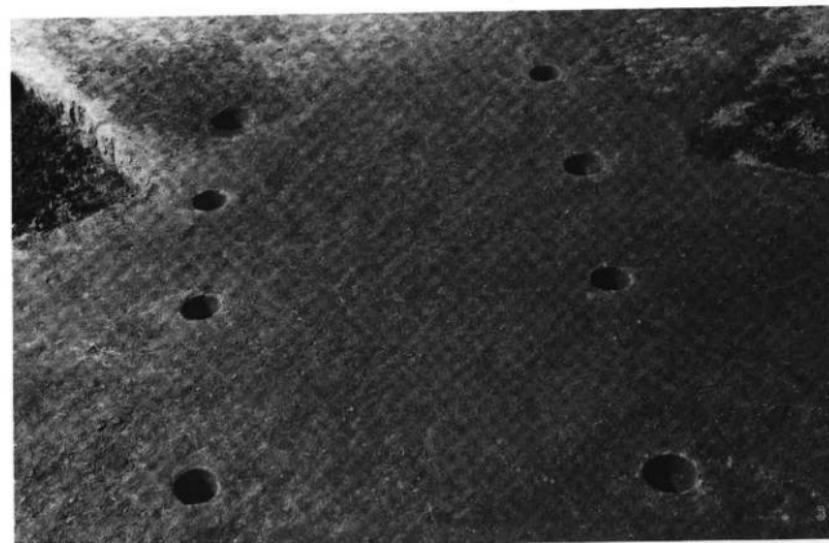
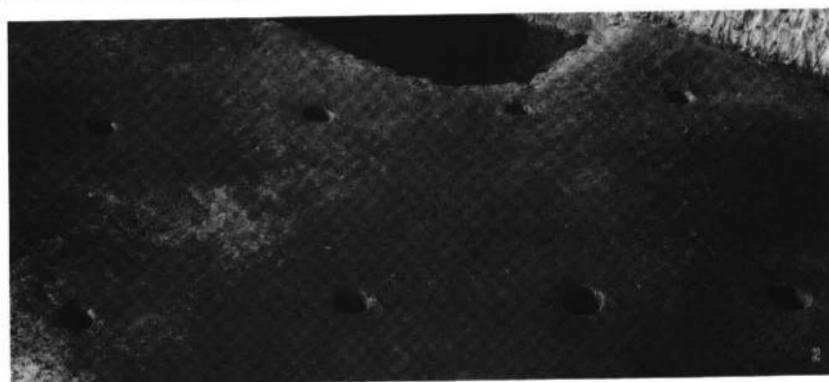
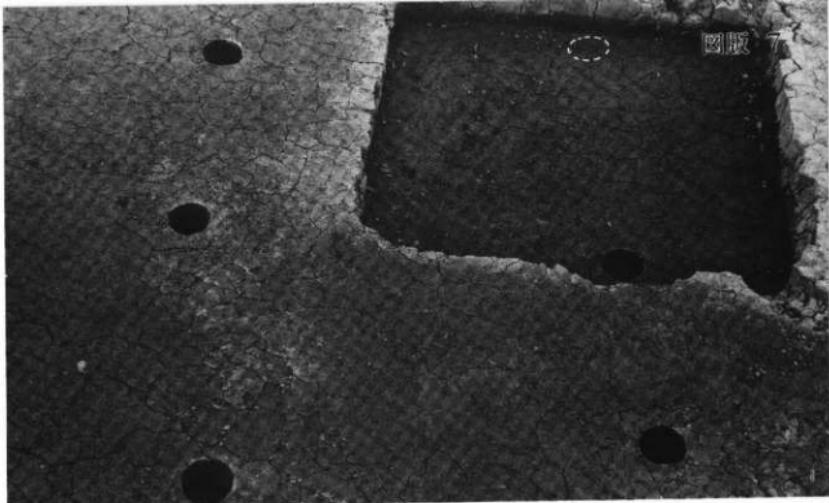
1. SH708
2. SH709
3. SH710

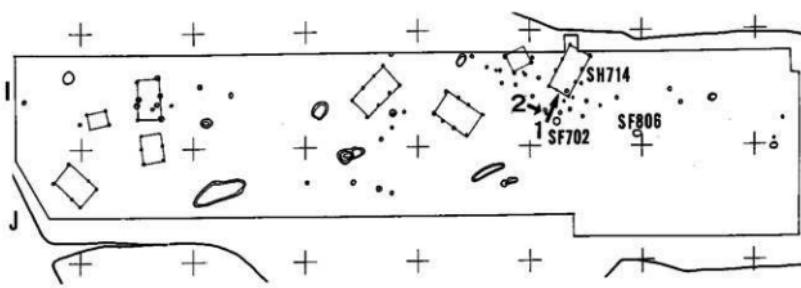




圖版 7 7 区掘立柱建物

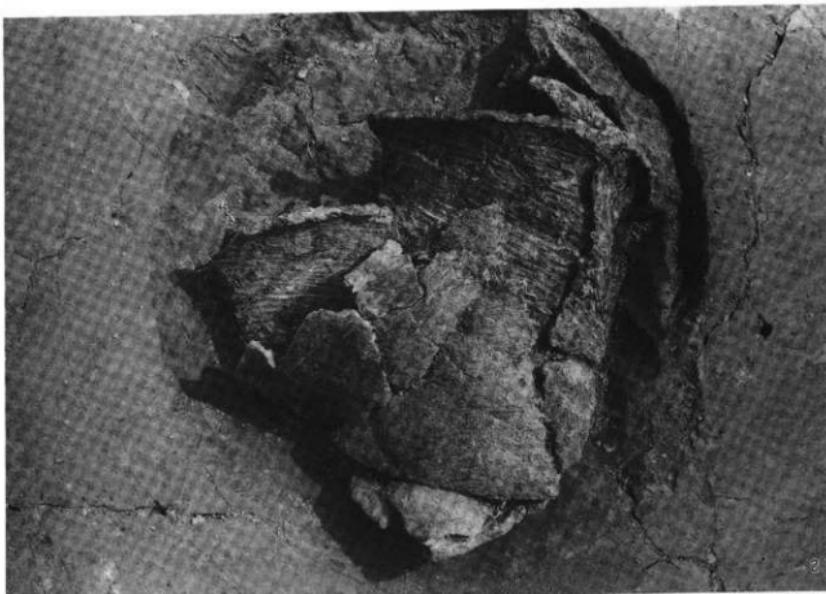
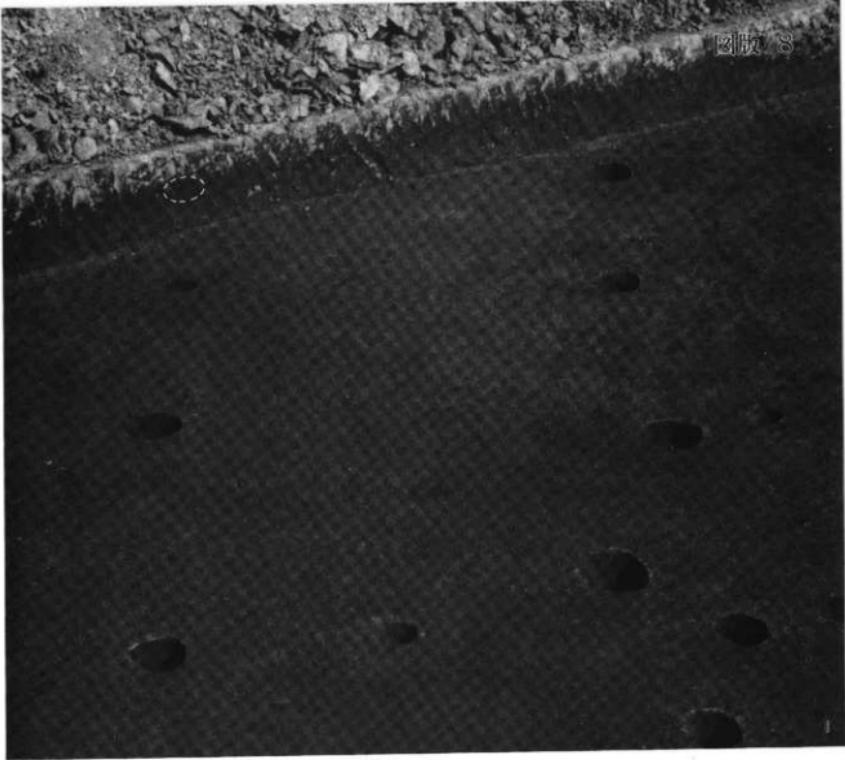
1. SH711
2. SH712
3. SH713

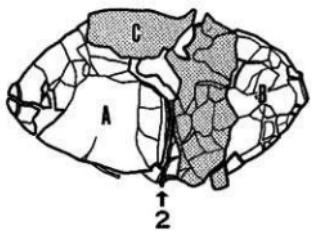
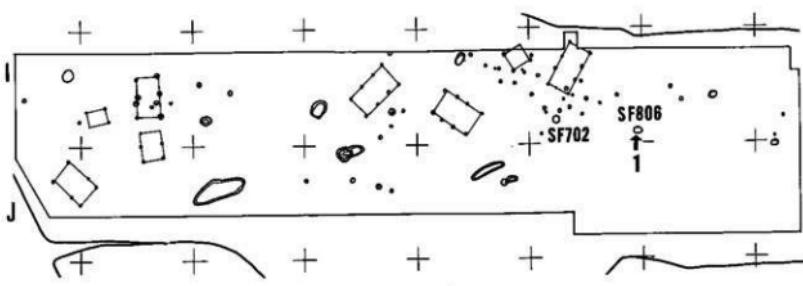




图版 8

1. 7 区据立柱建物 SH714
2. 土器棺墓 SF702

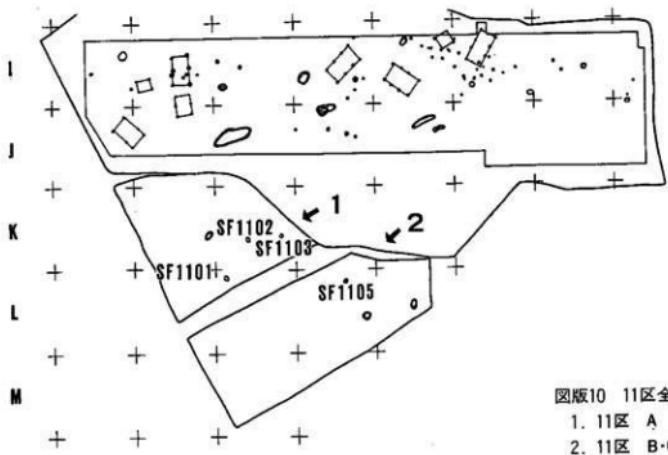




図版9 土器棺墓SF806

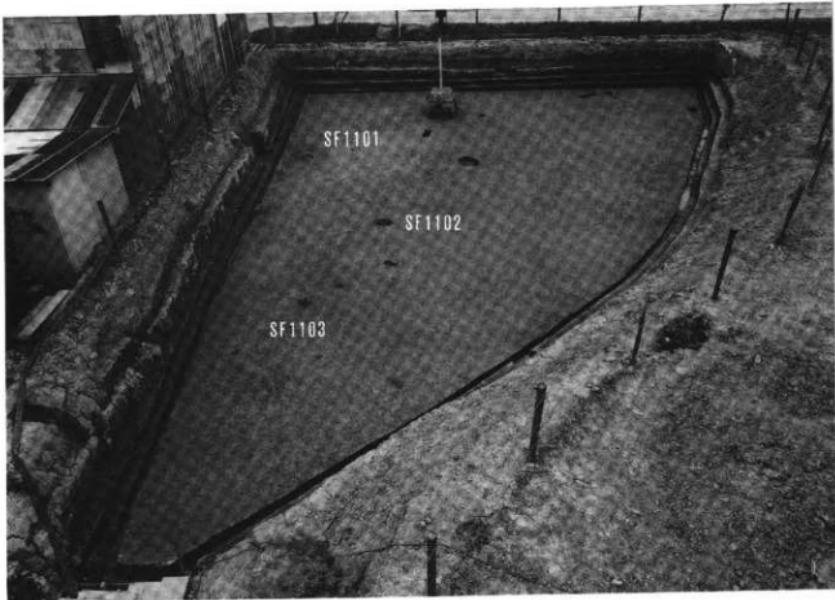
1. SF806検出時
2. SF806 合わせ口部分

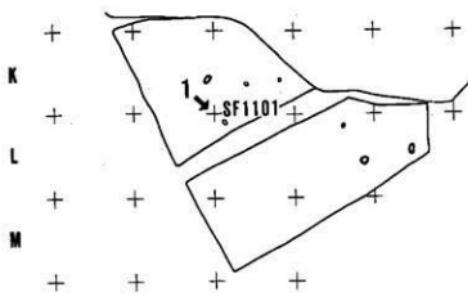




図版10 11区全景

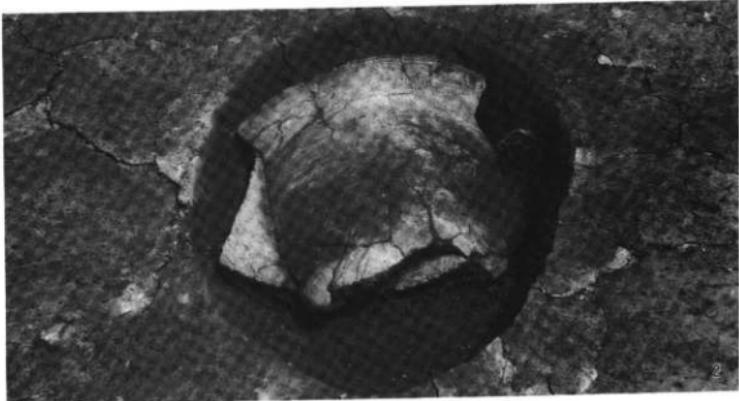
1. 11区 A
2. 11区 B-C

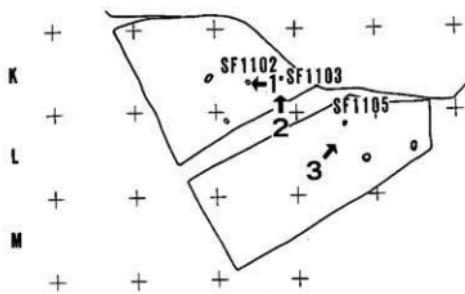




図版11 土器棺墓 SF1101

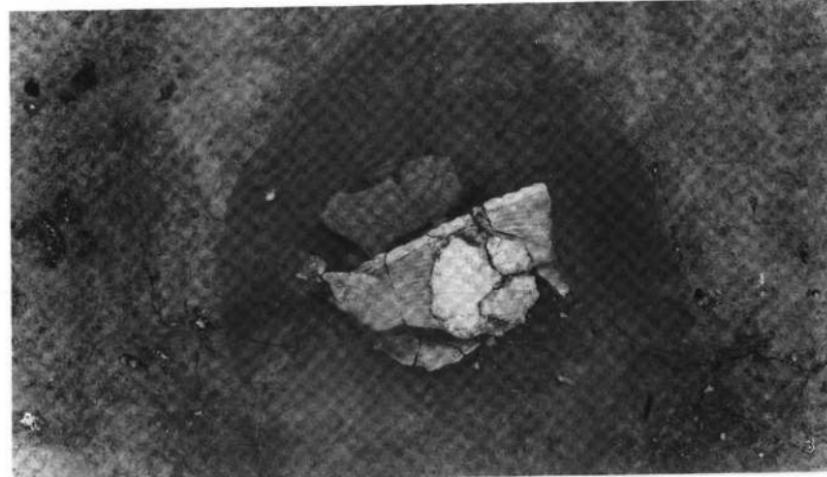
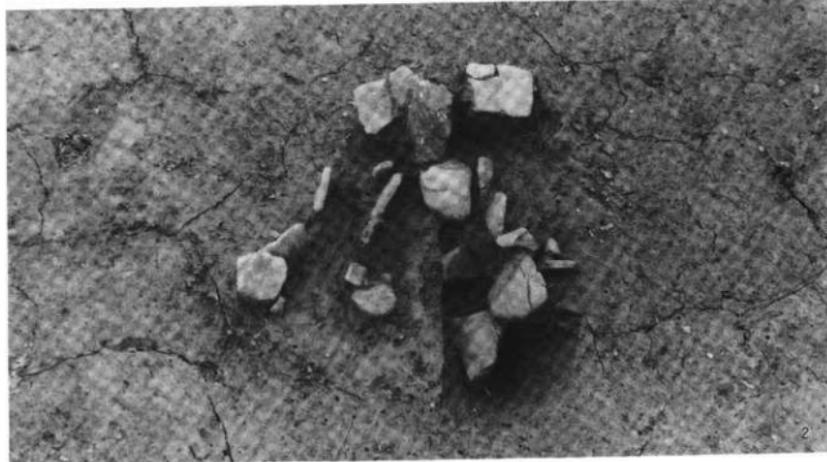
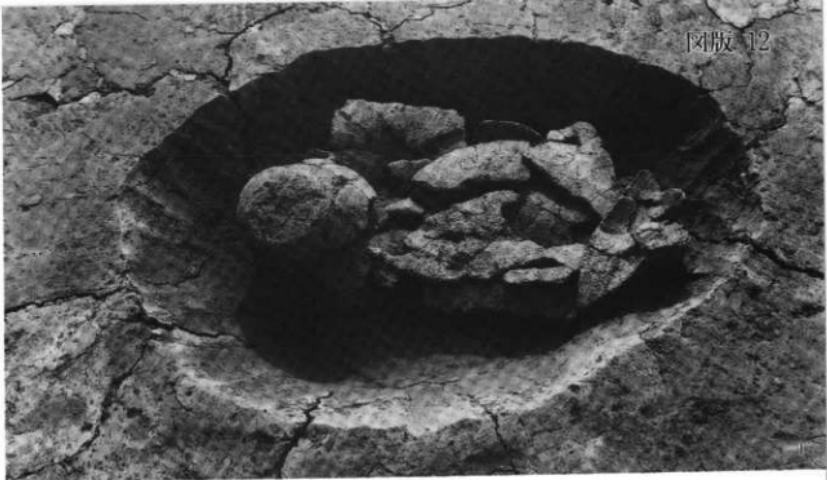
1. 検出時
2. 解体途中
3. 下側部分

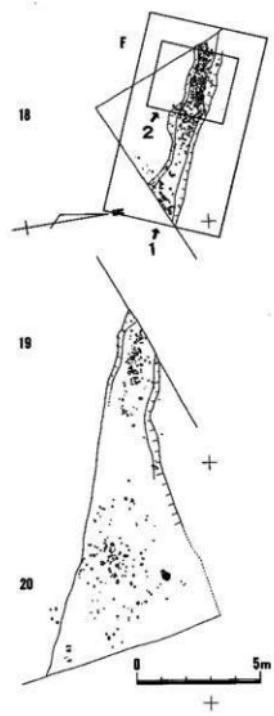




図版12 土器棺墓

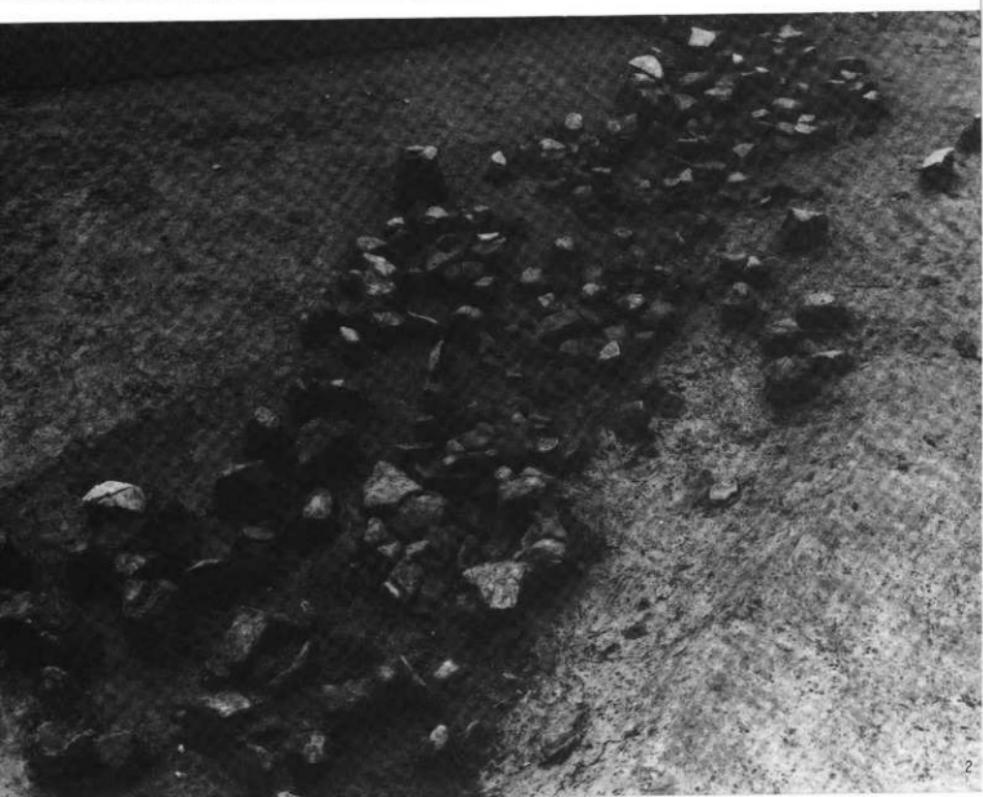
1. SF1102
2. SF1103
3. SF1105

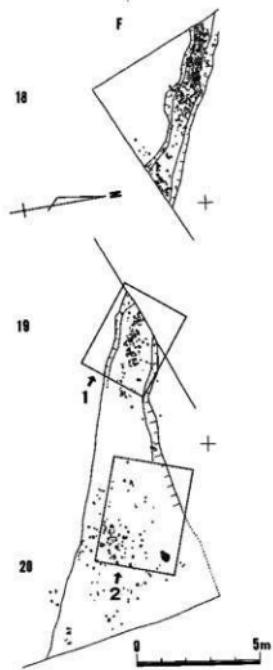




图版13 SD10B16 植出状況

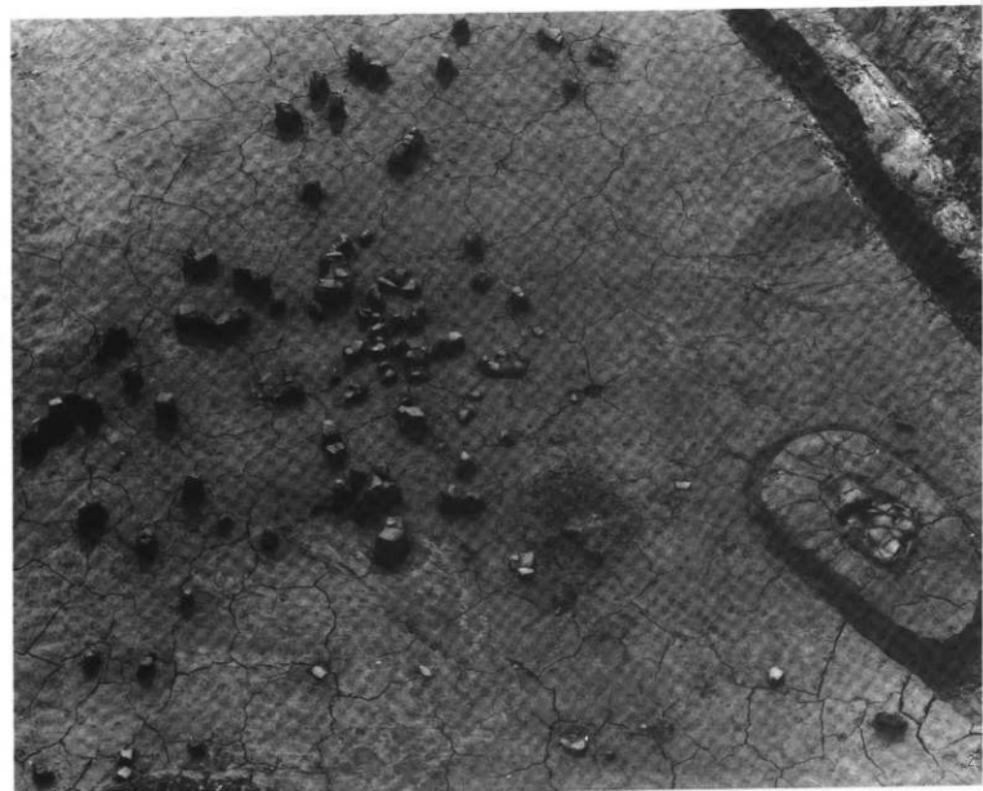
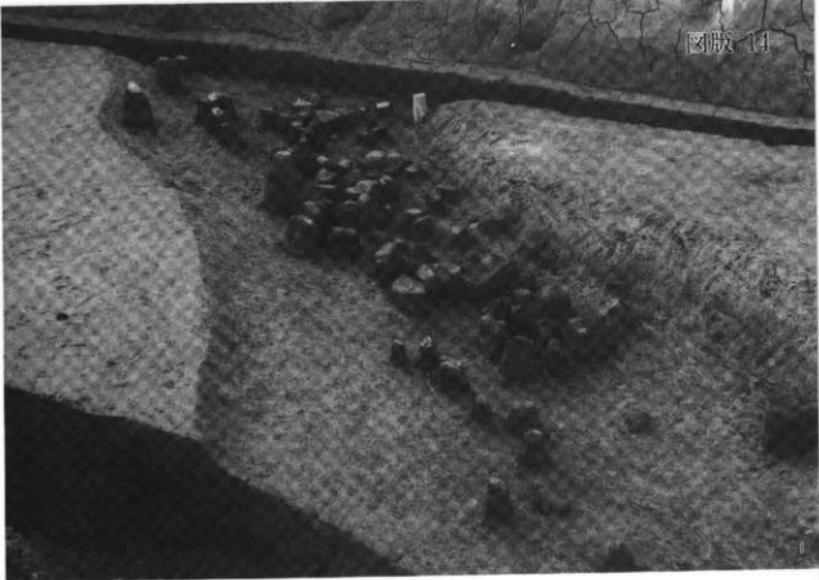
1. 10区B付近
2. 10区B部分拡大

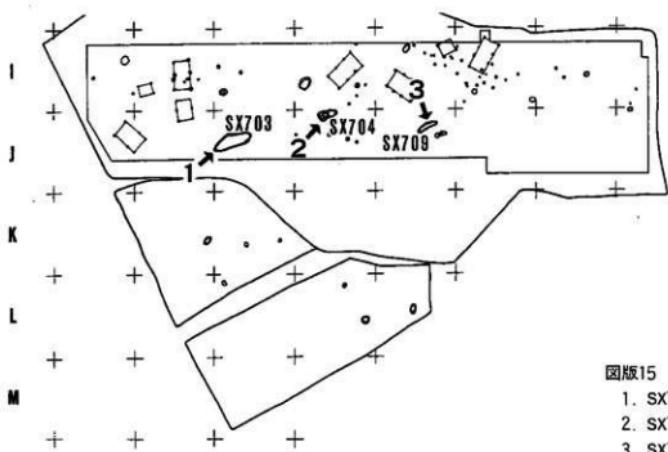




图版14 SD10B16 接出状况

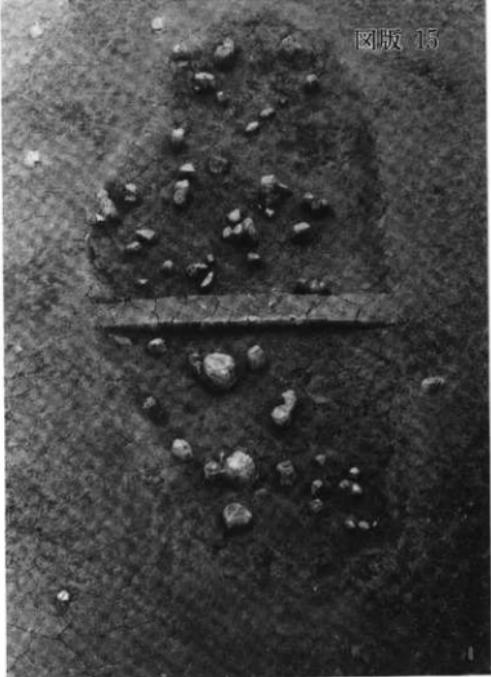
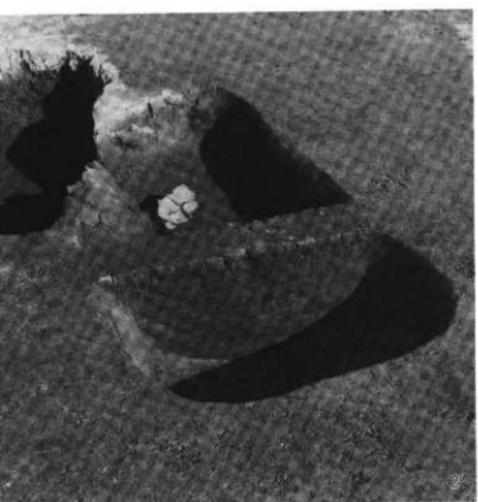
1. 第10区A西侧部分
2. 第10区A东侧部分





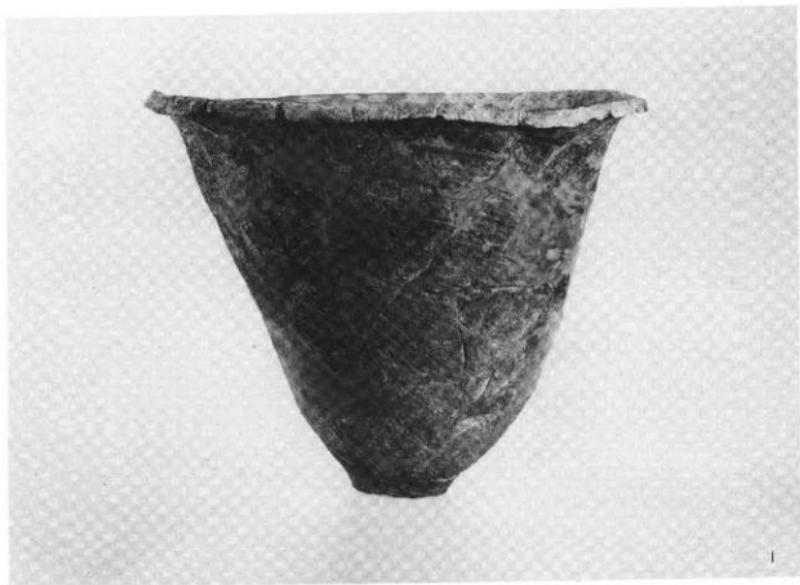
図版15

1. SX703
2. SX704
3. SX709



圖版16 復元遺物

1. 壺（土器棺 SF702）
2. 壺（土器棺 SF1101）



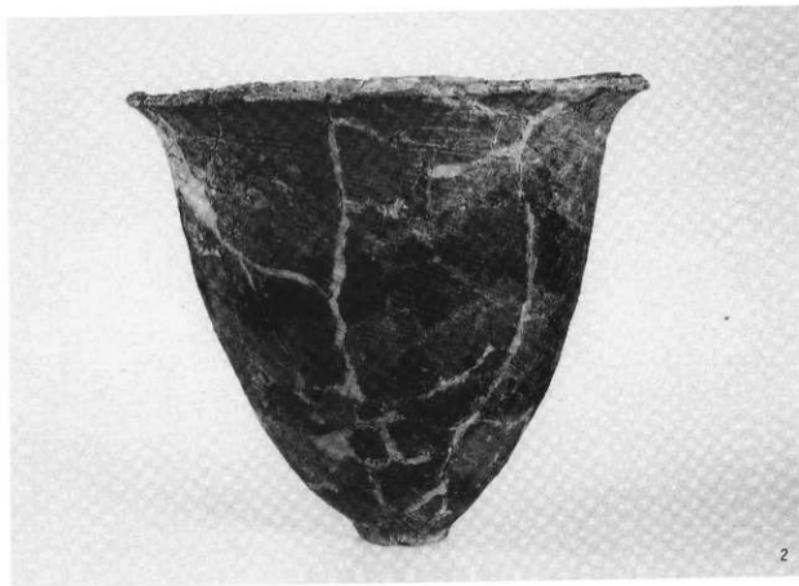
1



2

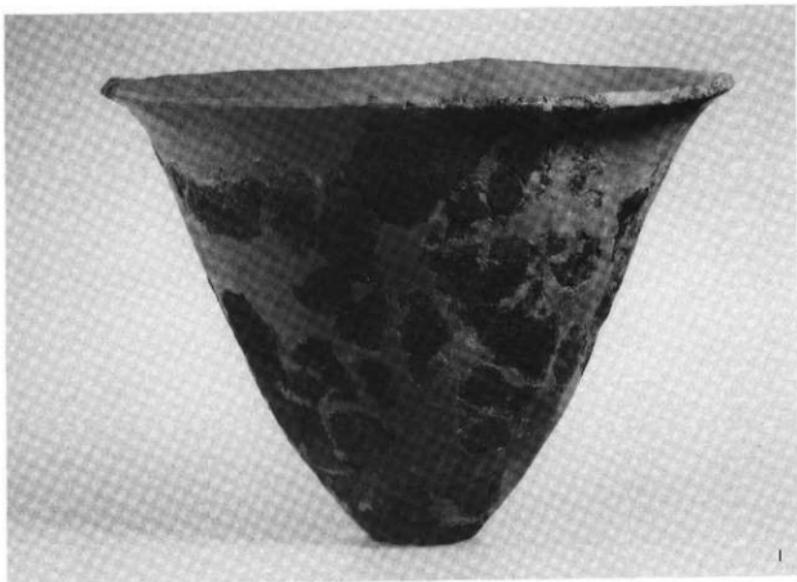
図版17 復元遺物

1. 壺 (土器棺 SF806A)
2. 壺 (土器棺 SF806B)



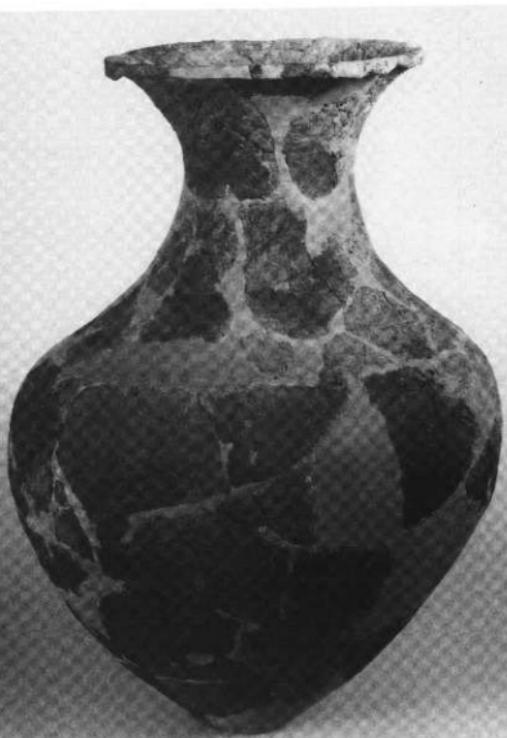
圖版18 復元遺物

1. 麽（土器棺 SF1102）
2. 大型広口壺（SD10B16）



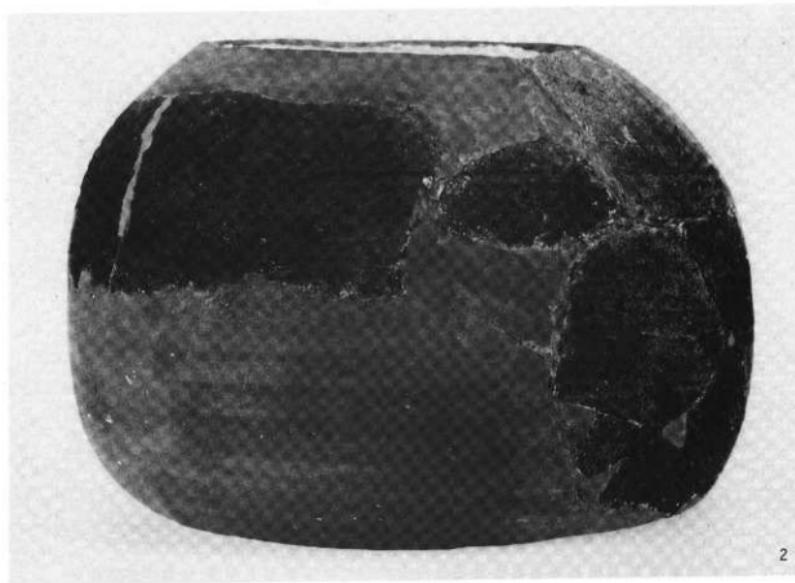
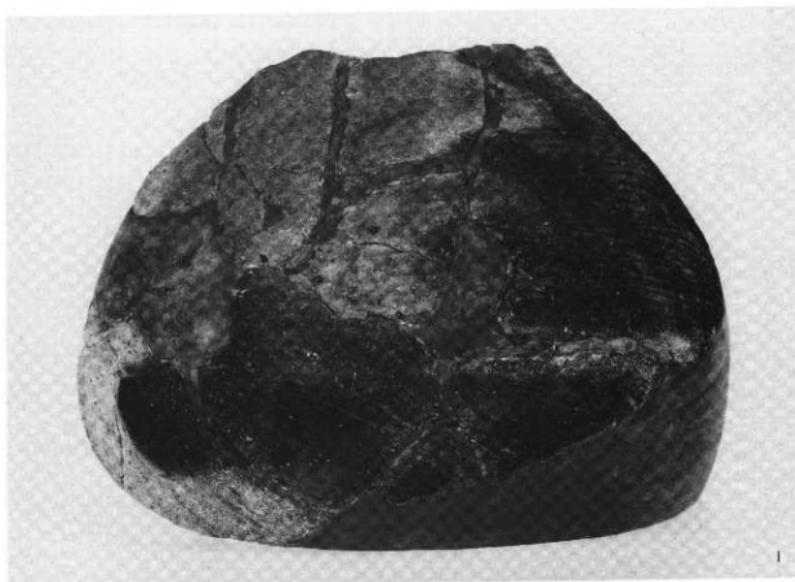
圖版19 復元遺物

1. 小型壺 (8區A包含層)
2. 小型壺 (10區B包含層)
3. 中型壺 (SD10B16)



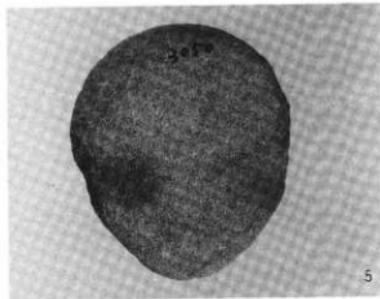
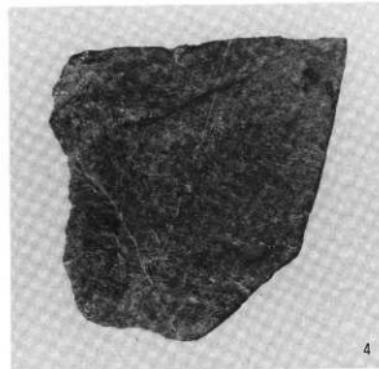
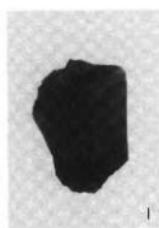
圖版20 復元遺物

1. 壺體部（包含層）
2. 壺體部（SD10B16）



図版21 石器

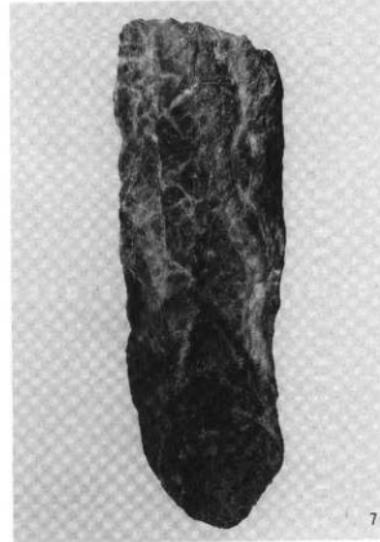
1. 黒耀石破片 (SH714 柱穴)
2. 黑耀石破片 (SD10816)
3. 磨製石剣 (6区包含層)
4. 打製石斧 (11区A包含層)
5. 叩き石 (11区A包含層)
6. 打製石斧 (1区包含層)
7. 打製石斧 (11区A包含層)



5



6



7

## 原川遺跡

I

昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)  
埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和63年3月30日

編集発行 財団法人  
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 株式会社 三創  
静岡市中村町166番地の1  
TEL (0542) 82-4031